

今、大地震が加古川地域を襲ったら？

— 「熟議 2016 in 兵庫大学」 報告書 —

2017年3月

兵庫大学・兵庫大学短期大学部

目次

はじめに「熟議 2016 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって	1
第 1 章 「熟議 2016 in 兵庫大学」実施について	3
第 2 章 議論の段階	17
第 3 章 熟議が高校生・大学生に与える影響 ～事前・事後アンケートと自己認識シートに見る高校生・大学生の変容～	41
第 4 章 熟議への意見と 「大地震が加古川地域を襲ったら？」への意識の変化	59
結論 今後の熟議の発展のために	95
資料編	
◇「熟議 2016 in 兵庫大学」開催結果	100
◇当日配布修了証書	103
◇熟慮関連資料	
・ 自己認識シート（事前）	104
・ 熟議の進め方	105
・ 熟慮講演会スライド	109
・ 事前アンケート	117
・ 寄稿	121
◇事後配布物	
・ 事後アンケート	125
・ 自己認識シート（事後）	129
◇学生事後研修資料	130

はじめに

「熟議 2016 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって

兵庫大学・兵庫大学短期大学部
学長 河野 真

2012年に文部科学省と共催で熟議を開催して以来、今年の「熟議 2016 in 兵庫大学」は5回目の開催となりました。

兵庫大学における「熟議」とは、熟慮と議論を併せた言葉で、市民自らが地域の課題解決について多世代で熟慮し、議論をすることを目指しています。また、熟議のすすめ方として、第1回目（2012年）開催の「熟議」以降、①熟慮、②議論、③共有、④振り返り、⑤活動の5つの段階を踏む「兵庫大学熟議手法」を採用しており、今年度は、①熟慮の段階でテーマである「防災、減災」についての事前講演を全参加者に実施し、テーマについての知識を身につけたうえで、当日に臨んでいただきました。

さて、「熟議 2016 in 兵庫大学」は、「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」をテーマにしています。南海トラフ巨大地震の予測が話題になるなど、日本全国、どこで地震が発生しても不思議ではありません。この加古川の地で、大地震が発生することを想定して、平時の今、私たち一人ひとりができることについて、共に考える機会としました。

熟議当日前半では、大地震について「防災」「発災」「復旧」「復興」という4つに分け、各フェーズで起こる事象を考え、事前に何を準備すればよいのか、減災のためのアイデアなどを出し合いました。後半では、それらを実現させるための具体的な方法を話し合い、グループごとに企画書にまとめました。また、交流会を行ない、加古川市総務部危機管理室から、地震発生直後に役立つ知恵として、ロープを用いた固定の方法など実践的な内容についてもご紹介いただきました。熟議の閉会時には参加者に「修了証書」を届けることができ、当日の様子を写真でご覧いただける工夫も行ないました。今回の熟議の成果を、本報告書からお読み取りいただければ幸いです。

最後に、本熟議に参加していただいたみなさまに深くお礼申し上げます。メインファシリテーターとして熟議の時間管理、進行をお引き受けいただいたNPO法人シミズシーズの柏木登起さま、事前学習のためにご講演をいただきました兵庫県立大学防災教育研究センターの紅谷昇平准教授及び宮本匠講師、ご多用の中、当日お越しいただいた岡田加古川市長、加古川市総務部危機管理室の岡本課長、地域の名物、銘菓をご提供いただきました地元企業様、各グループのファシリテーターとして事前研修に励み、当日のワークショップ運営にご尽力いただいた学生諸君、熟議実施にいたるまでの諸準備と報告書作成にご尽力いただいた熟議プロジェクトチームのみなさま、すべての関係者のみなさまに感謝申し上げます。

第1章 「熟議 2016 in 兵庫大学」 実施について

1. 実施計画

兵庫大学における「熟議」は今年度で5回目の実施となる。過去4回を振り返ると、1回目の「熟議 2012 in 兵庫大学」は文部科学省の「熟議カケアイ」の一環として、生涯学習を取り上げ生涯学習社会のあり方を明らかにした。これはその後の熟議の形式のひな型を形作った。これを機に、学内に熟議プロジェクトチームを結成。その協議により、2回目の「熟議 2013 in 兵庫大学」以降、テーマと目的を、当該地域の課題を①発見し、②解決策を探り、③自分たちでできることを明らかにする、という3段階、3か年によって地域の課題解決を来す方法として、熟議手法を取り入れることとした。こうして、試行錯誤を繰り返しながら熟議手法に係る経験を積む中で2点のことに思い至るようになった。

第一に、熟議手法が民主主義の学びとしての意義を持つことの発見である。熟議プロジェクトチームが確立した、熟慮、議論、共有、振り返り、活動の各段階で構成される熟議手法は、議論の結果の実現化という貴重な体験を参加者に提供し、このステップは成熟した市民（またはその代表）による議論を経て、政策として実現されるという民主主義を学ぶという意義を有する。

第二に、熟議の結果は、実際の政策にどの程度反映される、そうした保証があるのか、との疑問点を持ったことである。参加者の声から気付かされた点である。第3回の熟議、つまり「熟議 2014 in 兵庫大学」では、前年の「熟議 2013 in 兵庫大学」で見出した安全安心という課題への対応を議論し、結論では防犯カメラの整備などが挙げられた。そして、加古川市では2016年の事業として行政主体で自治体全域に防犯カメラを設けることになっている。とはいえ熟議の成果ではない。少なくとも、それを明確にすることは難しい。課題解決を議論しながらも、それは行政判断に影響を与えてはいない。行政へ影響を与えるための熟議という側面よりも、自ら事を成す熟議をより重視すべきと考えられる。

こうした点を踏まえ、「熟議 2016 in 兵庫大学」では、熟議手法が民主主義を学ぶ機会とすることを主眼としつつ、自律した活動を促す内容とする企画とした。特に、選挙年齢の引き下げ、との事情を踏まえ、これまでの「市民自らが地域の課題解決について多世代で熟慮し、議論をする」機会との役割に加え、「議論を重ねて得た結論を実現するという、民主主義の基本を、熟議を通して学ぶ」機会であり、いわゆる主権者教育とした。

そのため、募集に際しては、参加者層の7割以上を高校生、大学生といった若年層が占めることを想定した。

なお、例年熟議の企画・運営にあたる熟議プロジェクトチームについても、「熟議 2013 in 兵庫大学」から開始した3年計画を昨年度終えたことを受け、半数近くが新しいメンバーに入れ替わり、次の9名での始動となった。

熟議プロジェクトチーム（「熟議 2016 in 兵庫大学」）

- ・田端 和彦 兵庫大学・兵庫大学短期大学部 副学長（研究・社会連携担当）
エクステンション・カレッジ長 / 社会福祉学科 教授
- ・森下 博 現代ビジネス学科 准教授
- ・中本 淳 現代ビジネス学科 講師
- ・中井 玲子 栄養マネジメント学科 准教授
- ・米野 吉則 健康システム学科 助教
- ・斎藤 正寿 こども福祉学科 准教授
- ・小林 洋司 短期大学部保育科 講師
- ・岩崎 治夫 学長室長
- ・柏村 裕美 学長室員

2. テーマの決定・方針

私たちは、毎年のように日本のどこかで、台風や集中豪雨によって崖崩れや土石流、地滑りのような恐ろしい土砂災害が引き起こされるニュースを目にし、その被害に驚き、被災した人々の苦難に心を痛めている。そしてその度に、惨状に茫然自失の高齢の被災者が「何十年もこの土地で暮らしてきたが、こんなことは初めて！まさかこの場所がこんなことになるなんて・・・」という感想を取材の記者にもらすのを聞く。

現在、崖崩れや地滑りなどの土砂災害が起こるリスクが高い、いわゆる「土砂災害危険箇所」は日本全国で何と 53 万箇所あるといわれる。そして年間にその中の 1,000 箇所で実際に災害が起きているのである。起伏の激しい日本列島、どこで起きていても不思議ではない。しかしそれにもかかわらず、多くの被災者は「まさかここで起きるなんて！今まで起きてなかったのに！」という感想をもらすのは何故なのだろうか。

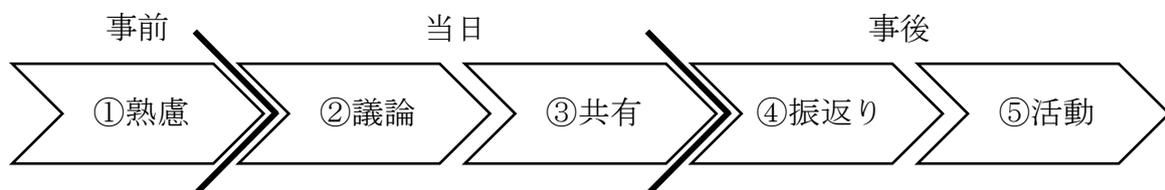
こうした心理は、「正常性バイアス」と呼ばれ、予期せぬ事態が発生しても「自分は大丈夫」「まだ大丈夫」と考えて都合の悪い情報を無視したりする心のメカニズムが働くのだとされる。もちろん私たちは、ある意味で心を「鈍感」にしておかないと日々安心して暮らしていけないわけで、「正常性バイアス」は私たちにある程度は必要なものなのであるが、こと大災害に際しては被害を拡大する方向に働きがちである。

私たちは 1995 年にこの兵庫で、2007 年には新潟で、2011 年には東北で、そして 2016 年には熊本で、巨大な地震とそのすさまじい被害を経験してきている。そこで起きた悲惨な出来事、復興への足取り、防災へのヒント等々、様々なものは、今やたくさん蓄積され私たちの眼前に提示されている。それらに強い関心を寄せながら、そして心を痛めながらも、どこか「他人事」として日常を生活している、それが私たちなのではないだろうか。

そこで「熟慮2016」では、「正常性バイアス」を出来るだけ取り払って、今この私たちが暮らす加古川の地で大地震が起こったら、果たして私たちは何をなすべきなのだろうか、これを高校生諸君とともに考えてみることにした。高校生諸君が、普段慣れ親しんでいる「あの道」「あの川」「あの校舎」「あの公園」「あの電車」「あの店」「あの人々」、そこに地震が起こったら・・・きわめてリアルにシミュレーションしてもらい、きわめて具体的に今なすべきことを議論して欲しい、これを今回のねらいとした。

3. 熟慮の段階の企画と実際

兵庫大学熟慮方式は、次のようなステップで進める。これは過去4年間の継続する熟慮の中で、確立してきた流れであり、今年度も踏襲された。



熟慮の段階は、議論に至るまでにテーマについて知り、調べ、考えるという機会である。参加者が、等しく一定以上の知識をもって議論当日を迎える為の事前学習は、限られた時間の中で、経験値に差がある多様な年代の方が参加する兵庫大学熟慮の性質を鑑みると、議論を深める上で不可欠なステップであり、丁寧に実施する必要がある。参加者募集の段階で熟慮講演会への出席を参加要件としたこともここに理由がある。

プロジェクトチームで検討を重ねた結果、今年はこの「熟慮」を兵庫県立大学防災教育研究センター教員の協力のもと、「講演会」によって進めることになった【表 1-3-1】。これまで、郵送物やウェブサイトを利用し学習する通信教育に近いやり方で事前学習を進めてきたが、今年は専門家から直接知識やヒントを得ることのできる講演会というスタイルを取ることで、インプットがより確実なものになると考えた結果である。

熟慮には、考える時間も必要である。講義の後、考える時間を取るとともに、事前段階においても、内容について、考察をすることができないか。講演会という一方的な講義方式で、参加者の考える機会を減じることは好ましくない、との意見もあり、まず講師への依頼に際しては、①参加者に考える機会を与える事、②事前の宿題を提示すること、を依頼した。

また、課題となったのが、熟慮（講演会）に参加できない参加者への対応である。多い人で3回、当日を入れると4回本学に足を運ばなければならない。参加者の負担を考え、2度の講演会と1回の研修を1日で全て実施するという案もプロジェクトチームで挙げたが、欠席者に対するリスク分散の面から分けて開催することにした。また、参加できなかった参加者については、講演会 DVD 視聴の機

会の提供や出張授業等の方法で熟議プロジェクトチームがフォローすることが確認され、実施された。

熟慮講演会

回	日程	時間	講師・テーマ
1回	10月22日 (土)	10:00～ 12:00	「地震災害のメカニズムと地域に求められる対策」 紅谷 昇平 氏 兵庫県立大学 防災教育研究センター 准教授
2回	11月05日 (土)	15:00～ 17:00	「災害支援とボランティア」 宮本 匠 氏 兵庫県立大学 防災教育研究センター 講師

表 1-3-1

本来、熟慮段階の講演については、別途章を起こし、それぞれ講師の執筆の元、報告をすることが望ましい。ただし、今回は参加者がどのような事を学んだのかを、身近にするために、講師の許可を得て、熟議プロジェクトメンバーによる採録の形をとる。なお、本節のみ、「企画と実際」とするのは、これが理由である。

熟慮講演会①

紅谷准教授による「地震災害のメカニズムと地域に求められる対策」と題した講演は、地震の被害との関係、そしてそれを想定することで、自らの身を守ることが主な構成となる。実際の講演では、事前学習を前提としてクイズ形式を取り入れている。紅谷准教授自身、啓発活動で小中学生への講義を日常的になされており、さらに当方からの依頼を踏まえての、講義工夫となっていた。

紅谷准教授からの事前学習の内容は、以下である。

1. 地震で、自分が死んだり、ケガをした場合、家族の生活がどのように変わるのか、考えてみる。また、家族、特に一家の生計に担い手が、地震で死亡したり、ケガをした場合、自分の生活がどのように変わるのか、考えてみる。

続いて、内容について、振り返っておく。

まず「防災の“当たり前” ウソ・ホント」で、地震と被害についての誤解を解く。地震の大きさを示す震度だけで、建物被害が大きくなる、ということでもない。震度とは最大の揺れを表すが、建物被害の大きさを決定するのは、震度、つまり揺れの「大きさ」、地震の揺れの「周期」、地震による揺れの「長さ」、そして建物自身の強度、である。すると、地震の種類によって、揺れの特徴が異なることを

理解しなければならない。地震を大きく、内陸型地震と海溝型地震に分けるならば、内陸型は大きな揺れが短く、海溝型は長く続くのである。

次に、メディアなどで取り上げられる、全国地震動予測地図にも誤解があるようで、発生確率と実際の地震発生とは必ずしも一致しないのである。というのも、この地図は、内陸型地震と海溝型地震とを合成して作成している。内陸型地震は、数百年～数千年に一度の割合で発生し、一方、海溝型地震は100年～150年に一度の割合で発生するのである。当然、観測の蓄積のある後者の方が予測しやすいため発生確率が高くなる。そして外すこともある。2013年4月の淡路島の地震で、兵庫県のフェニックス防災システムが予測の被害の大きさは、全半壊1,500棟に対し、実際は149棟とかなりの開きがあった。震災を予測するといっても、地震の発生する確率も被害の大きさでも、それがいかに困難であるかが想像できる。しかし、地震についての正しい知識を持って、対策をしていれば大丈夫である。

例えば、地震で命を落とす可能性と火災で亡くなる可能性のどちらが大きいのか、を考えると、実は統計上、火災での死亡率が高い。しかし中々、火災よりも地震のリスクを大きく考えがちである。リスク研究の第一人者である Slovic は、リスク認知を構成する2つの因子として「恐ろしさ」と「未知性」を挙げる。本当は火災の方がリスクは大きくとも、地震には未知性があるため、よりリスクが大きいと感じるのである。

次に、「震災のメカニズム」の内容では、地震と震災の違いをきちんと定義する。地震は自然現象であり、震災は地震により人や物に被害が発生することであり、自然現象が社会に影響を及ぼし、震災になるのである。そこで、災害を考えると、自然現象の大きさと同時に社会のあり方もその規模を決定することになる。例えば、同じ揺れであっても、社会の脆弱性が目立てば、被害はより甚大になる。社会の脆弱性とは、コミュニティでの対応遅れであり、より具体的には耐震化の遅れや避難訓練の欠如などが挙げられる。アメリカの報告書では自然災害はコミュニティに原因があり、コミュニティで解決していく問題ともいわれている。

災害の定義を踏まえ、地震の発生以後を3段階に分けて説明をする。すなわち「地震でなぜ命を失うのか」である。地震直後だけ人命が奪われるわけではない。この点は熟議において、地震の以前を含めた各段階での減災を考える上でカギとなる考え方である。

最初の段階、地震直後は、倒壊で命を失う危険がある。阪神・淡路大震災では実に83.7%の方がこの段階での建物、家具等の倒壊により圧死、圧迫死であった。命を守るには予防対策が欠かせない。住宅の耐震性が、生死を分けた形で、1/4を占めるといわれる構造の弱い古い住宅の改修が大事となる。

第2段階は直後から3日目あたりで火災や津波からの避難が重要となる。火災の場合、消防車が十分な数出動できなければ、数日続くこともある。津波の場合、30分～60分で到達する。その規模は押し波が15m、引き波が15mといわれ、押し寄せ、そして沖へ引き戻し死者を拡大する。東日本大震災では92%の方が津波の死者であり、うち2/3を避難が難しかった高齢者が占め、また障がい者の死亡率は一般の2倍に達したともいわれる。

そして、3日目以後が第3段階で、ここでは震災関連死が問題となる。中越地震では、関連死が直接の死者を上回ったという。本震の発生後2時間で3回の震度6の余震が発生したこともあり、余震を

恐れた被災者は自宅を離れ、自動車や避難所で長期間を過ごすことになる。ストレスによる心臓への負担、車中泊がもたらすいわゆるエコノミークラス症候群、さらに長期化するに従い、よりどころとなるコミュニティの崩壊に直面し、また生活を維持したくとも、雇用の喪失等に飲み込まれる。これらに悩み、自殺をする被災者もいる。避難者の特性に合わせた支援が欠かせない。

各段階における命を失う危険性の他、災害はそれまでの生活を一変させてしまう。そこで「震災によって、あなたの生活はどう変わる？」かを認識する必要がある。

実は、事前課題として、「地震で、自分が死んだり、ケガをした場合、家族の生活がどのように変わるのか、考えてみる。また、家族、特に一家の生計に担い手が、地震で死亡したり、ケガをした場合、自分の生活がどのように変わるのか、考えてみる」とが提示されていた。早速答えを聞くと、「家計を支える人が亡くなり、大学での勉強継続が難しい」「自分が死んだ場合、家族はまず探し、確認すればショックを受ける」などの答えがあった。

以前の生活との相違を挙げよう。

家族や友人を失った人にとっては心身の健康を失い、心のケアも必要である。もちろん、自身も受傷する。医療機関も混乱する中で、満足な治療を受けられず、通常であれば回復するはずのケガが原因で障害が残る、震災障害者問題もある。家を失うだけではなく、仮にローンを組んでいれば二重ローン問題も発生する。電気やガス、水道などのライフラインが止まり、交通機関も不通になり、生活は一気に不便になる。なにより、懐かしい故郷の風景が失われ、人間関係も失われる。築いてきたコミュニティを捨て、他地域に引っ越しせざるを得なくなる。また東日本大震災の震災関連倒産では 27,000 人余りの雇用が失われた。仕事を失い、生活困窮に陥りかねない。親を失った震災遺児は、阪神・淡路大震災では 600 人、うち 100 人は両親を失った震災孤児である。東日本大震災では、1,300 人の遺児と 250 人の孤児が出た。

ところで、震災と高齢者の関係は、特に、東日本大震災で避難の遅れから多くの方が命を失ったことを述べた。では、高齢者を助けることが命を守る震災対策かということ、統計上は異なる結果となる。若い人の死の場合、死因の 2 位は不慮の事故である。阪神・淡路大震災では、安アパートや下宿で命を落とした学生も少なくなかった。失われなくてもいい若者をまもる防災も重要なのである。

「地震に対して、家庭・地域が出来ること」は、熟議での議論における主題となるため、段階別で考えるヒントとなる。

第 1 段階への備えは、耐震改修が必要で、平塚市では NPO 法人が検証する、という仕組みもある。建物すべての改修が難しくとも、寝室のみを改修する部分改修も有効で、公的補助もある。それも難しければ耐震ベッドなるものも存在するが、いかにも高額である。

第 2 段階については、災害により避難先が異なること理解しておく。また地震の発生時、生き埋めになった人などを助け出すためにも、道具や情報を共有する。阪神・淡路大震災では、救助隊に救出されたのは 1.7%。自力で脱出ができなかった人は、家族や友人、通りがかりの方に助け出された。共助は高齢者だけのものではない。また安全に脱出をすれば、早めに自分の無事を知らせる。携帯電話の基地局のバッテリーは 2 時間しか持たない。

第3段階の事態に對してできることとして、自宅での備蓄がある。被害が広域であれば1週間程度、局地であれば3日程度は物資が届かないこともある。



熟慮講演会②

被災地を回り、復旧、復興についての発信を続ける宮本講師による「災害支援とボランティア」と題する講演である。特に、2016年に発生した熊本地震における具体的な内容を取り上げての講演となった。実際の詳細は、宮本講師のご厚意で提供された、資料を参考にして欲しい。講義は、熟議プロジェクトチームからの依頼もあり、学生との対話による理解の促進、との面もある。

なお、宮本講師の事前学習の内容は、以下である。

1. 熊本地震後の報道について、特にボランティアに関連するものを参照しておくこと

内容採録では、熊本県西原村のボランティアセンターの立ち上げとその役割に焦点をあてる。

さて、宮本講師によると、ボランティアはニーズに合った人員が存して成立するものである。結果、ニーズの順通りには進まないこともある。そうすると、ボランティアがいつ来てくれるかわからない、被災者の数が多く、ニーズがあってもボランティアが少ないという事態が生じる。被災当初は、被災者もボランティアに何を頼んでよいのか、わからないということが多くある。そして何を頼むことができるのか、わかってきた段階では、今度はボランティアの数が減少する、というマッチング（調整）の問題がある。

西原村での経緯について紹介しながら、マッチングを考える。まず、そのためのボランティア本部の設置場所であるが、対策の中心となる役場や市役所が被災したケースも少なくない。熊本地震でも例外ではない。熊本地震では、大きな余震が長く続き作業が進まなかった、という状況も見られた、また長雨による地盤の不安定化も見逃せない。そうした中、機材、道具を準備し4月20日に西原村に入った。

ニーズは日々変化する。だがボランティアはニーズを知らない。看護師が多くボランティアに来ていても、瓦礫処理のニーズが高ければ折角の資格を活かすことができず、双方に苦い思いが残る。

被災者は要望してもボランティアが来てくれない、ボランティア側にもこんな活動のはずじゃない、と。さらに熊本地震では報道もされ知られるようになったが、受付を締め切り、ボランティアが余る、ということすら生じる。これはボランティアセンターの役割とも関係がある。センターは被災者の要請がない限り派遣ができない。そして限られた人員では大人数の管理もできない。

ではニーズがないのか。障害者や外国人などコミュニケーションや習慣の問題で、ボランティアセンターそのものを知らず、ニーズを表明できない人も居るのである。ボランティアセンターが設ける壁の指摘も。熊本の場合、農業支援がそれにあたった。特産のサツマイモの植え付けの時期が農家の、住宅の片付けと重なり、本年度の農業をあきらめていた。これをボランティアに手伝ってもらえれば、との思いもあったが、収益につながることから支援ができない。ボランティアの原則である無償性が背景にあるが、当時の現地では、通常当てにできたアルバイトやシルバー人材センターの労働力が、自身の被災もあって機能をしなかつたのである。ただし、農業ボランティアの例がないわけではなく、八女市水害（平成24年7月九州北部豪雨）での事例もある¹。振り返ると、まだボランティアセンターによるマッチングという組織化された対応ができあがる以前、阪神・淡路大震災当時は、ボランティア自らが考え行動に移してきた。ボランティアセンターがガイドラインに沿って判断する、ということが本質的であるか、やはり問われざるを得ない。

管理には限界がある。地元西原村社会福祉協議会に設置された西原村ボランティアセンターでは、ボランティアを管理するのではなく、「ボランティアを信じる」という合言葉の下に運営がなされた。そこで採用されたのが、より被災者に近い位置でニーズを発見するサテライト方式である。具体的な方式は、宮本講師の資料（スライド）【p109】に詳しい。

サテライトには地元区長や民生委員も参加し、サテライトで地元の声、ニーズをマッチングする。どこぞからきたボランティアではなく、区長が地区を回りニーズを掘り起こし、それをサテライトに伝え、派遣をする。被災者からの正式な要望がなくともボランティアを出せる仕組みである。行政区域で一括するボランティアセンターとは異なり、サテライトごとに特徴も現れている。

さて、応急支援のボランティアから、継続的な地域支援への転換について、触れておく。ボランティアから地元の自立に向けての支援への転換である。農業ボランティアについては西原村百笑応援団に組織を転換、ボランティアではなく農家の会費制により、人材を派遣するようになった。また被災者がボランティアに対し支援をする、ということが見られた。自らで立ち上がろうとする人を支援しているのは地元出身者で神戸大在学中の学生が立ち上げた、わかば meeting であり、今後の活躍が期待されるのである。

¹ 朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）「戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）平成25年度研究開発実施報告書」（研究開発領域「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」／研究開発プロジェクト：「中山間地水害後の農林地復旧支援モデルに関する研究」）https://www.ristex.jp/examin/anzenanshin/PDF/h25_asahiro.pdf



次に、若年層の参加者（高校生・大学生）を対象に実施した「ワークショップ実践演習【表 1-3-2】」では、NPO 法人生涯学習サポート兵庫の山崎理事長に講師をお願いし、「ワークショップ」におけるルールを学びながら、短時間で自分の考えを意見としてまとめ、グループ内で発表する演習を行った。演習の中で講演会の内容を取り入れるなど、自信を持って議論に参加できるよう備えた。ただし、当該演習の内容は、NPO 法人生涯学習サポート兵庫に属するものであり、ここでの詳細の報告は控える。

ワークショップ実践研修（高校生・大学生対象）

回	日程	時間	講師・テーマ
1回	11月12日 (土)	10:00～ 11:30	「ワークショップ実践」 山崎 清治 氏 NPO 法人生涯学習サポート兵庫 理事長

表 1-3-2

なお、上記日程の研修会に参加することができなかった高等学校については、後日、熟議プロジェクトチームメンバーが出張により、別途、研修を行ったことを付記する。

4. 熟議ウェブサイトの運用について

本学は、地域連携のイベントとして熟議に取り組んでおり、その情報発信のため熟議の特設サイトを運用している。今年も「熟議 2016 in 兵庫大学」特設サイトを開設した。その開設の目的について、3点を示す。

1点目は、熟議について広く告知を行い参加者の募集につなげること、そして地域はもとより全国に発信することで兵庫大学・兵庫大学短期大学の知名度向上を図ることである。2点目は、事前学習に

関連する情報および資料を提供し、熟慮する段階の充実を図ること、また熟議当日の議論を深化させ、参加者にとっての参画意識と協働の可能性を高めることである。3点目は、熟議の成果等を提示することで、積み重ねてきた議論を共有し、さらなる活動と地域の活性化へとつなげることである。

これらをもとに、2016年7月1日より次のURLで公開を開始する運びとなった【図1-4-1】。

<http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/>



図1-4-1「熟議2016 in 兵庫大学」特設ページ（一部抜粋）

なお、大学の公式ウェブサイトのトップページのメインビジュアルに「熟議2016 in 兵庫大学」の開催案内と特設サイトへのリンクが設定された。

今回、特にウェブページが担った役割3点を挙げる。

① 熟議の参加募集（参加申し込みフォームへのリンク）

今回は、高校生や大学生を主体とする若者世代の熟議参加の方針が掲げられた。一方で幅広い世代の方々が集うのもこの熟議の特徴であり、社会人の方々にも募集を広げた。「熟議2016 in 兵庫大学」の実施要項を特設サイトに掲載して、多くの参加を促した。参加申し込みにあたっては、学長室のもと

で入力フォームの作成とデータ管理がおこなわれた。その参加申し込みフォームへの橋渡しをする役割を「熟議 2016 in 兵庫大学」特設サイトが担った。

② 熟議参加者への情報提示（熟慮のための講演会や研修会の告知）

熟議特設サイトは、本学の地域連携の取り組みを多くの方に発信することはもとより、熟議参加者へ必要な情報をすばやく伝達することも大きな役割である。熟議のテーマに関わる寄稿文を昨年度に引き続き掲載した。また、昨年度までの開催内容やその報告書について広く閲覧できるように掲載した。さらに、熟議当日の「議論の段階」の前におこなう「熟慮の段階」の伝達事項の周知の役割も欠かせない。今回は、テーマに対する認識と議論に臨む準備をするための講演会が外部講師を招いて2回おこなわれることになった。事前学習として本学に足を運んで頂く機会でもあり、開催案内の正確な情報提示など、できる限りすみやかにおこなった。

③ 熟議当日の成果や様子の提示（企画や写真の公開）

本学の熟議手法において、「議論の段階」の後の「振り返りの段階」「共有の段階」の充実に関して、今回熟議特設サイトを用いたあらたな試みをおこなった。当日どのように熟議がおこなわれたか、仲間との時間の共有を後から振り返りができるよう、その様子をおさめた写真を参加者間で閲覧できるようにした。なお、閲覧に必要なユーザ名とパスワードを設け、熟議の修了証とともに通知した。さらに、熟議当日の各グループの成果について、模造紙やフリップにまとめられたものも同時に見られるようにした。どのような議論がなされたか、どのようなアイデアが出されたかをじっくりと見渡し、共有するとともに「活動の段階」への一步を踏み出すきっかけにするためのものとして実施した。

本学がおこなっている熟議は「熟慮の段階」「議論の段階」「共有の段階」「振り返りの段階」「活動の段階」の5段階で構成される。それぞれの段階を活性化するための一つのツールとして、熟議の特設サイトの役割は大きい。昨年度は、「熟慮の段階」でのメディアを活用したネット学習形態を取り入れた試みを実施した。今年度は、「共有の段階」「振り返りの段階」から「活動の段階」へのつなぎを意識した試みを実施した。事後学習やその後の活動にまで関わることのできる仕組みが今後は望まれる。議論の段階における即時性のある情報のアップを含め、どの段階も発展できる可能性がある。情報発信と共有の果たすべき役割を再認識するとともに今後の検討課題としたい。

この熟議の特設サイトの利用について、熟議参加者に限定されることなく、多くの方々に見て頂けるよう、そしてコミュニティとしての場になることが望まれる。これまで積み重ねてきた熟議のコンテンツを発信し、さらに本学の取り組みの一つとして進化し続けていくことが、地域に根ざした本学の使命であると考えている。

5. 熟議当日（議論・共有・振り返り）の企画

(1) 議論・共有の段階の企画

「熟議 2016 in 兵庫大学」11月20日（日）開催日当日では、2段階の議論を軸に進行することが計画された。参加者の満足度を高めるという観点から、2段階の議論の連続性を明確にし、最終のまとめとしてグループ毎に企画書を作成、紹介するということが当日の到達目標とした。

これらを踏まえ、次のような当日プログラムを確定した。また、ワークショップ全体のコーディネーターとして、メインファシリテーターを加古川に拠点を置く特定非営利活動法人シミズシーズ代表理事の柏木登起氏に依頼をした。

	時 間	所要時間	内 容
全体会	9:30~10:00	(30分)	受付
	10:00~10:05	(5分)	開会（司会：学生 森本優太） 主催者代表挨拶：河野学長
	10:05~10:15	(10分)	テーマ等の説明とサポーターの紹介：熟議 PT 中井准教授
グループワーク	10:15~10:30	(15分)	アイスブレイキング メインファシリテータ：柏木登起氏（NPO 法人シミズシーズ）
	10:30~11:50	(80分)	第1段階議論（ワークショップ）
	11:50~12:00	(10分)	岡田加古川市長あいさつ
	12:00~12:40	(40分)	昼食・交流会（協賛お菓子試食）
	12:40~13:10	(30分)	「災害時に役に立つ知恵」（実演） 加古川市総務部危機管理室岡本課長
	13:10~13:20	(10分)	質問への回答
	13:20~14:10	(50分)	第2段階議論（ワークショップ）
	14:10~14:40	(30分)	まとめ（休憩）
	14:40~15:20	(40分)	発表・共有（1グループ2分×10グループ） 質疑応答
全体会	15:20~15:30	(10分)	講評：加古川市総務部危機管理室岡本課長、 兵庫県立大学防災教育研究センター宮本講師 閉会挨拶：田端副学長（熟議 PT リーダー）
	15:30		閉会（アンケート回収）

まず議論の段階となるグループワークの内容の企画について説明する。

テーマ「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」のもと、午前中に行われる第一段階の議論では、「防災」「発災」「復旧」「復興」の4つの異なる時間軸において、各自が考える減災のアイデアについて意見を出し合い、その結果をフリップにまとめ発表する。時間軸を4つ設けるのは、震災の後の被災者や被災状況により、支援の内容、手法が変化をするためである。減災を考える上で、講義でも明らかのように、事前の取り組みとして防災を挙げた。この結果、参加者がそれぞれ自分の考えた減災アイデアを出し合った場合、どこで使われるべきアイデアなのかを整理し、その認識を共有することが可能となる。

次に、第一段階の発表を受け、一度情報の共有を行う。なお、岡田康裕加古川市長のご臨席と併せて、コメントを頂く予定である。現在の加古川市の防災に関する現状を交えながらコメントしていただくよう依頼をした。

午後の第二段階の議論では、午前中に出たそれぞれのグループでの減災のアイデアのうちの1つをさらに掘り下げ企画書を完成させる。手順は、アイデアの内容を明らかにし、想定される課題・問題を洗い出した上で、具体的な実施方法を考えるというものである。いわゆる企画書づくりというもので、この企画書はグループごとに模造紙にまとめ、熟議手法の段階でいうところの「共有」段階において発表し、参加者全体で共有する。

(2) 加古川地域で行う「熟議」の実現に向けて

兵庫大学熟議手法は5つの段階を要することは繰り返し述べてきた。既に課題として挙げたように、これを実現化することは、特にそれが当日出てきたアイデアであればなおさら、実際難しい。実現化の方向としては、①行政による政策化、②自らの手による実現、があり、今次の熟議では②の方向をより重視する。そのため、第1回目の熟議「熟議2012 in 兵庫大学」では、「活動」の段階へつなげるために、終了後、参加者の交流会を実施したことに鑑み、中間段階で、交流の時間を設け、活動へ繋がるきっかけになるのではないかとということが挙げられた。

交流を円滑に進めるためには、通常と雰囲気を変える必要もある。そこで、案として、その交流時間に加古川地域のお菓子の提供により場を和ませ同時に「地域」をより意識するのではないかと案もできた。加古川観光協会事務局の協力の元、同会員へ菓子提供の依頼文を送付、3社4種類の菓子合計400個の提供を受けることとなった。ここで企業名を挙げておくと、株式会社春光堂、ニシカワ食品株式会社、株式会社奈央である。改めて感謝を申し上げたい。

本学の熟議は継続して「加古川地域」を想定した議論の場であった。2014年度からと同じく加古川市に共催団体として参加を求め、了承を得た。今回、主眼とする高校生の募集に際しては加印地区全ての県立高校からの生徒参加を求め、それに応じて頂いている。主権者教育の側面があることを重視し、その点についての意義も重ねて高校側に説明したことはいうまでもない。その結果、参加予定者は、高校生が45名、本学の学生が8名、一般の方12名の合計65名である。後に述べるようにファシリテーターを本学学生が務めることとなり、その数は10名である。

(3) 兵庫大学熟議手法の特徴を活かして

兵庫大学熟議手法の特徴としては、まず討議型世論調査の手法を応用している点がある。討議型世論調査では参加者に対し、熟慮、議論の前後でのアンケート調査により、意見や態度の変化を見る。従前より、兵庫大学熟議手法では、記名式での事前、事後のアンケートを行っている。過去4回のアンケートにおいて、熟議の進め方については共通しており、テーマに関連した質問項目を設けることとなっている。この項目については、事前と事後での変化を追跡することができるよう同一の質問としている。

事前アンケートは、『「熟議 2016 in 兵庫大学」の進め方(資料 A)』と一緒に郵送による送付・回収をおこなった。一方、事後アンケートは、議論の当日、全てのプログラムの終了後に実施する。両者とも記名式のアンケートであるため、事前と事後の変化を個人ベースで追跡し分析することを可能にしている。

次に、学生の参加について触れる。兵庫大学では、「熟議 2012 in 兵庫大学」以来、学生がファシリテーターを務め、熟議の機会を学生の教育に活かす。学生の参加は兵庫大学熟議手法の一つの特徴と言える。熟議に参加する学生及び高校生に対しては、主として自己認識シートにより、教育効果について分析をしており、これまで高い教育効果が得られていることを明らかにしており、「熟議 2016 in 兵庫大学」でも引き続き検証することになった。「ファシリテーター養成の為の研修」は前述の「ワークショップ実践研修(高校生・大学生対象)」の講師を務めていただいた生涯学習サポート兵庫の山崎理事長に重ねてお願いした。

学生はファシリテーターを務める者と、ワークショップに参加する者と2つの役割に分かれるが、その役割は本人の希望、学年や経験等の適性を考慮し研修期間内で熟議プロジェクトチームによって決定される。従って、本学学生は参加形態に拘わらず全員がファシリテーター研修及び熟慮の為の研修に参加する。これは、ファシリテーターは議論内容について無知では円滑な進行が難しい。また、ワークショップ参加学生もファシリテーション技術をもった上で参加することで、グループの雰囲気や議論内容がどのように進行しているのか客観的な視線をもってみる事ができる為、ファシリテーターを支えるキーパーソンになり得ると考えてのことである。

併せて、会場についても触れておく。大学教育における主体的な学びの実現のために、本学では Learning Commons という、学生が討議を行い、調べ、学習するための施設を2016年から運用している。趣旨を踏まえると熟議に最も適した場所でもある。今回は、熟慮によりある程度、事前学習をしたことを前提とするが、特に、加古川市や周辺自治体の防災情報などをその場で確認するなど、情報収集の機能をもう少し活かすなどの工夫の余地はあったかもしれない。

(田端和彦・斎藤正寿・森下博・柏村裕美)

第2章 議論の段階

1. 解決のアイデア出しと企画化の流れ

兵庫大学における「熟議」のメソッドには熟慮の段階を伴う。テーマに対して熟慮を行い、熟慮の結果を持ち寄ることによってはじめて議論が成り立つという前提に立つからである。

その上で、熟議の本番の議論の段階では、どのように議論を展開するのか、は重要な課題となる。本学の熟議手法でも同様であるが、しばしば用いられるグループワークは、課題を見出し解決のための議論を広げ、そして議論を収束させる中で、合意を得る過程を含むものである。これまで熟議は課題の表出とその解決を議論する、ということでグループワークを実施してきた。

「熟議 2016 in 兵庫大学」では、「今、大震災が加古川地域を襲ったら？」と課題は明確である。「熟議 2016 in 兵庫大学」での熟慮段階では、防災から復興に向けての流れに沿って解説をした。また講師が課題を出し、参加者は事前に考えることになっていた。これは熟慮の段階で、加古川地域が地震に襲われたことを想定してもらうためであった。これにより、いざ直面をした場合に、いかに被害を小さくするか、つまり減災のためのアイデアを出すことが可能になる。

さて、熟慮の段階でも示したように、災害への対応は、発災の以前からの備え、すなわち防災、そして発災から、避難、復旧と元の生活を被災者の多くが取り戻す、復興の終わりまでの期間での、各段階での対応が求められる。この段階別で、防災のためのアイデアは考えられるべきであろう。そこで、最初に、下記のような段階別での記載を行い、段階別に防災の、あるいは命を守るためのアイデアを出していく。「『減災』のためのアイデアを出し合おう！」とのテーマを議論の第一段階とする。

防災	発災	復旧	復興

3~5 つに絞ったアイデアについては「私たちの減災アイデアは〇〇〇〇です」というフリップにまとめる。それを紹介することで第一段階は終了する。

第二段階の内容を考えるにあたって、熟議プロジェクトチームの懸念の一つが、今回、高校生が参加者の主体となっているが、経験豊かな一般参加者、特にこの分野に関心の高い人々の中で、高校生が委

縮し意見を出せないことであった。高校生には、過去の経験に頼らない新たな視点と発想があり、それは年長者の参加者が経験に裏打ちされた、事実の延長とは異なる。課題の解決には、確かにひらめきに基づくような、若者ならではのものもある。しかし、それらが過去の事実からの指摘（それは一度やって失敗したことがある、など）により潰される懸念もあった。そこで、第二段階では、防災への関心の有無やその経験の長短を問わず可能なこと、つまり、出てきたアイデアを企画化する、という観点を含めた。企画化は解決策の応用であり、その企画には「防災グッズ」や防災に役立つ「アプリ」開発などむしろ高校生などの関心のあることも想定した。

3～5つのアイデアのうちどの企画を具体化していくかをグループで検討、1つを取り上げて具体的な企画書く、ということである。そして、第二段階のテーマを『「減災」のためのアイデアを具体的な企画にしよう！』とした。企画化ということは、実現可能な要件を付加して、形にすることであり、「どんな目的で」「誰が」「どんな風に」「どんな内容を」なのか、必要な情報を互いに共有しながら、形作っていった。それらを最後に発表するのである。

ところで、今回の議論の段階での特徴は、第2段階での「企画化」であろう。自治体や企業では、企画書づくりは特に珍しいことではないだろう。社会人であれば、何らかの事業を行う際に、その内容はさておき企画書は不可欠である。企画化の際には、事業目的の明確化や必要となる機材や人材、具体的な方法と予想される困難や阻害要因とそれの解決策、時には他の方法と比較しての優位性（コストや失敗リスクなど）を明確にしなければならない。

高校生では、——生徒会の役員であれば、生徒会活動の企画書を作成する、ということはあるが——通常の授業等でなかなか企画書を作る機会にはない。企画書に不慣れであることを想定して、第二段階では、メインファシリテーターが順を追って企画化の説明を行い、これを踏まえての議論を行った。とはいえ、慣れない者同士、グループで作成することは、実は相当高いハードルでもある。とはいえ、企画化の流れを学ぶことで、実際の課題解決をより具体的にイメージすることができるのではないか。

国や自治体の組織を見ると企画と名のつく部署は少なくない。企画を作るのは官僚の仕事、というようだ。政治家は方向性を示し、具体的な政策にするには、実現可能性を踏まえつつ着実に実行する官僚が向いている、というのであろうか。政治家を選ぶ有権者は、政党が示すマニフェストや政治家個人が掲げる公約を単なる方向性として受け取っているのであろうか。恐らくは違うであろう。マニフェストや公約にある政策の多くは目標値を立てた実現可能な企画、と受け取っているのではないか。ところが達成時期や財源などの裏付けを含むマニフェストを出してきても、結局、実現できるものは限定されている。現在、マニフェストももはや検証が困難なほど、精緻化を欠いている。

その理由はさておき、主権者教育において企画化を学ぶことの意味はここにある。主権者教育の一環として、現実の課題解決の方法を企画しマニフェストを作成する（できればその評価も行う）、というのは魅力的なアイデアである。

2. 本章の構成

今回、議論の舞台となるテーブルであるが、参加者の人数を踏まえ A から J までを用意、それぞれのテーブルに集う参加者をグループとして扱うこととする。各グループは、大学生のファシリテーターが 1 名、高校生と大学生、及び社会人の参加者の 6～8 名により構成される。それぞれのグループにより若干の相違があるが、高校生と大学生が 5～6 名、社会人が 1～2 名という内訳で、いずれも若年者の方が多い構成である。

以下、本章では A から J で行われた 2 つの段階の議論、すなわち、第一段階での減災のアイデア出しにより議論を広げ——もちろん、闇雲に広げることが難しいために、熟慮段階での学びを活かし、防災から復興までの流れの中でのことだが——、そして第二段階でアイデアの絞り込みとその企画化についての成果でもあり、議論の過程でもある 2 種類の模造紙をグループ毎に掲げるとともに、絞ったアイデアをフリップに示している。その上で、熟議プロジェクトメンバーの観察等に基づく解説と、具体的な企画を記載する。グループで 2 つの段階の議論が見開きになるように配置しており、ページ上段に模造紙の写真を、下段には解説文を記載する。

なお、議論についてのまとめは、結論での考察に記載する。

(解説者 グループ A,B:米野吉則 C,D:小林洋司 E,J:中本淳 F,G:中井玲子 H,I:斎藤正寿)

Aグループ



【解説】

「減災」に向けたアイデアを出し合うでは、防災段階に集中する議論であった。発災段階や復旧、復興段階については少ないながらも意見が出されていた。4つの段階において減災に繋がるアイデアに着目して議論が展開された。結果的には「地域における情報の共有」や「人との関わり」、「家具の固定」に集約された。

＜防災段階＞ 避難訓練や防災イベントへの参加、防災についての授業の実施、防災士の育成、家具の固定、食料備蓄、スマホの電源確保、地震保険などソフト面、ハード面双方の意見が多く出された。

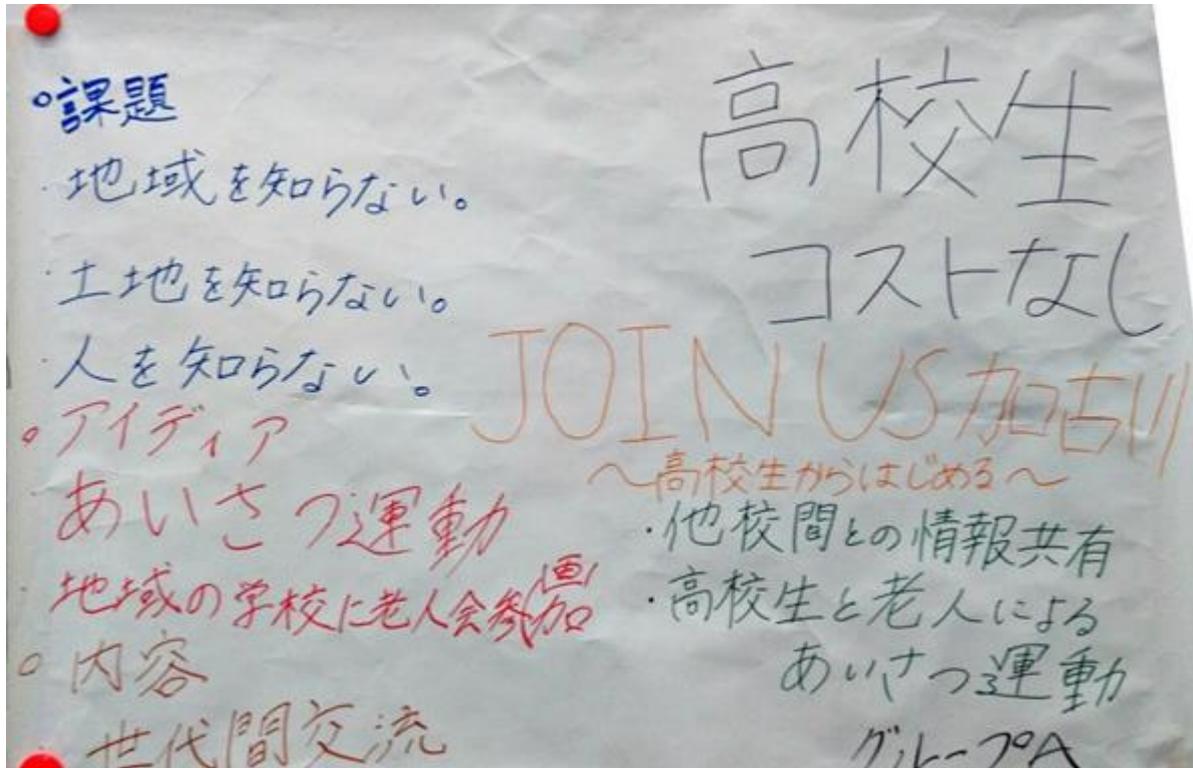
＜発災段階＞ 防災段階で議論された内容を土台に、発災段階では具体性、機能性を加味して議論されていた。例えば、避難訓練の実施(防災段階のアイデア→10名以下の集団で行動する(発災段階のアイデア)など。

＜復旧、復興段階＞ 他の地域コミュニティの交流、ボランティアへの参加など少ないながらも支援に向けた意見が多く出された。その中で、復旧や復興への支援は、地域特性を配慮するなど質的な支援が必要であり、そのために防災段階での地域交流、継続的な支援活動が効果的ではないかという議論がなされた。

私たち A グループの減災アイデアは、

- ◆人と話すことでストレスを貯めない
- ◆家具を固定する
- ◆地域を良く知り情報を共有する です。

Aグループ



【企画】 JOIN US 加古川 ~ 高校生からはじめる ~

前半の議論で集約されたアイデアのうち、「地域における情報の共有」と「人との関わり」をキーワードに企画案を作成していった。

防災、発災、復旧、復興の4つの段階に共通して「地域を知らない、土地を知らない、人を知らない」ことは、支援を実施する際の課題になるのではないかという議論がなされた。地域、土地、人の3つの「知らない」を「知る」に変えるためには、加古川地域に関わる人々が「仲間になろう、一緒にしよう」といった地域と関わり合う土壌を醸成する必要があると、意見がまとまった。

企画案としての具体的な意見は時間的な問題から十分ではなかったが、その中でも、「高校生はコストがかからない」という意見が出された。イベント企画としては、費用がかかることで二の足を踏んでしまう傾向にあり、実現されないリスクも高く、求める土壌作りにはつながらない。高校生は時間、体力ともにあふれているのではないかという意見から、高校生が挨拶運動や地域の老人会への参加などのイベントを主導することは、スピード感のある地域と関わり合う土壌を生み出せる効果的な方法ではないかという意見にまとまった。

Bグループ



【解説】

『減災』のために出された意見は、防災段階の視点が話題の中心であった。集約されたアイデアは、「高齢者(障害者)の体力強化」、「火災が起きた時のため池の活用」、「大学生や高校生や地域の人によるコミュニティを深める行事の実施」、「ヘリポート・食料保管ができる場所の確認」、「兵庫大学による救命講習」である。

＜防災段階＞ 高齢者や子どもを持つ家庭への対策、避難

所や避難ルートなど避難方法、家族や地域のコミュニケーション、家具の固定や自宅の耐震化とさまざまな立場から意見が出されていた。また、「人」でも高齢者や子供、障がい者、妊婦など様々な母集団を想定して避難困難者の支援に向けた議論がなされていた。

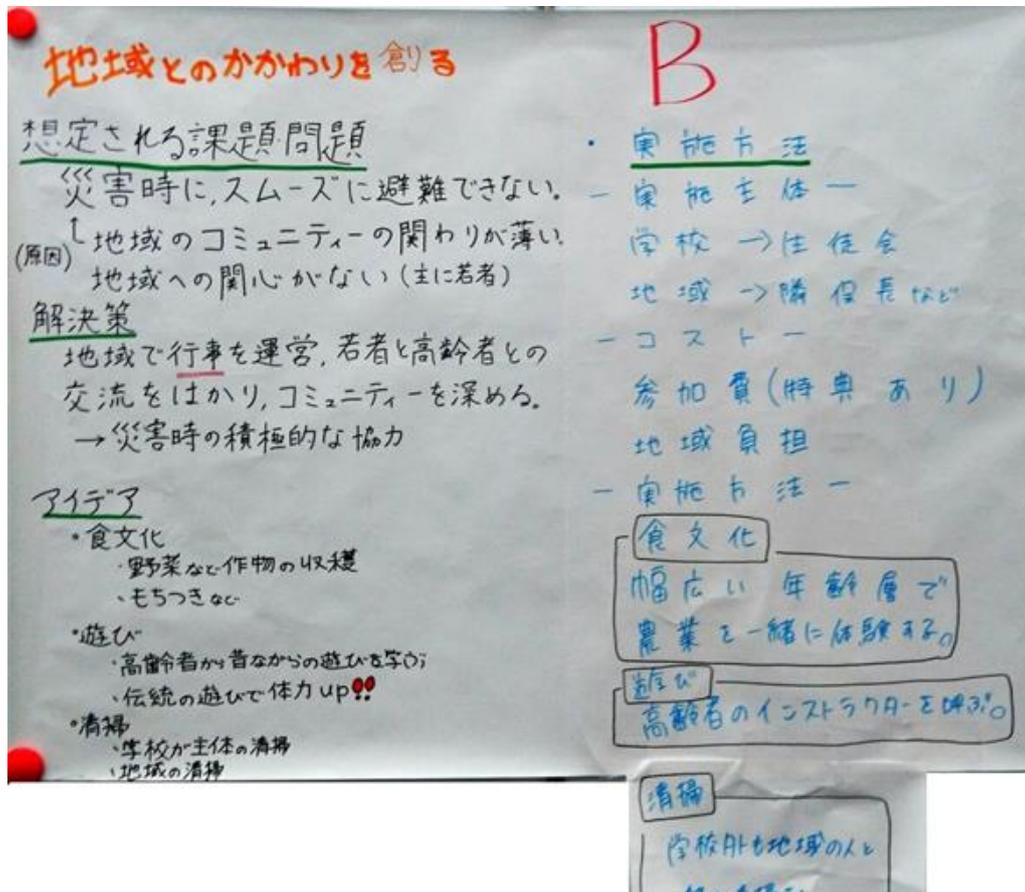
＜発災段階＞ 避難場所や経路の確実な確保として、「避難場所や経路にある建物は必ず耐震化にする」、「道路は割れにくいものにする」など、ハード面の意見が多く出された。

＜復旧、復興段階＞ 復旧や復興も含めたコミュニティでの自主防災組織や地域コミュニティの強化などの意見は出されたが、主に防災段階の議論であった。

私たちBグループの減災アイデアは

- ◆(障害者)高齢者の体力強化
- ◆火災が起きた時のため池の活用
- ◆大学生や高校生や地域の人によるコミュニティを深める行事などを行う。
- ◆ヘリポート・食料保管ができる場所の確認
- ◆兵庫大学による救命講習 です。

Bグループ



【企画】 地域とのかかわりを創る

企画の想定される課題として、地域コミュニティとの関わりの薄さから災害時にスムーズに避難できないことを挙げた。また、具体的な対象としては、地域への関心が希薄である若者を想定し議論を進めた。アイデアとして、「食文化」「遊び」「清掃」の3つをキーワードに据えて実施方法や内容が議論された。具体的な方法としては、実施主体に「学校側 - 生徒会」、「地域側 - 隣保長」という意見が出され、主体を生徒会にすることで高校生の自主性や独立性を担保しようという議論になった。

コスト面では、参加費を徴収する、地域に負担をしてもらうなどの意見が出された。一方で参加を促す工夫として、参加特典を付けてみてはどうかという提案に対し、農業を体験したり、高齢者から伝承遊びを学んだり、地域の人と一緒に清掃するなどのアイデアが出された。その後、参加促す工夫について議論を深め、野菜の収穫体験、高齢者との遊びを通して体力アップが望めるといった具体的な意見が出た。

結果、地域がきれいになることで感謝されるなど、参加することで「楽しい、うれしい」といった感情を共有できそうな場を提供する必要があるのではないかと。それが地域とのかかわりを深めるうえで有効であるという結論にいたった。

Cグループ



【解説】

「防災」「発災」「復旧」「復興」のなかで防災の部分に関する意見が多かった。大学生と一般参加者が積極的に意見を出しているグループで、避難が困難な人を若い人々が助ける仕組みづくり、ボランティアを受け入れる仕組みづくりをはじめ避難訓練の実施や避難所を把握するマップづくりと

いったソフト面のアイデアから、避難所の増設、公衆電話の確認、津波対策等ハード面のアイデアが出されていたが、概ね起こりうる出来事を想定した準備というニュアンスの強い意見が多く見られた。

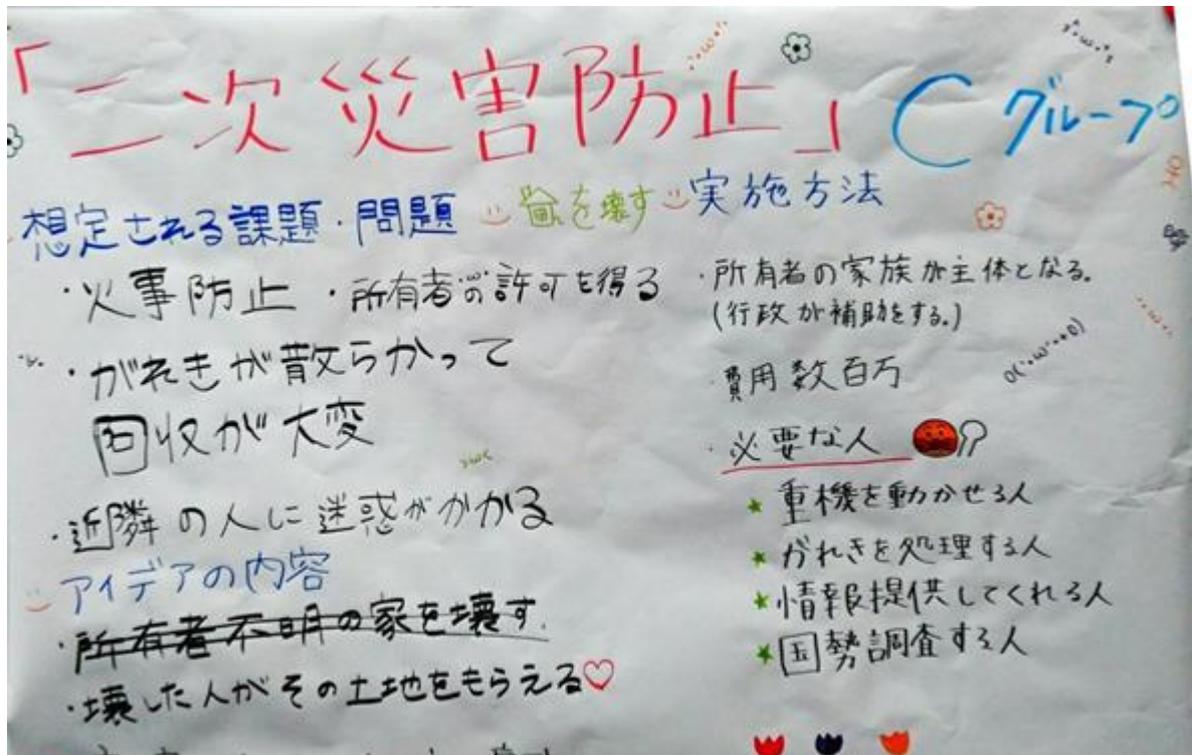
また、前半の議論の最中にはあらゆる意見が「行政の協力・行政の責任」という結論に陥りがちな時間帯があり、参加者の中での議論の前提が異なる現状が見えた。前半の議論の中でも、特徴的な意見としては若年層ならではの VR（バーチャルリアリティ）を使った事前シミュレーションのアイデア、所有者不明の家を壊すという捉え方によっては斬新な意見が散見された。以上の意見のなかから、避難所での子どもの遊び場づくり、避難が困難な人を若い人々が助ける仕組みづくり、所有者不明の家を壊す、学外での避難訓練が議論の末、減災アイデアとして提案されていた。

私たちCグループの減災アイデアは

- ◆避難所での子どもたちの遊び場を作ること
- ◆避難が困難な人を若い力で助ける仕組みづくり
- ◆所有者不明の家を壊すこと
- ◆学外での避難訓練

です。

Cグループ



【企画】二次災害防止

議論の後半では、二次災害の防止に論点を絞った上で議論が展開されていた。前半の議論のなかで提起された4つの減災アイデアのなかから「所有者不明の空き家を壊す」というアイデアに着目し、このテーマを展開して「空き家の解体を含めた管理」の重要性を強調する企画が練られることとなった。現実的に考えると、所有権の問題はもとより、費用、空き家解体時に生じる瓦礫の処分や専門的な知識を持った人々の協力等の多くの問題がある。こうした問題を解決するにあたって前半の議論の中でみられた傾向と同じく「結局行政にやってもらわないといけないことがある」という意見が強くなってしまいうきらいがあった。なかなか、このアイデアを深めていく議論まではできなかったが、「防災」「発災」時の対策として空き家の問題を取り上げること自体には意義があるように思われた。もうすこし、現実とのすり合わせを行うことができれば、重要な活動につながる可能性を秘めていると思われる。

Dグループ



【解説】

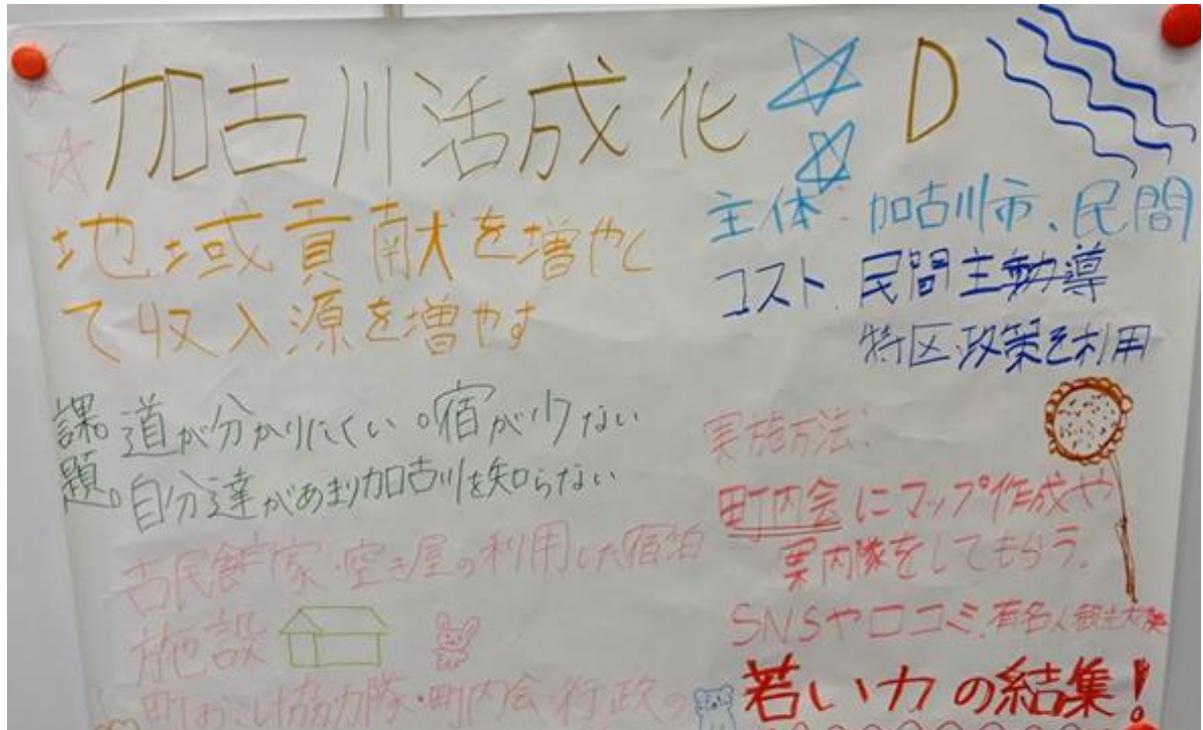
Dグループでは非常に現実的な議論が交わされた印象である。熟慮の段階の学習や、高校内外で学んだ情報に根ざした高校生参加者の積極的な情報提供等を通してCグループと同様「防災」「発災」を中心とした意見が熟議の前半では出しあわれた。そのなかでも注目される意見としては人工透析の設備の充実などの災害時の医療施設の整備や、個人単位、地域単位での物資備蓄や、物資の運搬の観点から加古川地域の道路を考えるにあたって、日頃から非常に狭く、交通量の多い道路が災害時に見て機能するかどうかの問題、兵庫県がシェルターをつくるといったハード面での情報が挙げられた。そしてまた、それらを整備するための財源の問題などが議論されていた。

こうした議論を受けて、減災アイデアとして①地域別の避難所ルールの作成、②地域貢献を増やして収入源を増やす③道の整備④地域住民のコミュニケーションの一環として事前学習を行い、ルートの確認と連絡手段の取り決めを行うといった項目にまとめられていた。

私たちDグループの減災アイデアは

- ◆地域別の避難所ルール作成
- ◆地域貢献を増やして収入源を増やす
- ◆道の整備
- ◆コミュニケーションの一環として事前学習を行い、ルートの確認と連絡手段の取り決めを行う です。

Dグループ



【企画】 加古川活性化

後半の議論では「復旧」の段階に着目したうえで加古川地域の活性化を図るということをテーマに議論が進行した。大きな地震に見舞われたとき、復旧から復興を目指していく中で復旧・復興に必要な経済的な基盤となる「収入源」の確保の仕方に議論が集約されていた。Dグループの議論は、前半の議論でも色々アイデアを出し合ってその実現可能性を考えるのはよいが、それをどのように実質化していくかという部分で停滞する節があった。そうした問題の解決をはかろうとするとき、経済的な部分が日常的に活性化していなければうまくいかない、ということで企画案としては「加古川活性化」が選択されることとなった。具体的には地域の観光資源に着目し、また住民自身が地域を知り、地域に貢献する機会を増やしながら、地域レベルでの収入を増やしていく。その増加を復旧に反映させようとするアイデアである。Cグループと同様空き家に注目しながらもCグループとは異なり空き家を壊すのではなく、宿泊施設として利用するアイデアが出されたり、町おこしのための各世代の力の結集などが提案されたりした。

Eグループ



【解説】

比較的、発災時における対応を中心に議論が行われた。減災アイデアとして、「子供から大人ができる救急処置」「津波被害想定マップの作成」「水無しで飲める薬」「避難用の道路」「ボランティアの他県・他校との連携契約」の5つを取り上げることとなった。

＜防災段階＞ 日常的に個人ができることとして、地域の避難場所を事前に把握すること、必要なものをまとめておくこと、寝る場所に重たいものを置かないこと、ハザードマップの作成・確認などが挙げられた他、近所付き合いの重要性の指摘もあった。

＜発災段階＞

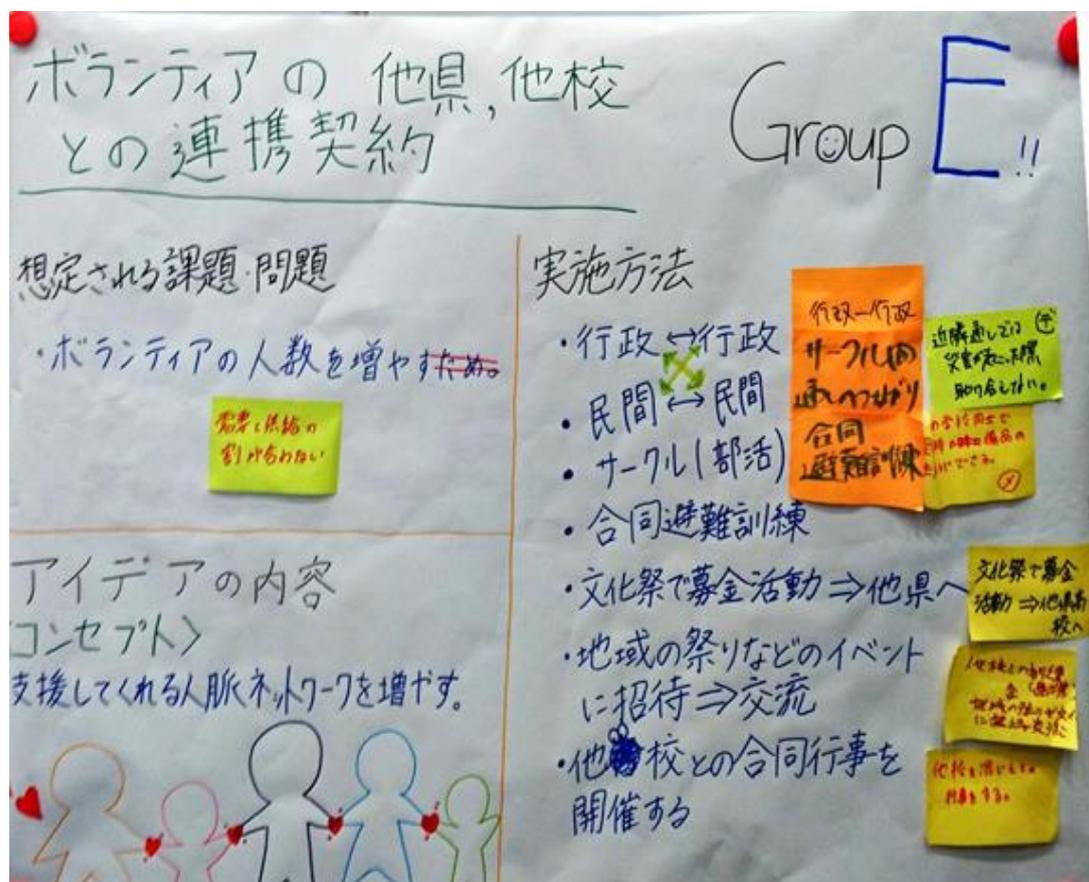
1. いつ発災するかわからないことから、夜間における避難訓練の提案があった。また、簡単な応急処置についての訓練が必要との指摘も。
2. 防災グッズとしてのスリッパの重要性に対する指摘の他、持病持ちの人のための薬の管理について懸念の声があがった。そうした薬が水なしで飲めるようになれば、との提案に。
3. ボランティアについて、他県や他校との連携によって、支援者を増やせないかとの提案。

＜復旧～復興段階＞ 心のケアによる二次災害の防止や、避難場所におけるコミュニケーションの難しさについての指摘があった。

私たちEグループの減災アイデアは

- ◆子供から大人ができる救急処置
- ◆海拔を表示した看板の増加 AND 津波被害想定マップの作成
- ◆水なしで飲める薬！
- ◆避難用の道路
- ◆ボランティアの他県、他校と連携契約です。

Eグループ



【企画】 ボランティアの他県、他校との連携契約

発災時におけるボランティア参加者の不足を解消するため、近隣地域を越えた県単位で連携し、支援側の人脈ネットワークを強化することを提案する。また避難所における正しい対応・対策を促すため、ボランティアの人材として、体力もあり活動的な高校生を参加させることも提案したい。避難場所における大声での伝達・誘導など、活躍できる場面も多いと思う。

具体的には、行政間や民間団体間でのつながりだけでなく、行政・民間団体のつながりを強化すること、地域の祭りのなどのイベントに招待することによる交流を図ることで人脈ネットワークの構築になるのではないかと。高校なら部活やサークル単位での関係を構築することや、他校との合同行事を開催すること等も可能だろう。また、小中高の学校や幼稚園・保育園での避難訓練を合同で行うことで、それぞれの備品などを非常時に共有できるのではないかと。

Fグループ



【解説】

防災段階から復興段階に及ぶ幅広い議論が展開された。地域の連携、避難訓練、交通機関の安全対策の重要性という点に意見が集約していった。

「防災段階」については、次の通りである。

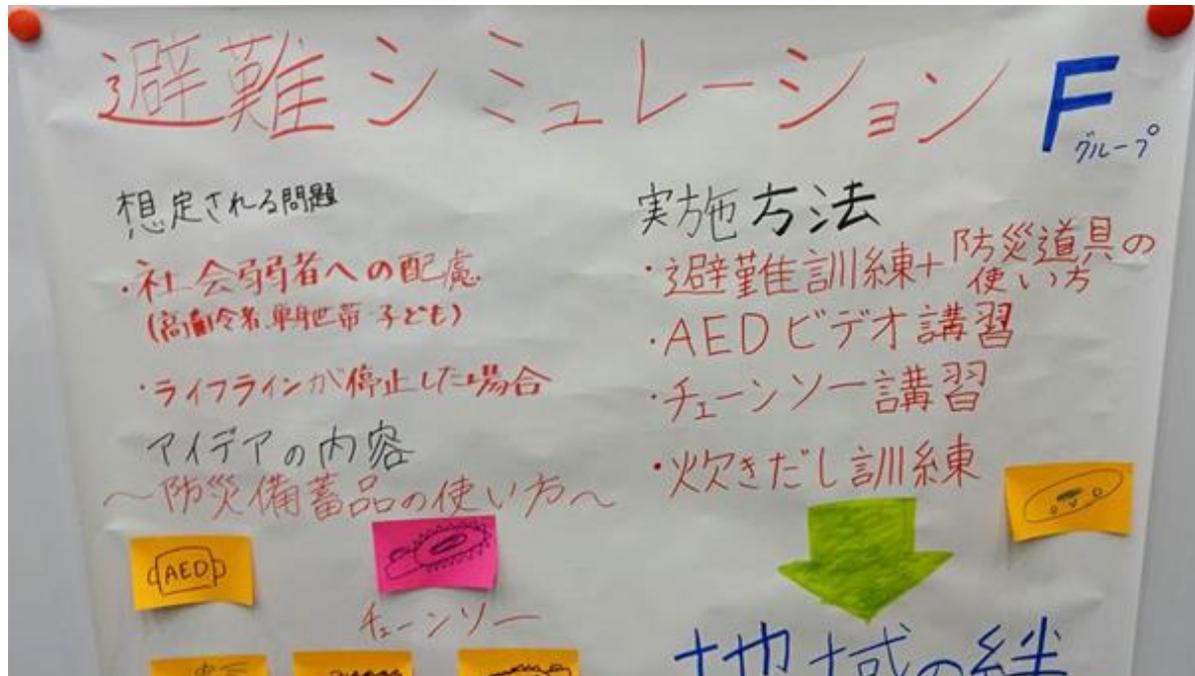
1. いざという時にいつでも避難できるように、必要なものを用意しておく他、新しい防災グッズの開発を希望する声も上がっていた。
2. 自宅だけでなく避難所の増強・耐震工事の必要性も指摘されていた。
3. 避難訓練実施の必要性は勿論のことであるが、その際には現状よりも更に実践的なプログラムが必要ではないかとの指摘があった。つまり自分達の実際の避難所がどこか日頃からきちんと確認しておくこと、学校・職場における避難経路や交通機関の状況を確認しておくといったことである。

「発災段階」については、特に家族や友人の無事を確かめる為に、互いに如何に連絡を取り合うかということが話し合われていた。万が一、家族それぞれが違うところで被災しても、皆が集まる場所を前もって決めて約束しておくことが大切であること。また、ペットを飼っている場合には、ペットのことも考えておく必要性も指摘されていた。

「復旧～復興段階」については、ボランティアの知識を深め、いざという時に即戦力として動けるようにしておくことも大切であると意見が出されていた。また、避難所でもプライバシーにきちんと配慮された生活が送れるよう、心身とも負担が少しでも軽くなるよう、避難所での交流の促進についても話し合われていた。

私たちFグループの減災アイデアは
 ◆交通機関の安全対策
 ◆地域の連携
 ◆避難
 です。

Fグループ



【企画】 避難シミュレーション

前半で議論された内容を元にアイデアが絞られ、最終的には企画案として「避難シミュレーション」が提案された。

メンバーの関心が高かったのは、特に次の2点である。

まず、社会弱者への配慮についてである。ここでいう社会的弱者とは、高齢者、単身世帯、子ども、障害者を指しており発災段階で逃げ遅れる危険性が高い。また、避難所生活における互いのプライバシー保護の問題についても真剣な議論が展開された。

次に、ライフラインの停止から復旧するまでの乗り越え方についてである。ライフラインが停止した場合、その緊急事態をしのぐには、様々なサバイバル・スキルが求められる。一般的な防災備蓄品やAED（自動体外式除細動器）、消火器のような防災道具は勿論のこと、被災地におけるチェーンソーの有効性についても、メンバーから紹介されていた。

このように様々な視点から議論を進めていく中で、市民が日頃からいつでも円滑に連携を取れる関係性を築いておくことこそが、非常時を皆で乗り越える為に必要な前提条件であろうとの意見の一致を見た。その為には、まずは自治会が主体となって地域の絆を深めること。その上で、これまでに挙げた様々な防災備蓄品等の使い方講習も取り入れた、避難訓練や炊き出し訓練などが、日常的に適宜実施されることが望ましい、と意見が集約された。

Gグループ



【解説】

特に防災段階における内容について議論が展開された。

次の5つキーワードについて意見が集約された。「生活に根ざした訓練」「備えあれば憂いなし」「心理」「コミュニケーション」「ボランティア」である。

この中で、特に議論が集中したのは「生活に根ざした訓練」の必要性についてである。関心が高かったのは、災害が「想定外」であるか「想定内」であるかということによって、必要な訓練は違うのではないかという点であった。現状では、各地域における防災訓練は「想定内」であるが、「想定外」の場合にまでどう備えるかという視点も大切であるとのことである。また、専門家であってもとっさにはうまく行動ができない現実もあるので、ハザードマップなどを身近なものにするといった取り組み等により意識を高めることのほか、色々な方面から取り組みが必要であろうということまで議論が及んでいた。

このほか、住まいの家財等の転倒防止や避難所の確認、食料・水の備えをしておくといった各自の「準備（備え）」に対する意識を持つことの大切さや、日頃から家族で話し合いをしておくこと、ご近所づきあい、地域の連携といったコミュニケーションの重要性についても議論が続いた。

私たちGグループの減災アイデアは

- ◆ボランティア
 - ◆心理
 - ◆生活に根ざした訓練
 - ◆備えあれば憂いなし
 - ◆コミュニケーション
- です。

Gグループ



【企画】生活に根ざした訓練

前半で議論された内容を元にアイデアが絞られ、企画として「生活に根ざした訓練」が提案された。

メンバー間での議論では、現状として防災訓練がリアリティのない「訓練」であり、形骸化しているのではないかということが問題点として指摘されていた。その結果、「自主訓練」のハズが自主的とは到底言えるような状況ではなく、「やらされ感」「義務で仕方なく」といった雰囲気蔓延していて、人が集まりにくい状況となっている。

この状況を好転させる為には、つまり訓練内容が本当に実際に機能する為には、もっと参加者（対象者）の意欲・意識を刺激するような、一種の「バーチャルリアリティ」的なプログラムを開発する必要があるという。どうすれば積極性が高まるのかという点については、まずイメージを「明るく、楽しく」参加できるような工夫をする。例えば、家族で参加してもらえるような「オリエンテーション型」や「参加ポイントの提供」などがあれば、参加型として動員し易いというアイデアが提案された。

また、その実施方法についても様々な地域イベントのアイデアが提案されたが、中でも「(小学校の)マラソン大会」等で、休憩所を避難場所にしたり、避難経路をルートの一部に指定すると、より身近で有効な取り組みになるのではないかと意見がまとまった。

Hグループ



【解説】

前半の議論では、防災段階への関心が高く、多くの議論が集中した。とりわけ、

1. 非常食、救急用品等の備蓄をしっかりと行う。
2. 地域で防災意識を高める勉強会を開いたり、加古川市をあげて定期的に「防災・減災デー」を設けたりする。
3. 日常から地域の人々同士のコミュニケーションを活発にしたり、避難訓練や耐震補強を実施したりする。

の3点が具体的に議論された。

さらに復旧段階についても議論がなされた。特に、子どもや高齢者への心身のケアが大切であるとされ、ここでも具体的なプランが模索された。

私たちHグループの減災アイデアは

◆加古川市内で毎月〇日に防災・減災デーを！

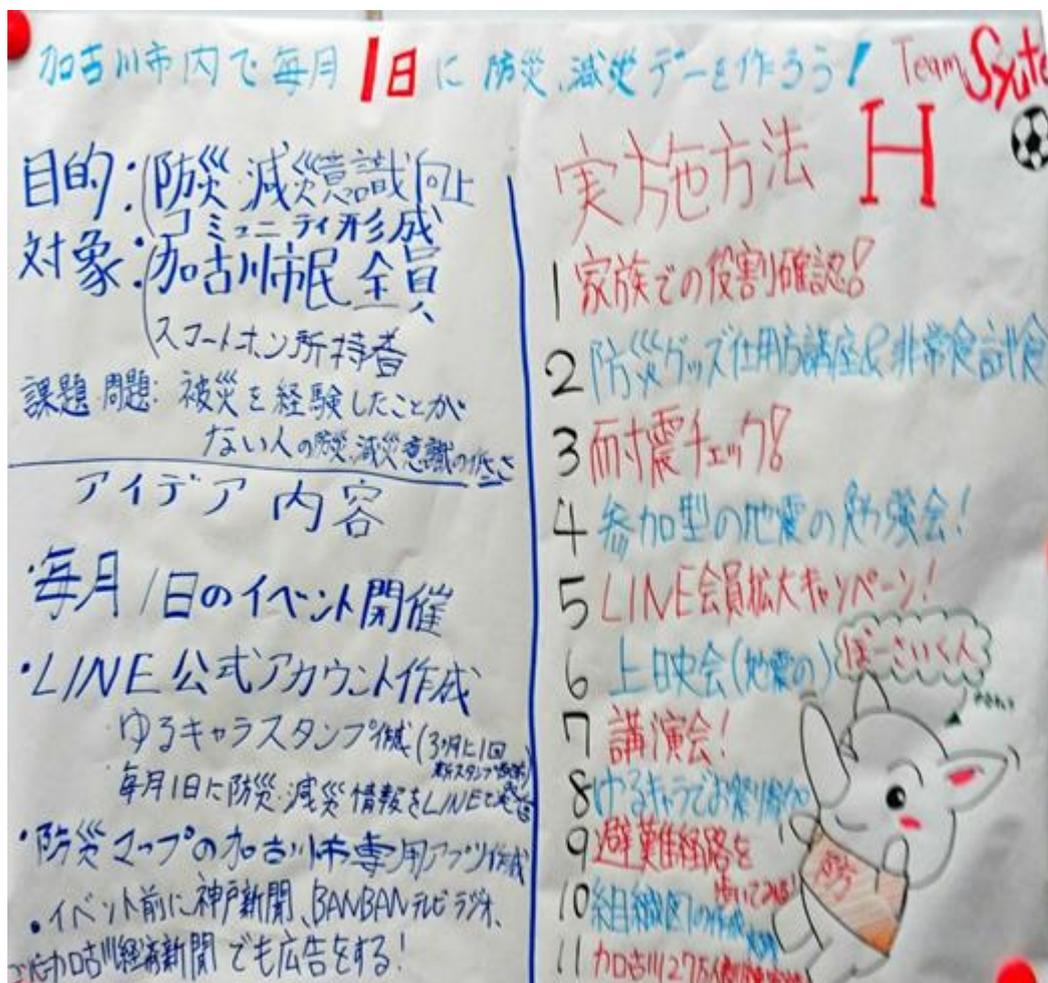
◆加古川の影響

◆子ども（社会的弱者）のケア

◆人とのつながり

です。

Hグループ



【企画】加古川市内で毎月1日に防災・減災デーを作ろう！

メンバーで議論を重ねた結果、前半で議論が集中した防災段階でのアイデアを集約して、「毎月1日を加古川市の防災・減災デーとしよう」という企画がまとまった。これは加古川市民の防災・減災意識を高めるために毎月実施されるもので、スマートフォン所持者が多数を占めるという現実を前提に、LINEの公式アカウントを作成し多くの情報を発信していくこと、ゆるキャラ（ぼーさいくん）スタンプを作成し認知度を向上させることが特徴である。内容は年に12回開催できることから、前半の議論で出た具体的なプランをすべて盛り込むこととしている。

Iグループ



【解説】

前半の議論では、防災段階及び発災段階への関心が高く、多くの議論が集中した。とりわけ、防災段階では

1. 非常食、救急用品等の備蓄をしっかりと行う。
2. 避難所及び避難経路を日頃から確認しておく、の2点が具体的に議論され、発災段階では、
3. 閉じ込められた際に助けを求めるための笛を配布する。
4. 避難所では、救援物資の公平な分配に配慮したり、ラジオ体操を取り入れる。

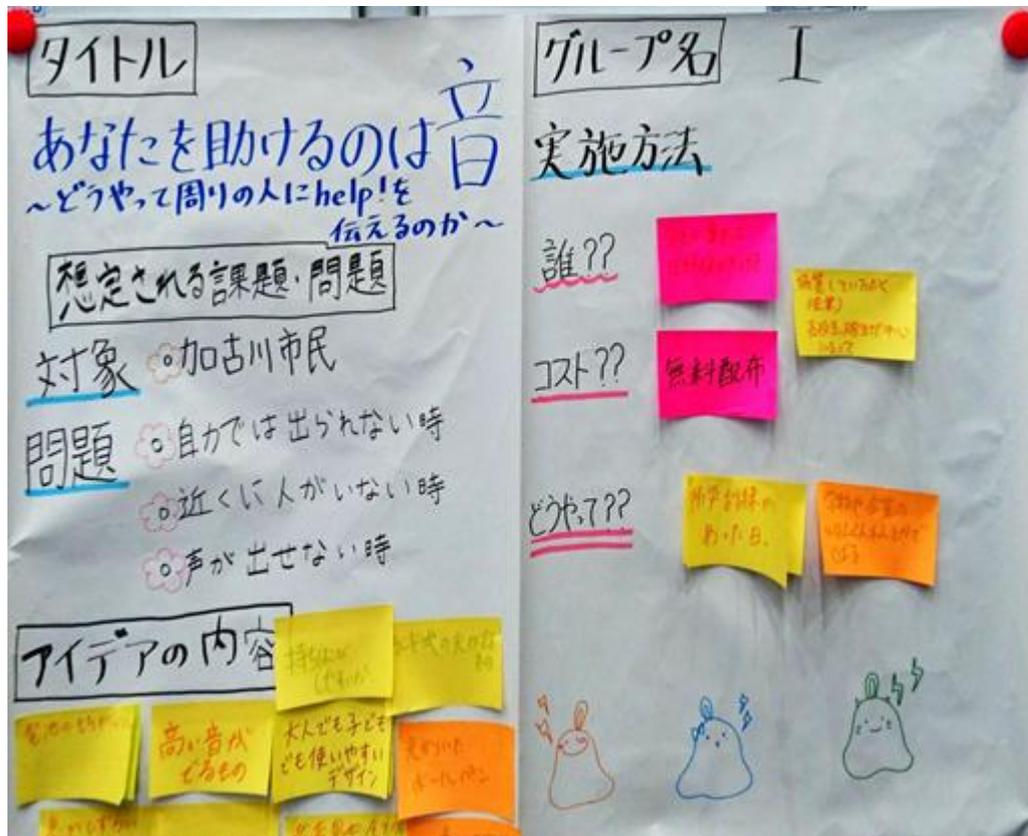
というアイデアが提出され議論を深めていった。

私たちIグループの減災アイデアは

- ◆安心だと思いきすぎない事
- ◆避難場所におけるプライバシーの保護
- ◆少ない力で大きな音が出せ、サイズが小さく普段使い出来るデザインの笛を持つ
- ◆地域でコミュニケーションをよくとり連携すること
- ◆物資の公平化

です。

I グループ



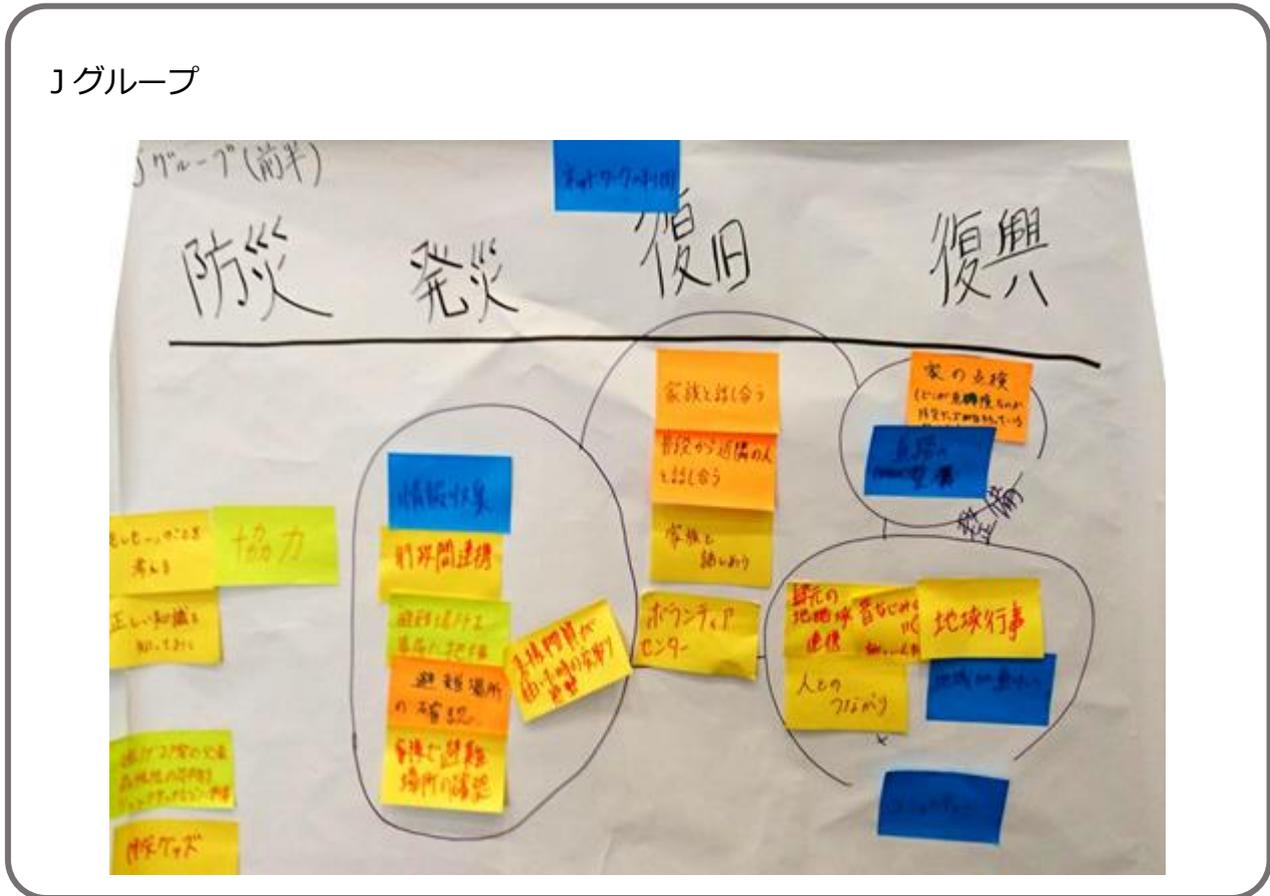
【企画】あなたを助けるのは音 ～どうやって周りの人に help! を伝えるのか～

メンバーで議論を重ねた結果、他のグループではあまり言及のなかった発災段階でのアイデア「助けを求めるための笛」は、かなり特徴的なものであり、これを深めていくこととした。

その結果、「あなたを助けるのは音！～どうやって周りの人に help! を伝えるのか～」というタイトルの下、自力では出られない時、声が届かない時に助けを呼ぶための「笛」を開発し、企業の協賛を得るなどして加古川市民に無料で配布して常時携帯してもらおう企画を案出した。

具体的には、携帯が便利ないようにカード式とする、ユニバーサルデザインに配慮する、防水機能をもつ、高く大きな音を発する、息を吹き込むのが困難な場合も想定しボタンを押すと電子音を発する機能も有する等を、笛の仕様に盛り込むこととした。

Jグループ



【解説】

防災・発災・復旧の各段階における地域コミュニティの重要性を中心に議論が展開された。

減災アイデアとして、コミュニティ関係の構築、道路や家の点検・整備、行政との関係の3つに意見がまとめられた。

<防災段階>

1. 避難する際の荷物をまとめておくこと、もしもの時のことを考え正しい知識を身につけること、普段から家族や近隣と被災したときのことを話し合うこと、避難場所を確認しておくこと等の重要性が指摘された。
2. 家や道路について、どこか危険なところはないか点検し整備しておくことが重要との声もあった。
3. 地域行事を通しての人のつながりの構築が重要である。

<発災・復旧・復興段階> 行政との連携の重要性や、支援物資が届いたときの分配の難しさについての指摘があった。復旧・復興に至るどの段階においても地域における住民同士のコミュニケーションが重要である。

私たちJグループの減災アイデアは

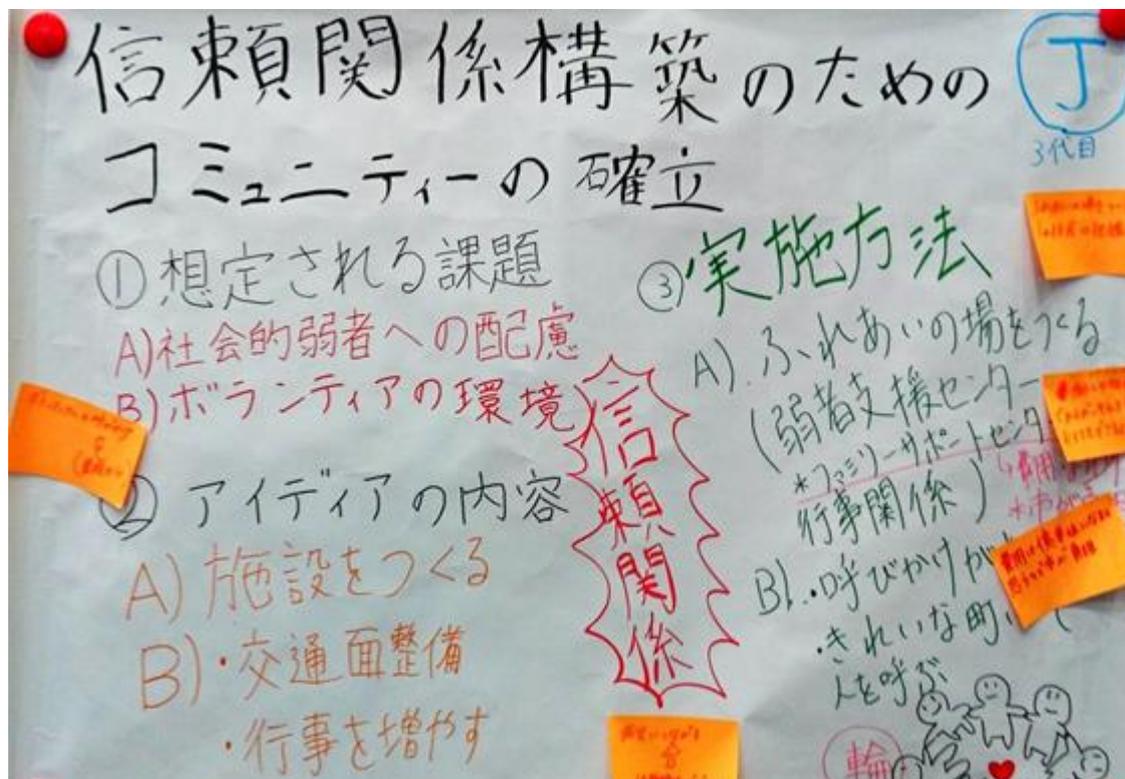
◆コミュニティ関係

◆整備

◆行政との関係

です。

Jグループ



【企画】信頼関係構築のためのコミュニティの確立

減災のためには地域におけるコミュニティを確立していくことが重要である。日常的なふれ合いを増やすことで地域住民同士の信頼関係を構築することが減災につながる。

例えば、地震が起きた際、重要な課題のひとつになるのは、高齢者や障がい者といった社会的弱者への配慮である。しかし、いざという時に個別のニーズを即座に把握するのは難しい。これに対し、社会的弱者向けのサポートセンターを作り日常的にふれあいの場を作ることで、震災が起きたときにより良い支援ができるのではないかな。

また、地域におけるボランティアの参加を促すための日常的な環境の構築も必要である。このような地域に密着したボランティアの体制を作るため、地域における行事を増やし、それに対する呼びかけを増やすことで、地域を活性化させることを提案したい。こうした行事を通じて、子供から高齢者まで世代を越えたふれあいができることが望ましい。また、実際のボランティア活動を円滑にするため、町をきれいにする・道路を整備する、等も必要になる。

第3章 熟議が高校生・大学生に与える影響

～事前・事後アンケートと自己認識シートに見る高校生・大学生の変容～

昨今、高等学校、大学の中であらたな教育・学習、そしてその評価方法が議論され、実践されはじめている。平成26年、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」が提出された。本学における熟議も、「アクティブラーニング」の一環として毎年学生たちとともに作り上げてきたプログラムである。高大接続を視野に入れた大学教育の質的な転換を目指す改革が企図されている現代において本学の中でその一翼を担うプログラムであることは言うまでもない。重ねて高校、大学を含む教育改革は「受動的」から「能動的」へ、知識の蓄積ばかりでなく、その応用へといったように「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的に学ぶ」ことが重要であることが強調されている。その点で言えば、熟議は高校生の学びの場でもある。とりわけ今年度の「熟議2016 in 兵庫大学」は、主として高校生・大学生を中心に据えたプログラムとして企画された。

さて、本章の主題となるここでいうところの「影響」ということには多義的な意味を含んでいると考えられる。出会い、知識の獲得、たわいもない話、話し合いをする空間、さまざまなことやもの、そして「人」といったように参加者はいうまでもなく、このプログラムの準備段階から当日にかけて多くの影響を受けることとなった。

学校現場においても教師が「何を教えるか」から児童・生徒が様々な「もの」や「こと」から影響を受けつつ「何ができるようになるか」にポイントがうつりつつあり、「何をどのように学ぶのか」ということが関心ごととして見逃せないポイントになってきている。そうした情勢の中で、「具体的に何をするのか」はそれぞれの教育現場において最も重要であるが、それほど多くの事例が報告され、その実践が分析され共有されているわけでは必ずしもない。そのなかで、2012年にはじめて本学で実施された熟議から4年をかけて継続的に、常に批判的検討を行いつつ行われている本学における「熟議」は、高大接続のあり方、アクティブラーニングの方法などを検討するうえで、そしてなにより、高校生や大学生をはじめとした学習者にとってゆたかな学びの場として貴重なプログラムである。

本章では、この影響を「学び」ととらえ、高校生・大学生が熟議という機会を経て、何についてどのように学んだかということを手前事後アンケートと自己認識シートに基づいて検討していくこととする。

1. 事前・事後アンケートにみる高校生の変容～高校生は何を期待し、何を学んだか～

詳細については、第4章に譲るが、兵庫大学熟議方式では、熟議のプロセス、つまり熟慮の段階の前の、参加者の意識、特に熟議を含む話し合いに対する意識及び、熟議テーマに関わる複数の課題への意向を問うアンケート調査を実施している。これを事前アンケートと呼んでいる。

一方、熟議の中で議論の段階の当日には、議論の後の振り返りの一環として、熟議への評価及び、熟議テーマに関わる複数の課題への意向を、事前アンケートの内容と同じ設問で問うている。これを事後アンケートと呼ぶ。これらは高校生・大学生など若年者が、民主主義の基盤となる話し合いについて、どのような認識を持っていたのか、そしてそれがどう変化をしたのかを把握することができるほか、熟議テーマに係る各種課題への意識の変化を知ることにもなる。

(1) 事前アンケートにみる高校生の特性と熟議のイメージ

今年度の熟議に参加する高校生は、ほぼワークショップの参加経験がない生徒であった。しかしながら、多様な考えを知り、考える機会となることを熟議に期待している様子がデータから窺える【図3-1-1】。また、高校生の多くが他者の意見を聞くこと、多世代に渡る人間関係の構築への期待を寄せていた一方で、意見をまとめて表現すること、年長者の意見に流されてしまうのではないかという不安も同時に持っていたと推測する【図3-1-2】。

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

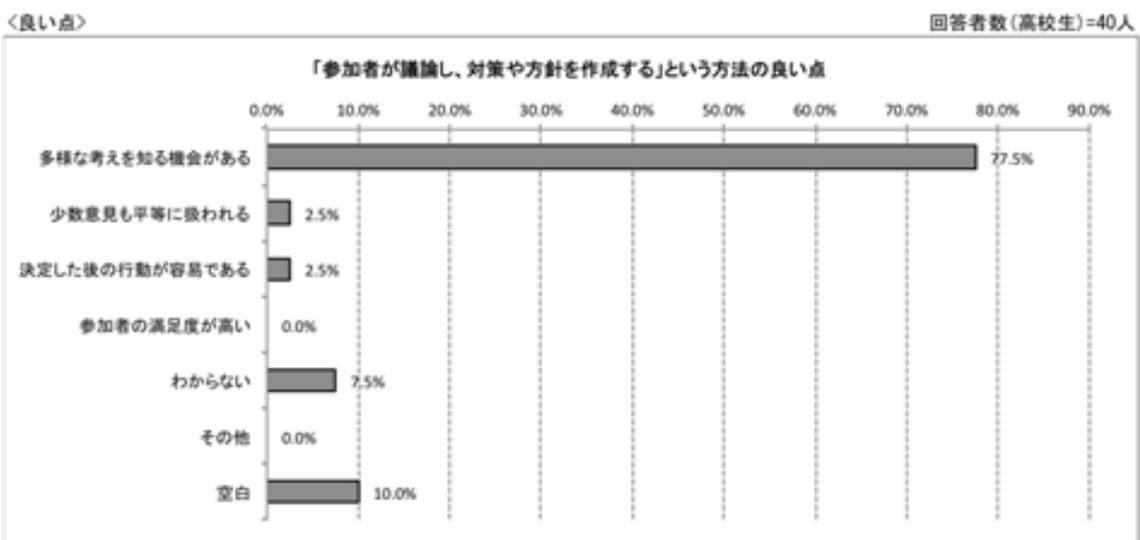


図3-1-1 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点（高校生）

7. 「熟議2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。1つ選び番号を記入してください。

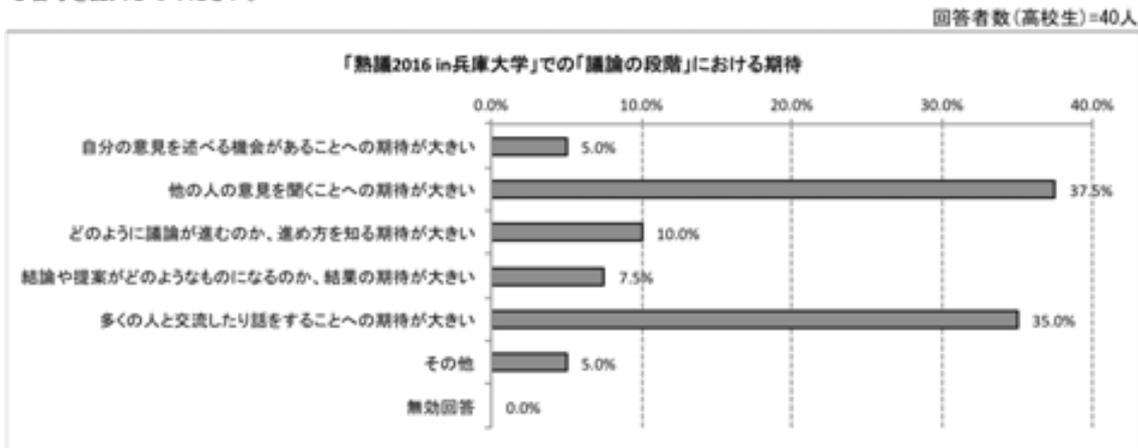


図 3-1-2 「熟議 2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待（高校生）

まず、テーマに関するイメージに着目してみる。高校生は、加古川地域の大地震というテーマに関しての関心が非常に高く、今日において重要な課題と認識していた。熟慮の段階が効果的に知識を身につけることに概ね繋がってはいたが、一方で事前の熟慮の段階が、当日の熟議とどのような関係にあるのかが理解しづらかった高校生が 25%いたことも看過できない【図 3-1-3】。

6. 「熟議2016 in 兵庫大学」の資料やホームページをご覧になり、また講座を受け、今回の熟議の進め方についてご理解をいただけたでしょうか。1つ選び番号を記入してください。

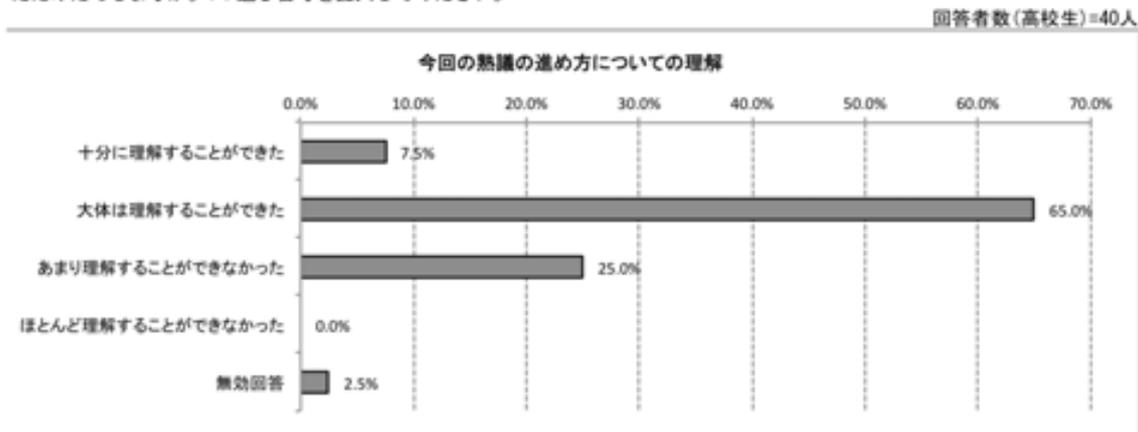


図 3-1-3 今回の熟議の進め方についての理解（高校生）

後に【図 3-1-7】に示すが、高校生は大地震に関わる出来事の中で揺れによる建物の倒壊や、火災や津波に対する関心はもちろん高いが、注目すべきは、情報を得る手段を失うこと、家族との連絡がとれなくなることといった情報をめぐる不安に対する関心が高いことである。情報化のすすむ現代ゆえにその術を失うことの影響が特に高校生にとってはおおきいであろうことが推測される。その他、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄も、大きな関心ごとであった。また一方で、学

校・職場の再開は、他の項目と比較してそれほど高い関心は持っていないようであった。続けて災害時の具体的な行動に対する考え方では、行政任せではなく住民主体で、ハード面の整備は重要であるが、ボランティアの受け入れや住民同士の協力といった人間と人間のつながりが生き残ること、生き残った後にも重要であること、そして災害弱者への支援が重要であることなどを認識として強く持っているということがいえる。

以上のことを整理するならば、熟議に参加した高校生の特性、熟議とそのテーマへのイメージは以下の項目に要約することができる。

- A 高校生はワークショップの経験が少ない。しかし、多様な考えを知り、考えることを期待していたが、立場が上の人の意見に影響されずしっかりと自分の意見を言うことには若干の不安を感じている。
- B 高校生は、熟議 2016 のテーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」に高い関心を持っており、熟慮の段階の学習で議論の手がかりになる情報を得た。
- C 災害時の関心事として、情報をめぐる不安と、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄に対する不安に高い関心を持っている。
- D 災害時の考え方として、住民の力を合わせるということが重要であるという認識を強く持っている。

(2) 事後アンケートから ～何を学んだか～

では、高校生は、熟議を通してどのような影響を受け、認識を再確認し、あるいは変容させていったのであろうか。事後アンケートを手がかりにしながら見ていくこととする。

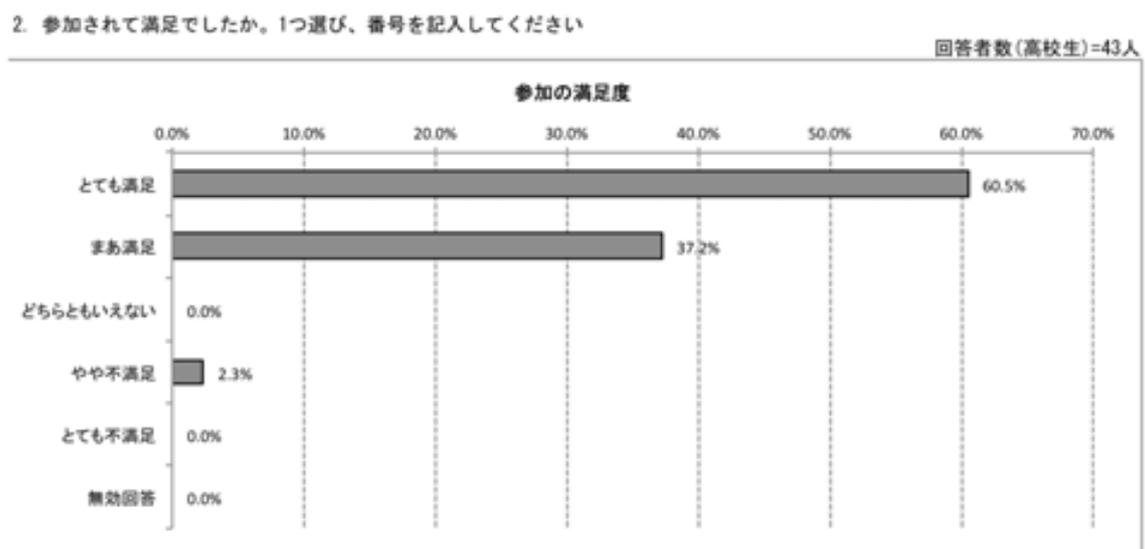


図 3-1-4 参加の満足度 (高校生)

熟議 2016 に対する高校生の満足度は高く、「とても満足」と「まあ満足」の項目で 97%を超える【図 3-1-4】。また、7 割を超える高校生は、グループでのワークショップに「意見が出しやすいこれまでとは少し様子の異なる空間」であった印象を持っている。当日のワークショップの場への印象が非常に良かったことが推察される。しかし、熟慮の段階の研修と、熟議当日のテーマとの関係については 23%の高校生が明確な関係を見出しにくかったという印象をもったようであった【図 3-1-5】。今後熟慮の段階に研修形式の学習機会を組み込む場合は、その関係について解題する機会が準備される必要があるのかもしれない。こうした部分は今後の課題である。

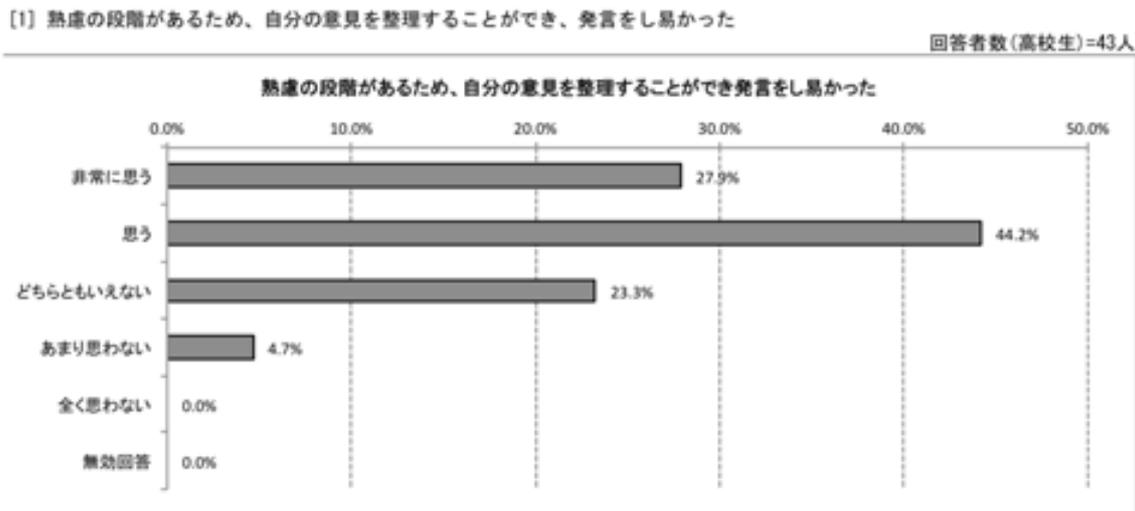


図 3-1-5 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ発言をし易かった（高校生）

6. 「熟議2016 in 兵庫大学」の議論の段階で、あなたにとってはどのような成果がありましたか。最も近いものを下記から1つ選び番号を記入してください。

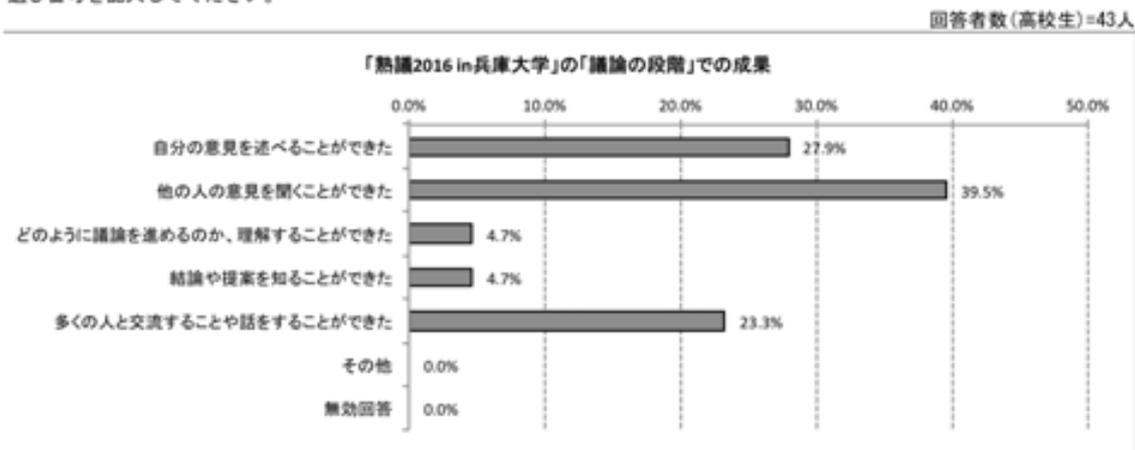


図 3-1-6 「熟議 2016 in 兵庫大学」の「議論の段階」での成果（高校生）

次に、熟議というプログラムの意義と成果について高校生は、地域的な課題が熟議のような手法で課題解決を図っていくうえで最適であり、熟議の技法と成果が行政政策へ反映することを考えている

ようである。しかしながら、関係者の利益が背反する課題についてはなじまないとも考えている。地域課題は、利益が背反する場面が少なくないわけだが、このあたりは大きなジレンマを抱える課題となるであろう。自分の意見を述べること、他人の意見を聞くことは、期待していたことをそのまま「学び」として享受できたという実感を持っている。さらに高校生は、多くの人と交流することそのものについても熟議の大きな成果であると認識しているようである【図 3-1-6】。

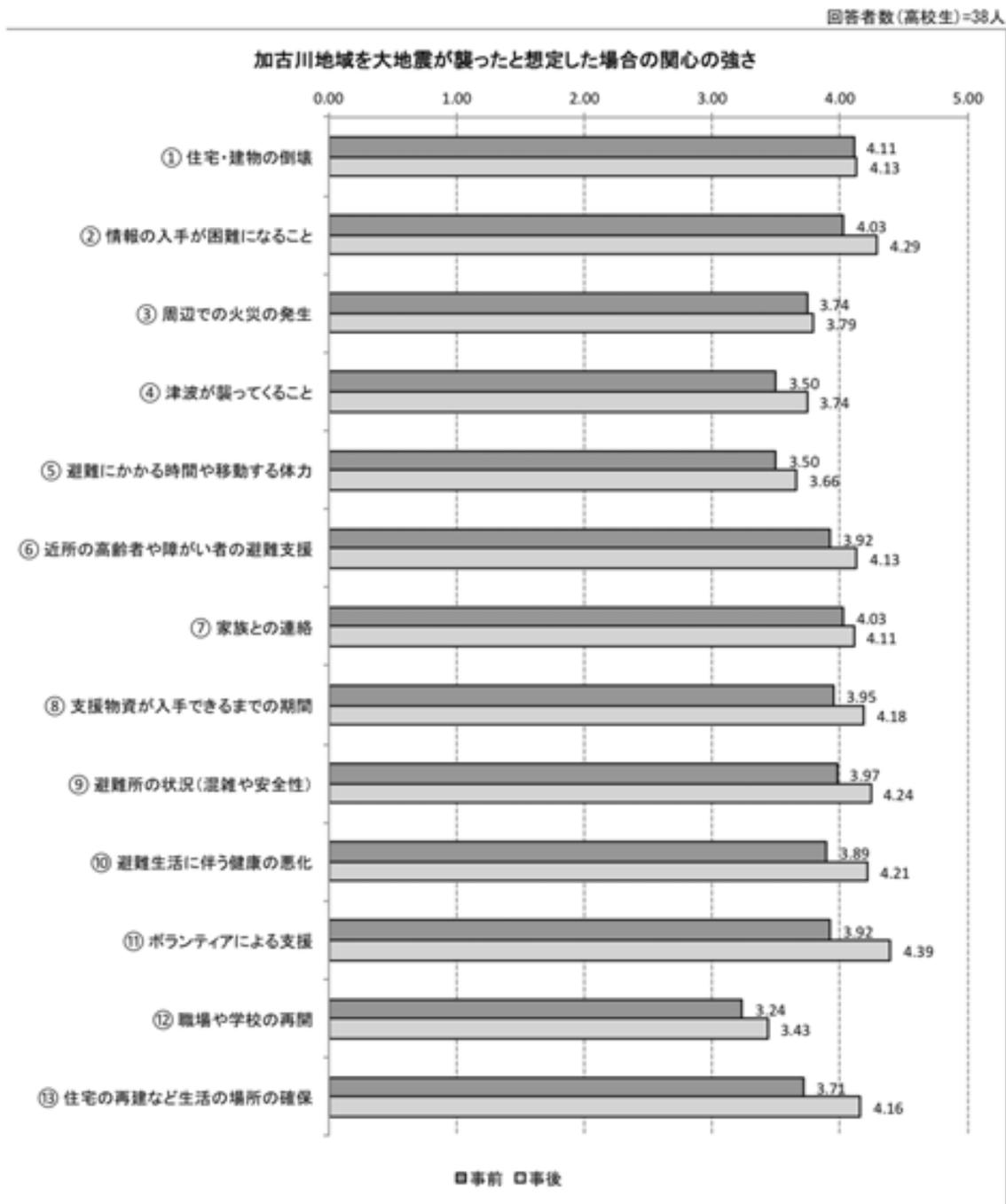


図 3-1-7 加古川地域を大地震が襲ったと想定した場合の関心の強さ（高校生）

災害時の関心をめぐる事柄の変化については、全ての項目について関心の上昇が見られたことそのものが何より重要な意義である。詳細に目をやると「火災の発生」、「津波」、「職場・学校の再開」といった地震の「揺れ」そのものによるダメージとそれへの対応とは距離を置く「二次的な」事柄についての関心は5階評価における「4」を下回っている。

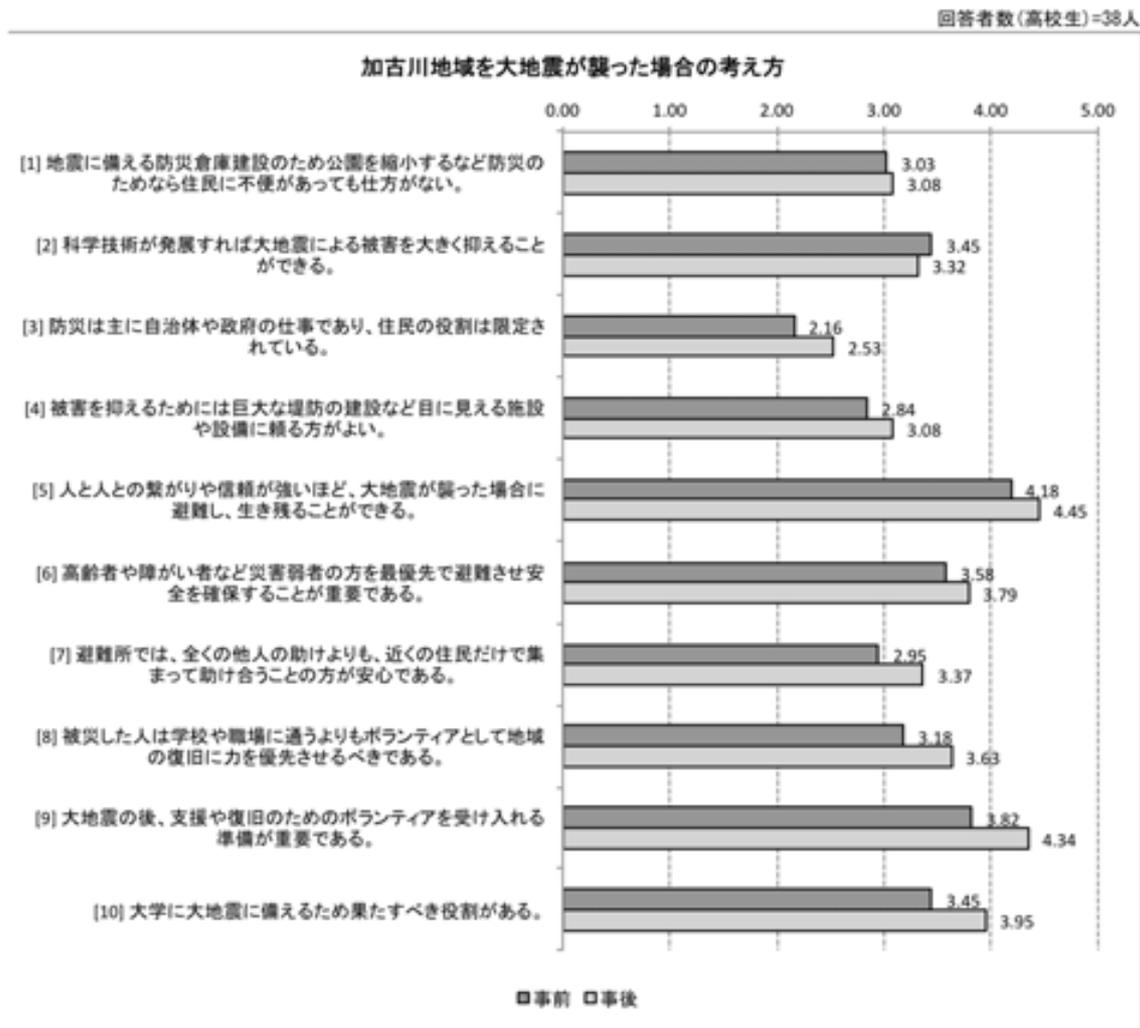


図 3-1-8 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方（高校生）

以上のデータに基づいて高校生の特性とイメージの観点を以下のようにまとめることができる【図 3-1-7】【図 3-1-8】。

A 高校生はワークショップの経験が少ない。しかし、多様な考えを知り、考えることを期待していたが、立場が上の人の意見に影響されずしっかりと自分の意見を言うことには若干の不安を感じている。

→高校生の事後アンケートでは、ほぼ全員がワークショップに対して満足しており、多様な考え方を知り、考えることだけでなく、人と交流することや話をする事そのものが多くの学びにつ

ながるという認識に変容している。

B 高校生は、熟議 2016 のテーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら?」に高い関心を持っており、熟慮の段階の学習が議論の手がかりになる情報となっている。

→熟議を経て多くの学びを得たが、熟慮の段階と熟議の段階には丁寧な関連づけをする必要がある。

C 災害時の関心事として、情報をめぐる不安と、避難所や救援物資の確保といった生活に密着した事柄に対する不安に高い関心を持っている。

→高校生は、大地震が起こる際に起こりうる出来事への関心が全ての項目で高まっている。

D 災害時の考え方として、住民の力を合わせるということが重要であるという認識を強く持っている。

→ほぼ全ての項目で事後のアンケートの数値の方が高いが、唯一「科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる」についてのみ事後アンケートの数値が減少した。このことは、科学技術が進歩することが災害時の問題を必ずしも解決しないということと同義であろう。

2. 自己認識シートにみる高校生の自己認識の変容

自己認識シートは、自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目に関するアンケートであり、事前と事後に参加（予定）学生（大学生も含む）が回答し、その数値の変化を考察することで熟議を通して参加者がどのように変化したかを可視化する調査である。

参加高校生のデータに目をやると、自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで思考力をのぞいた 9 項目が大学生の熟議実施前の数値よりも高い数値を示している。この結果は、日常的に考え、話し、様々な活動に参加している活発で社会問題に関心の高い高校生の姿を想像することができる。活発で、意欲的な高校生は、熟議に参加することで、その数値をさらに高くし、苦手としていた思考力の部分でも非常に大きな数値の向上が見られる傾向にある【図 3-2-1】。しかし、高校生個人のレーダーチャートを見ると、傾向とは異なる状況が見えてくる。それぞれの高校生は 10 項目の調査項目の中で全てが高い数値を示しているわけではなく、個人によって強み弱みがあることがデータからは推察できる。例えば、高校生 A は、参加高校生平均と比して、貢献性と思考力が低かったが、熟議を終え、貢献性はかわらないが、会話力がずば抜けて高まっているという自己認識に及んでいる【図 3-2-2a, 図 3-2-2b, 図 3-2-2c】。高校生 B は、熟議前後で自信を持っていた会話力の数値が下がり、思考力の数値が高くなっている【図 3-2-3a, 3-2-3b, 3-2-3c】。そうした得手と不得手が細かく変化しながら 41 人分統合されることによって全体的にバランスのとれた平均的なチャートになっていることを強調しておく。いずれにしても熟議の中で多くの高校生が多くの学びを得ていることは間違いないわけだが、そうした学びをより丁寧にあと

づけていくような調査を進めていく必要があるのかもしれない。以下に、熟議実施前の高校生の個人データと全体との比較【図 3-2-2a, 図 3-2-3a】、事後の個人データと全体との比較【図 3-2-2b, 図 3-2-3b】、そして熟議実施前後の個人データの変容のグラフを示しておく【図 3-2-2c, 図 3-2-3c】。

高校生（事前N=45 事後N=41）

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.38	3.59	+0.21
思考力	3.07	3.63	+0.57
実行力	3.04	3.68	+0.64
対応力	3.64	3.68	+0.05
交渉力	3.13	3.59	+0.45
会話力	3.49	3.71	+0.22
計画力	3.23	3.44	+0.21
規律性	3.71	3.76	+0.04
運営力	3.31	3.63	+0.32
貢献性	3.13	3.55	+0.42

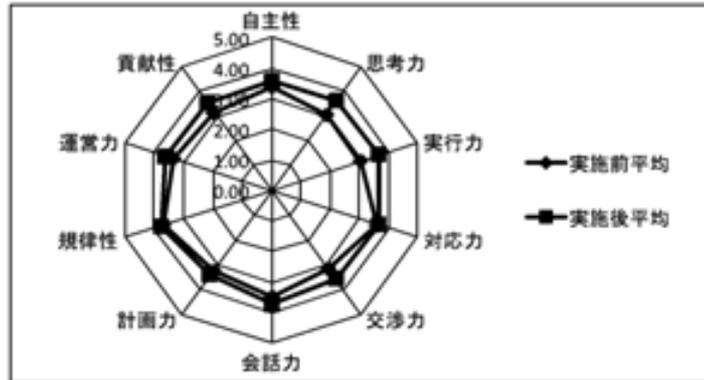


図 3-2-1 高校生（全体）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

高校生 A 実施前

能力項目	個人評価 (実施前)	全体平均 (実施前)
自主性	4	3.4
思考力	2	3.1
実行力	3	3.0
対応力	4	3.6
交渉力	3	3.1
会話力	4	3.5
計画力	3	3.2
規律性	3	3.7
運営力	3	3.3
貢献性	2	3.1

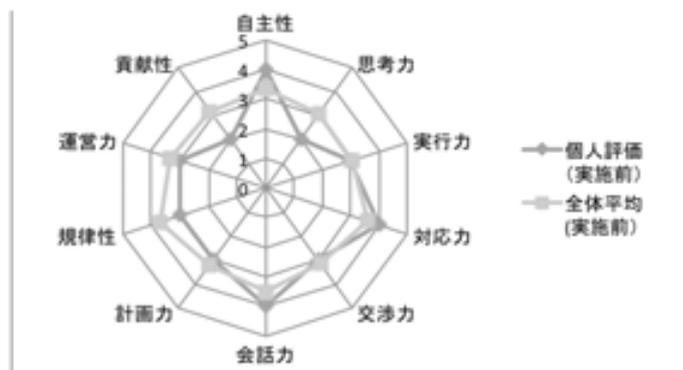


図 3-2-2a 熟議実施前の高校生 A の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 A 実施後

能力項目	個人評価 (実施後)	全体平均 (実施後)
自主性	4	3.6
思考力	3	3.6
実行力	3	3.7
対応力	4	3.7
交渉力	3	3.6
会話力	5	3.7
計画力	4	3.4
規律性	3	3.8
運営力	4	3.6
貢献性	2	3.6

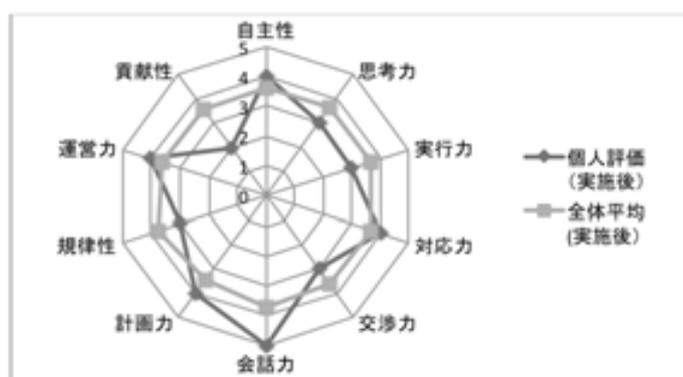


図 3-2-2b 熟議実施後の高校生 A の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 A 個人的変化

能力項目	個人評価 (実施前)	個人評価 (実施後)
自主性	4	4
思考力	2	3
実行力	3	3
対応力	4	4
交渉力	3	3
会話力	4	5
計画力	3	4
規律性	3	3
運営力	3	4
貢献性	2	2

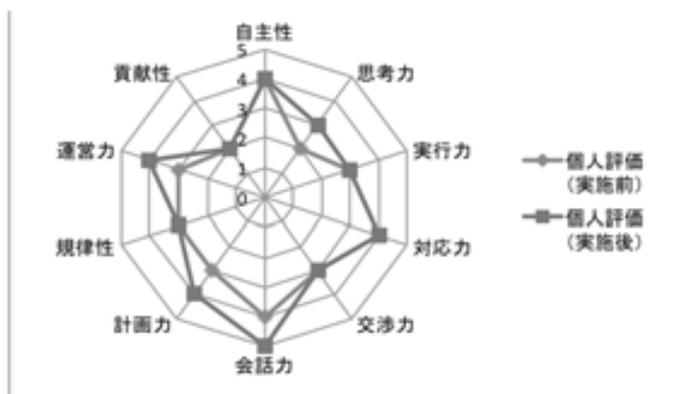


図 3-2-2c 高校生 A の 10 項目（能力）と熟議実施前後の変化

高校生 B 実施前

能力項目	個人評価 (実施前)	全体平均 (実施前)
自主性	4	3.4
思考力	4	3.1
実行力	3	3.0
対応力	4	3.6
交渉力	3	3.1
会話力	5	3.5
計画力	3	3.2
規律性	3	3.7
運営力	3	3.3
貢献性	3	3.1

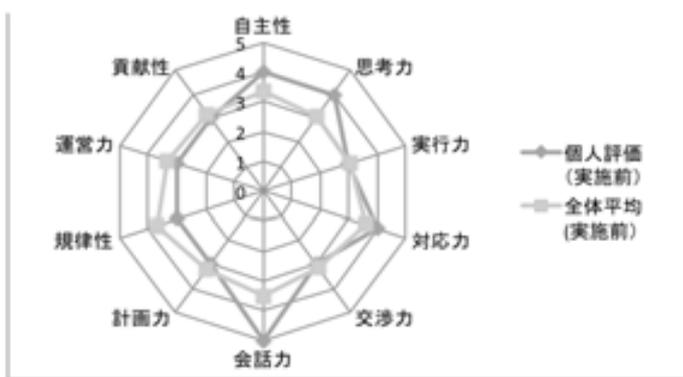


図 3-2-3a 熟議実施前の高校生 B の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 B 実施後

能力項目	個人評価 (実施後)	全体平均 (実施後)
自主性	4	3.6
思考力	5	3.6
実行力	4	3.7
対応力	4	3.7
交渉力	4	3.6
会話力	4	3.7
計画力	4	3.4
規律性	4	3.8
運営力	3	3.6
貢献性	4	3.6

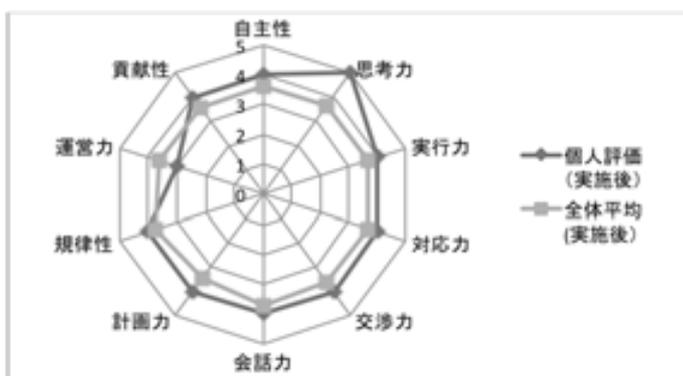


図 3-2-3b 熟議実施後の高校生 B の 10 項目（能力）と全体との比較

高校生 B 個人的変化

能力項目	個人評価 (実施前)	個人評価 (実施後)
自主性	4	4
思考力	4	5
実行力	3	4
対応力	4	4
交渉力	3	4
会話力	5	4
計画力	3	4
規律性	3	4
運営力	3	3
貢献性	3	4

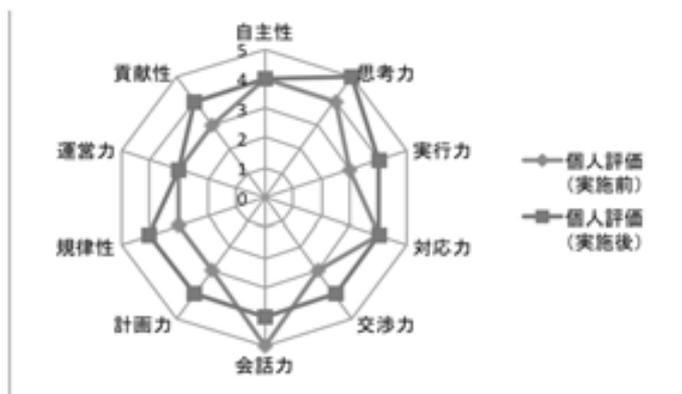


図 3-2-3c 高校生 B の 10 項目（能力）と熟議実施前後の変化

3. 事前・事後アンケートにみる大学生の変容

～大学生参加者の認識変容の傾向と役割による学習成果の違い～

大学生は、高校生とは異なり参加形態が「ファシリテーター」と「ワークショップ参加のみ」の 2 つある。全ての大学生が熟慮の段階の研修会とは異なる形で複数回の研修を受け、ファシリテーションの意味と技法を学んできた。ここでは、高校生同様、事前・事後アンケートを参考にしながら、大学生参加者の傾向と、2 つの役割の間でも学習成果の違いについて検討していきたい。

なお、事前・事後アンケートは、ワークショップ参加者を対象としているため、ファシリテーターには行っていない。大学生での、事前・事後アンケートの対象は、「ワークショップ参加のみ」に限定されるため、その件数は 7 名と少なくなっている。大学生の参加者数は 17 名である。後半示す、自己認識シートは全ての大学生を対象としている関係で回答件数は 17 件となっている。そのため、前述の、2 つの役割の学習成果については、後半で取り上げることとする。

(1) 事前アンケートにみる大学生の特性と関心

熟議への期待についてはアンケートの結果、高校生の傾向として、多様な意見を聞くことができるということが熟議のポイントであると考えた参加者が多かったのに対して、大学生は少数意見でも平等に扱われることに意義があると考えた傾向にある【図 3-3-1】。また、立場が上の人の意見に流されやすいことに不安を覚えることや、熟議の技法についても非効率的ではないのか、意見がまとまらずに決められないのではないのかという意見が多く若干懐疑的といえる【図 3-3-2】。高校生の傾向との比較で言えば役割を担っていることで、進め方の方法への関心が高い数値を示しているのではないかとと思われる【図 3-3-3】。

また別の回答からは、災害時におこる事柄については、高校生と比較して、情報についての関心は

それほど高くなく、津波への関心もそれほど高くなかった。津波への関心の低さは、瀬戸内海、さらには加古川という土地ゆえの数値と言えるのかもしれない。また、ボランティアの支援、避難所の環境などの生活の場所の確保についての関心が高い。これは参加者に熊本地震の被災地ボランティアに赴いた学生が多かったためと思われる。

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

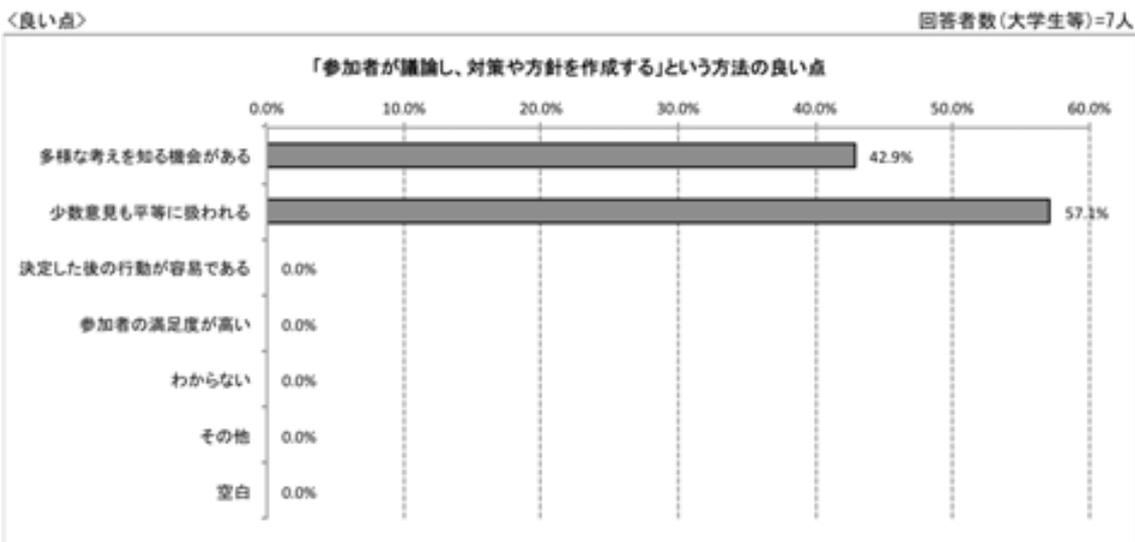


図 3-3-1 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点（大学生等）

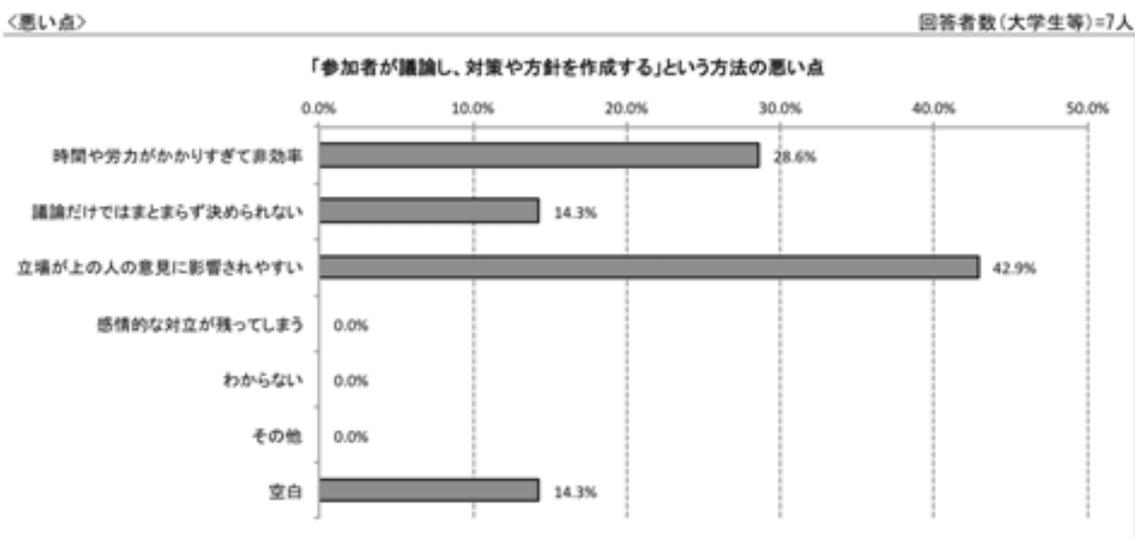


図 3-3-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点（大学生等）

7. 「熟議2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。1つ選
び番号を記入してください。

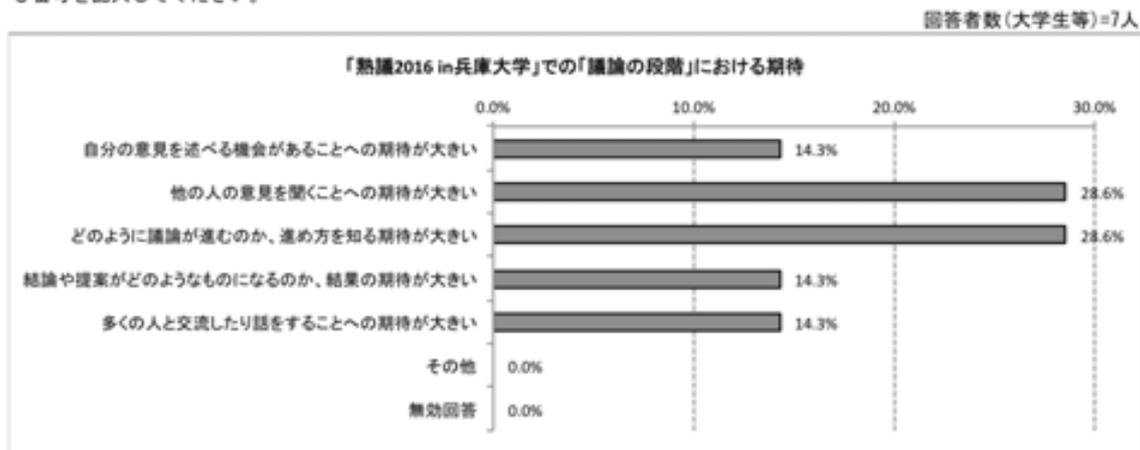


図 3-3-3 「熟議 2016 in 兵庫大学」での議論の段階における期待 (大学生等)

(2) 事後アンケートにみる熟議の影響 ～意義深い熟議の実践～

参加した大学生は概ねプログラムに対して満足感を得ている。そのうえ学んだ知見を活かす意欲ももっている。9割近い大学生が、自分の意見を整理すること、他の参加者の意見を理解しやすかったかという問いに対して共感的であるが、高校生の回答にも見られたように熟慮と熟議の関係について明瞭であるとする大学生ばかりではなかったということがこのデータからも推察される。そうした課題を抱えながらも、テーマ「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」への関心が高まり、知識を得たり深めたりする機会になった大学生はほぼ全員であった。さらにいえば、この数値は非常に評価できる。

学生の印象のなかで熟議の応用可能性についても前向きな認識が多く、「政策などへの様々な立場の人の意見の持ち方を知ること」をはじめ、意見をまとめる民主的な方法であり、行政が熟議のこうした結果に耳を傾けることの重要性も確認できる。そのなかでプログラムを通して多く人と話をできたことそのものへの価値を感じた印象は高校生とほぼ同じ印象であったといっていよう。

災害時の事柄への関心も、熟議前後で高校生と異なる傾向が見られた。高校生は、全ての項目において、熟議後の関心が高くなっていたが、大学生では、「住宅・建物の倒壊」「情報の入手が困難」「家族との連絡」「支援物資が入手できるまでの期間」「避難所の状況」「職場や学校の再開」「住宅の再建など生活の場所の確保」の7つの項目で関心の数値が下回っている。こうした項目についてなぜ関心が下がったのかについては少し検証が必要である【図 3-3-4】。

加古川地域を大地震が襲った場合の考え方については、いくつかの項目で検証すべき変化が見られた。「防災は主に自治体や政府の仕事であり住民の役割は限定されている」「被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい」といった項目への数値が上昇している。このことがどのような意味を持つのかも、より詳しい検証が必要である。一方で、「大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある」といった項目にも若干の数値の低下が見られる【図 3-3-5】。こう

した数値の変化と、各グループでの熟議の内容がどのように関係しているのかについては学習論の観点からはそれほど詳しい検証がなされていない。どの項目の数値が上昇すべき、であるとか、この数値の変化が倫理的に適切ではないという考えを除きつつ丁寧に検討していきたい変化である。

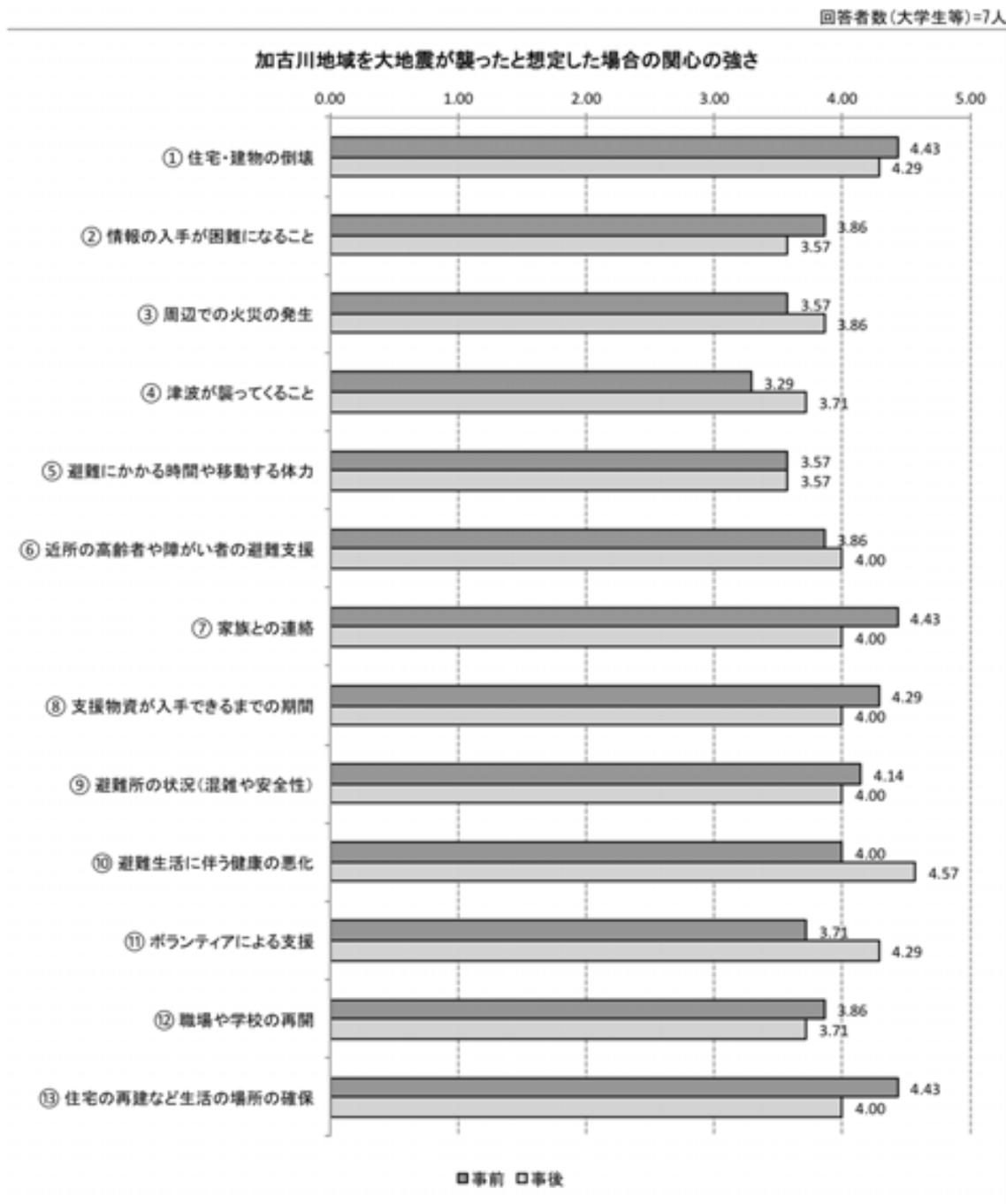


図 3-3-4 加古川地域を大地震が襲ったと想定した場合の関心の強さ (大学生等)

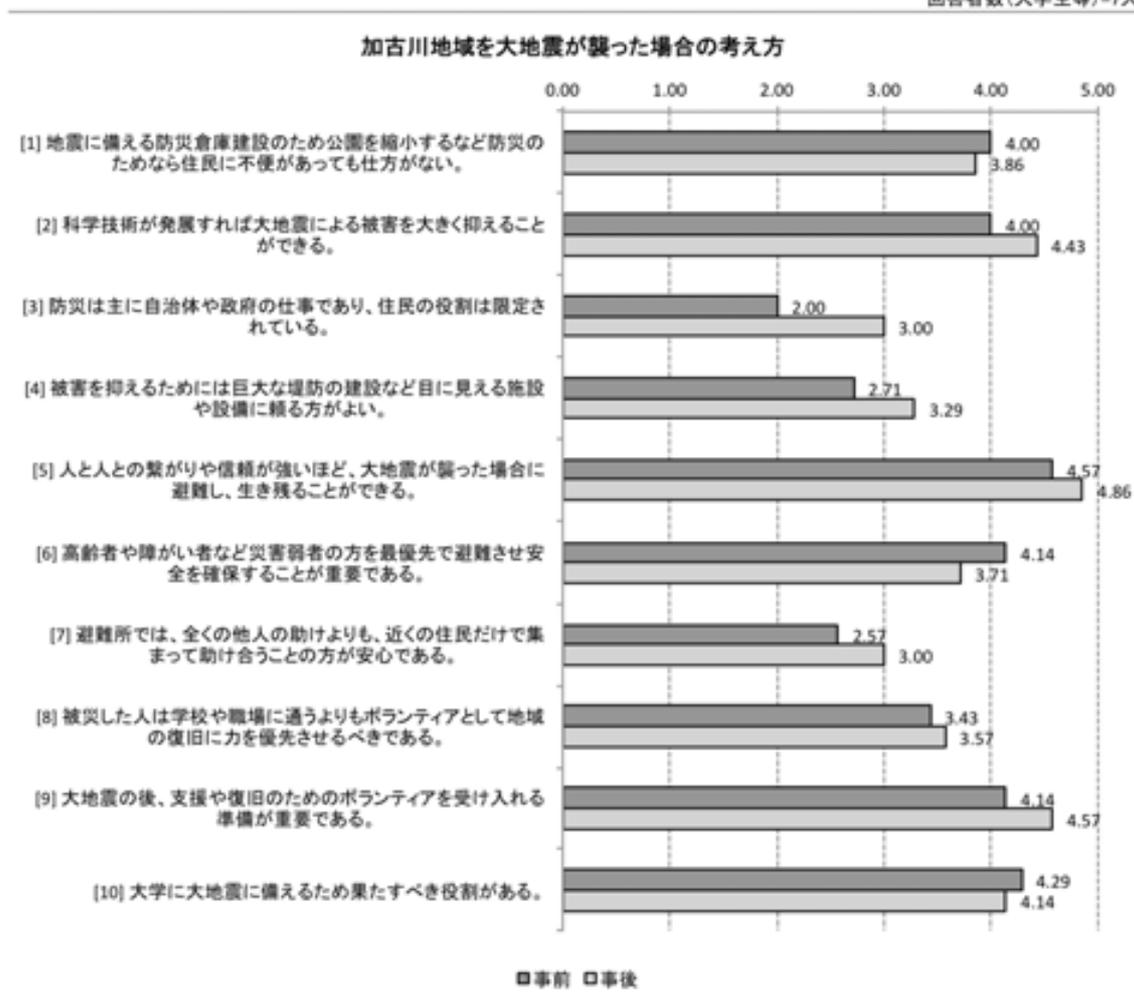


図 3-3-5 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方 (大学生等)

4. 自己認識シートにおける大学生の自己認識の変容

兵庫大学学生も高校生と同様、自己認識シートを記入した。学生ごとの役割（ファシリテーター、ワークショップ参加者）にかかわらずこのシートを分析すると、自主性（3.24→3.82）、思考力（3.12→3.59）、実行力（2.47→3.71）、対応力（3.00→3.94）、交渉力（2.53→3.82）、会話力（3.29→4.06）、計画力（3.00→3.47）、規律性（3.18→3.94）、運営力（3.00→3.88）、貢献性（2.59→3.59）の項目すべてにポジティブな変化を見ることができる。とりわけ、交渉力で+1.29、実行力は+1.24、そして貢献性では+1.00 という大きな変化を見ることができた【図 3-4-1】。

この数値から、大学生参加者全体の「傾向」として熟議を経て、自らの意見を表明する上での交渉力、グループワークの中でしっかりと表現する実行力について成長の手応えを得ていたことが考察できる。さらに、自分がワークショップの中で役割を果たしているという実感をもっていたことも併せ

て言うことができるであろう。しかしながら、役割（ファシリテーター、ワークショップ参加者）ごとに自己認識シートをみると、このプログラムが学生にとって必ずしもよいことばかりではなかったことが見えてくる。高校生と同様に、個人の自己認識について検討することも意義深いことであるが、ここでは、役割ごとの自己認識の変容を見ていくこととする。

兵庫大学学生 (N=17)

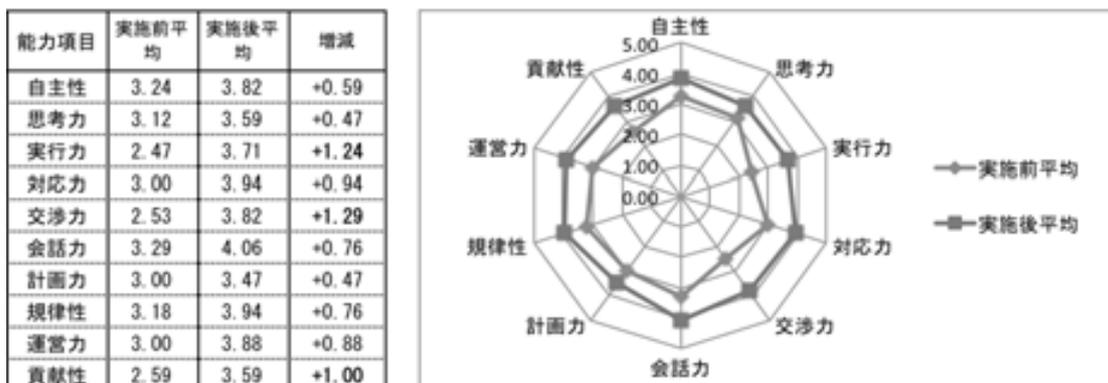


図 3-4-1 大学生（全体）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

(1) ファシリテーターとして参加した大学生の変容

熟議 2016 ではファシリテーターとして 10 人の大学生が参加した。この 10 名の自己認識シートには、多世代にわたる参加者が、非常に複雑な様態を示す災害の問題について議論することの難しさを見てとることができる。

自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで思考力と計画力にそれぞれ -0.10 、 -0.03 の数値の低下が見られたのである。少なくとも、熟議実施前よりも自己認識のレベルでは思考力と計画力には自信が持てなくなっていることになる

【図 3-4-2】。昨年の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、運営力、計画力、貢献性が $+1$ を超える上昇を見せていた。（「熟議 2015 in 兵庫大学」報告書 p124 参照）この変化をどのように考えれば良いであろうか。当該年度のテーマの問題、ファシリテーターを担う参加者のパーソナリティの問題、事前学習の方法の問題、いかなることがこの数値の変化を生んだのかは、さらなる検証を行うことで明らかにする必要があるといえる。いずれにせよ、ファシリテーターは大きな学びを得ることができる役割であるとともに、「難しさ」もまた直接的に感じる役割であるということは意識しておかねばならないことである。

ファシリテーター (N=10)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.20	3.68	+0.47
思考力	3.44	3.35	-0.10
実行力	2.28	3.79	+1.51
対応力	2.63	4.00	+1.37
交渉力	2.60	3.49	+0.89
会話力	3.21	4.32	+1.11
計画力	3.38	3.34	-0.03
規律性	3.20	3.87	+0.67
運営力	2.75	3.93	+1.18
貢献性	2.35	3.29	+0.94

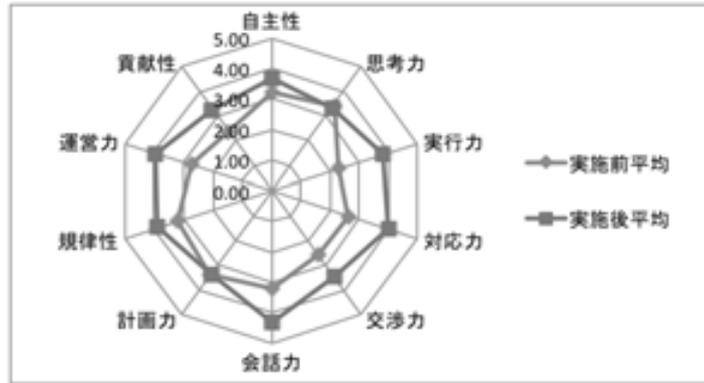


図 3-4-2 大学生（ファシリテーター）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

(2) ワークショップに参加者として加わっていた大学生の変容

「熟議 2016in 兵庫大学」のワークショップに参加した大学生は 7 名である。この 7 名の傾向についてデータをもとに検討する。自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の 10 項目のなかで WS 参加学生の数値が最も大きく変化したのは、交渉力で+1.71、続いて、思考力・貢献性の+1.14、実行力と計画力の+1.00 と続く【図 3-4-3】。ワークショップ参加者は、ファシリテーターと比較すると、役割として「しなければならないこと」が少なく、議論に積極的に参加し自らの意見をいかにわかりやすく述べるかであるとか他の参加者の意見をいかに理解し、議論を充実したものにするかという意識をもちやすい。それゆえ、直接的に自己認識に影響を与えるような局面が少なく、数値の低下は認められにくいのかもしれない。反対に、ファシリテーターをつとめた学生に見られた実行力 (+1.51)、対応力 (+1.37) という項目における大きな数値の上昇もみることができない。参加者の自己認識の「ゆらぎ」がおこりにくい立場であると考察できる。

ワークショップ参加学生 (N=7)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.29	4.14	+0.86
思考力	2.86	4.00	+1.14
実行力	2.71	3.71	+1.00
対応力	3.43	4.00	+0.57
交渉力	2.57	4.29	+1.71
会話力	3.43	3.86	+0.43
計画力	2.71	3.71	+1.00
規律性	3.14	4.00	+0.86
運営力	3.43	4.00	+0.57
貢献性	2.86	4.00	+1.14

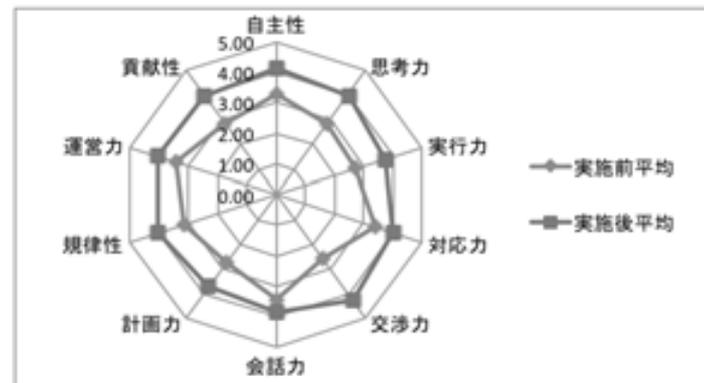


図 3-4-3 大学生（ワークショップ参加者）の 10 項目（能力）の熟議実施前後の変化

5. 総括 ～まとめ～

高校生は、もともとレーダーチャートの調査対象となる「力」に関心が高く、大学生にとっては、そうした「力」にそれほど強い関心を持っていないようにも考察された。しかしながら、高校生であれ、大学生であれ実際にはそれぞれの個別の課題を持ちつつ、熟議に参加してきており、レーダーチャートの変化からは、それぞれの高校生、大学生に非常に興味深い多くの学びを得ていることをみてとることができた。

事前・事後アンケートでは、高校生、大学生、(今回は言及しなかったが)一般参加者のプログラムに対する期待や傾向がつかめるため非常に有効なデータとなっている。しかし、災害に対する認識を問う部分では、少し問いが操作的に働いている側面があり、(行政主導で)(科学技術などを前提とした)ハードの整備よりもソフトの整備(人間関係を基軸とした)に重点を置くことが熟議の「正解」かのような認識がある。というのも、高校生、大学生のアンケートに対する回答が、事前アンケートの段階で人間のつながりや災害弱者の支援にウエイトがかかっている印象が強いのである。このことが、高校生、大学生の認識の実情を物語っているのであればただの邪推でしかないわけだが、一方で先に述べたようなソフト面を評価することの功罪についても意識的になるような視点を育む必要が求められる。

最後になるが、レーダーチャートは、全体的なパラメーターが熟議前後で確実に増加していることを示しているものの、高校生、大学生個人に目を向けると非常に個別性が高く、大きく高まった「力」と、パラメーターが低下している「力」がある。今後の課題としては、こうした個別性の問題をどのようにひろいあげながら熟議の「影響」「成果」を位置づけるのかという方法論が求められるであろう。

(小林洋司)

第4章 熟議への意見と

「大地震が加古川地域を襲ったら？」への意識の変化

1. 参加者への「熟議」アンケートの概要

討議型世論調査の方式を参考に、兵庫大学の熟議では、参加者に対し、事前のアンケートと事後のアンケートを課しており、その比較を行うことによりテーマに対する参加者の意見が、熟議の前後でどのような変化をするかを検証が可能である。これまでの熟議でもアンケート調査を実施してきた。その場合、例年共通した熟議や討議といった熟議手法に関する質問を設ける他、それぞれの年度毎のテーマに関する質問項目を用意する。テーマに関する質問は事前、事後のアンケートで共通させ、その差を熟議によつての意見の変化として明らかにする。

「熟議 2016 in 兵庫大学」においても、この方針を引き継ぐ。具体的なアンケートの設問作成は、田端の原案を踏まえ熟議プロジェクトチームで作成、結果の統計分析は同チームの森下が行った。

(1) 回答の回収数

「事前アンケート」、「事後アンケート」の回答の回収状況の概要を示しておく。

「事前アンケート」の回収数は、56件であり、「事後アンケート」の回収数は63件である。当日の参加者は、63名であった。両アンケートに共通し個別にマージが可能になる回答者数は54名であった。

「事前アンケート」「事後アンケート」の比較はこの集団を対象とする。今回、特に社会人の参加者が少ないため、所属別の分析では安定性が低いことに注意が必要である。

(2) 属性別の回答状況

	事前アンケート		事後アンケート	
	件数	比率	件数	比率
男性	31	55.4%	34	54.0%
女性	25	44.6%	29	46.0%
計	56	100.0%	63	100.0%

表 4-1-1 性別の回答数

性別では、やや男性が多いが、男女ほぼ同数である。これまでは、男性が2/3程度を占めており、今回の結果とは異なる。高校生では男女ほぼ同数（回答者数は事前で男性21件、女性19件、事後でそれ

ぞれ 20 件、23 件) となっており、高等学校側の配慮も影響をしていると思われる。

次に、参加者の構成であるが、既に触れているように、主として高校生を中心とすることとなっており、所属は次のようになっている。

	参加予定者		事前アンケート回答者		事後アンケート回答者	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
高校生	45	69.2%	40	71.4%	43	68.3%
大学生	8	12.3%	7	12.5%	7	11.1%
社会人	12	18.5%	9	16.1%	13	20.6%
計	65	100.0%	56	100.0%	63	100.0%

表 4-1-2 参加者・アンケートでの所属別の回答数

参加予定者では、高校生が 7 割、大学生が 12% であり、8 割以上を若年者が占める。以下の分析では、性別の他、所属別でのクロス集計を用いる。なお、昨年度の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、高校生が 52.5%、大学生が 12.5% であり、学生、生徒は 2/3 を占めていた。本年度は主権者教育を主眼に若年者への募集を行ったことで、学生、生徒が 8 割以上を占めるに至った。

2. 議論に臨む考え方と熟議への評価

(1) 議論への評価

熟議など議論の経験について、事前アンケート (N=56) を対象に分析をする。

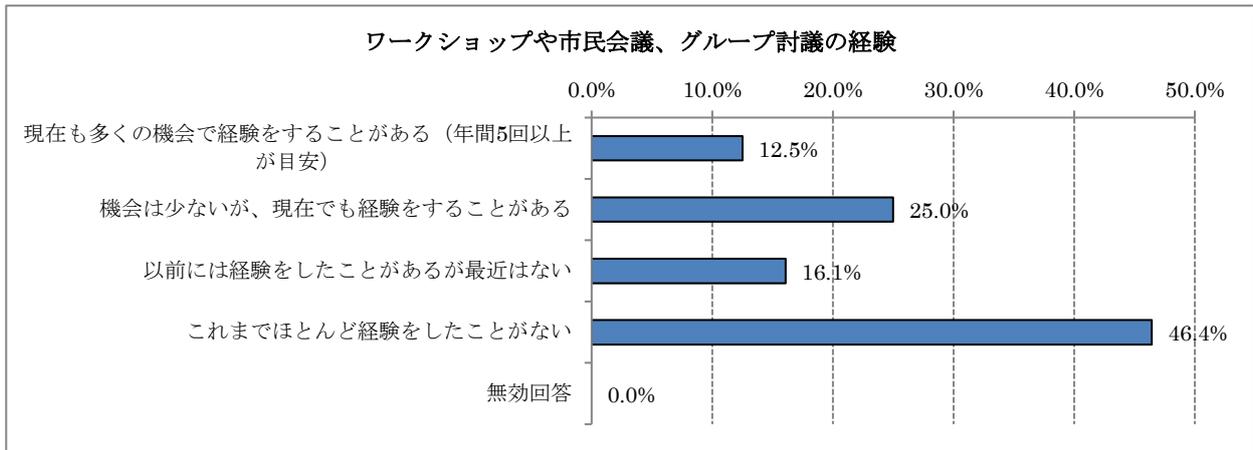


図 4-2-1 ワークショップや市民会議、グループ討議の経験

「これまでほとんど経験をすることが無い」との比率は 46.4% と半数近くを占めており、最も多くなっている。昨年の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、この選択肢の比率は 37.5% であったことから、やや上昇した。次いで、「機会は少ないが、現在でも経験をすることがある」が 25.0%、以下、「以前には経

験をしたことがあるが最近はない」の 16.1%、「現在も多くの機会に経験をする」は 12.5%であり、最近も含めて経験をしている、という回答は少数にとどまる。

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
現在も多くの機会に経験をする	4	10.0%	0	0.0%	3	33.3%
機会は少ないが、現在でも経験をする	7	17.5%	2	28.6%	5	55.6%
以前には経験をしたことがあるが最近はない	6	15.0%	2	28.6%	1	11.1%
これまでほとんど経験をしたことがない	23	57.5%	3	42.9%	0	0.0%
無効回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	40	100.0%	7	100.0%	9	100.0%

表 4-2-1 所属別・ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験

これを所属別に比較する。高校生についてみると、「これまでほとんど経験をしたことがない」が 57.5%を占めており、高校生の回答の割合が高いことが、「熟議 2015 in 兵庫大学」との違いの背景にある。社会人と比べ、高校生・大学生では社会経験が少なく、会議などの機会も少ないことを、昨年度報告書でも触れているが、この点は引き続き共通している。

次に、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」ことに対し、良い点と悪い点をそれぞれ求めた。

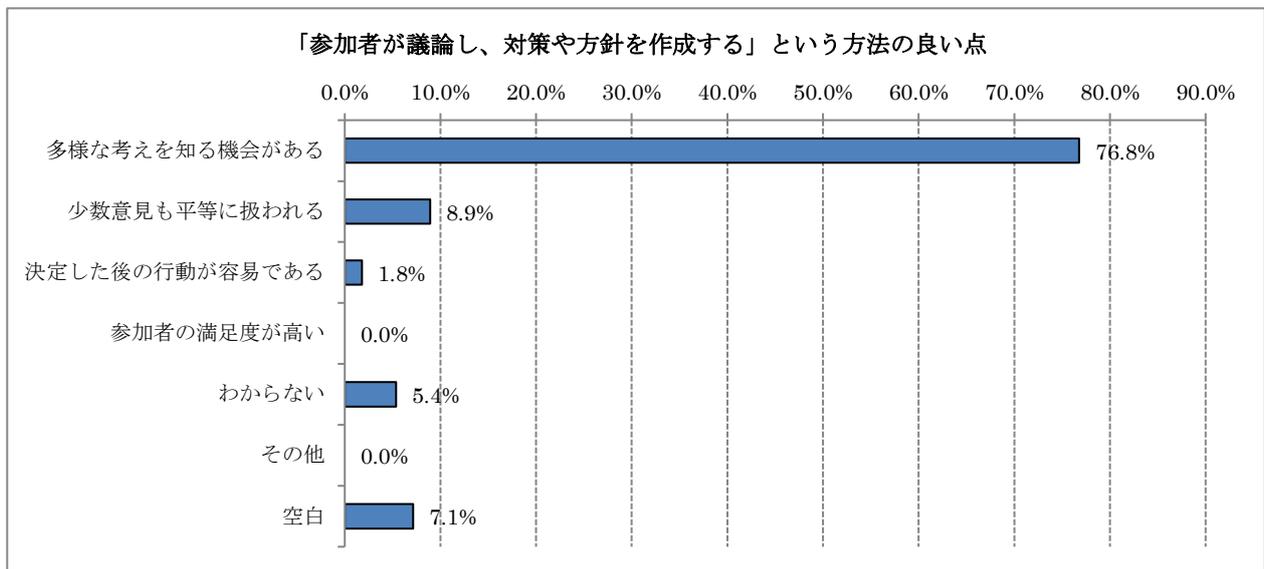


図 4-2-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

最も多い回答が、「多様な考えを知る機会がある」が 76.8%で最も多く、それ以外の選択肢への回答は極めて少ない。このことは、これまでの熟議でのアンケート結果にも見られたことである。

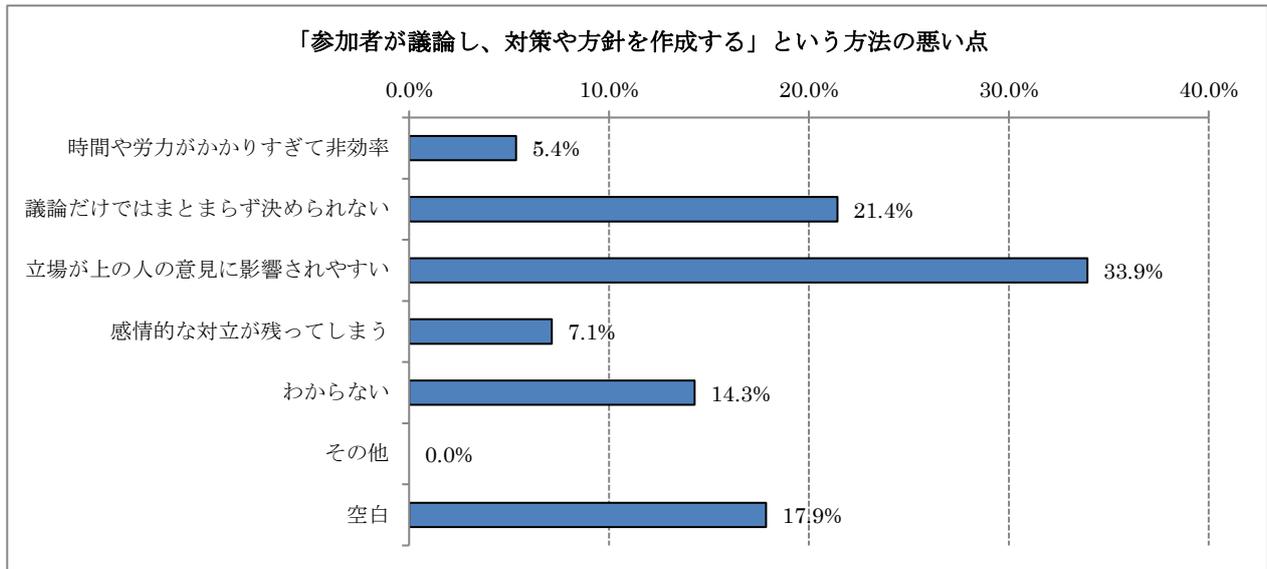


図 4-2-3 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

悪い点では「立場が上の人意見に影響されやすい」が 33.9%、次いで「議論だけではまとまらず決められない」で 21.4%である。これら 2 つの意見について、「熟議 2015 in 兵庫大学」の際には、逆に「議論だけではまとまらず決められない」が最も多く 33.8%、「立場が上の人意見に影響されやすい」が 25.0%であったが、さらにその前年「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「立場が上の人意見に影響されやすい」が最大になるなど、両選択肢については、年度により、入れ替わりがあった。いずれにしても、これらの割合が高いことは、「決定する」ということについて参加者で左右をされる議論という方法は不利な点がある、と考えていると思われる。

所属別で良い点と悪い点について【表 4-2-2】【表 4-2-3】に示す。

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
多様な考えを知る機会がある	31	77.5%	3	42.9%	9	100.0%
少数意見も平等に扱われる	1	2.5%	4	57.1%	0	0.0%
決定した後の行動が容易である	1	2.5%	0	0.0%	0	0.0%
参加者の満足度が高い	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
わからない	3	7.5%	0	0.0%	0	0.0%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
空白	4	10.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	40	100.0%	7	100.0%	9	100.0%

表 4-2-2 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
時間や労力がかかりすぎて非効率	1	2.5%	2	28.6%	0	0.0%
議論だけではまとまらず決められない	8	20.0%	1	14.3%	3	33.3%
立場が上の人の意見に影響されやすい	13	32.5%	3	42.9%	3	33.3%
感情的な対立が残ってしまう	4	10.0%	0	0.0%	0	0.0%
わからない	8	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
空白	6	15.0%	1	14.3%	3	33.3%
計	40	100.0%	7	100.0%	9	100.0%

表 4-2-3 所属別・「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

良い点として挙げられる中で、高校生では、「空白」が 10.0%、「わからない」が 7.5%を占めていることが注目される。従来の回答よりも高く表れている。議論の経験がないとの回答も多く、経験不足から良い点についても回答が難しかった。また社会人では全員が「多様な考えを知る機会がある」を挙げており、大学生は「少数意見も平等に扱われる」を挙げている。社会人の場合と大学生の場合の差であるが、前者の場合は方針が決定することを前提に、絞り込むことを重視し、その中で多様な意見が得られることを、後者はファシリテーション講習を受けるなど熟議が議論を一度広げる利点を理解したうえで、少数意見が重要となることを心得ている。

悪い点としては、高校生では、やはり「わからない」と「空白」が多く、全体の 1/3 を占める。「立場が上の人の意見に影響されやすい」が 32.5%、「議論だけではまとまらず決められない」が 20.0%であるなど、議論の決定を想定しての回答が多い。

(2) 議論に対する期待と得られた成果

「熟議 2016 in 兵庫大学」における議論の段階への期待と、議論の後に実際に得られた成果について、「事前アンケート」での設問である、『熟議 2016 in 兵庫大学』での『議論の段階』において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか」と「事後アンケート」にある設問『熟議 2016 in 兵庫大学』の議論の段階で、あなたにとってはどのような成果がありましたか」の回答を、前者を期待と後者を成果として比較する。なお、比較を行うために、ここでは事前、事後のアンケートの双方を回答した共通回答者 (N=54) を対象とする。

期待での回答の多い項目は、「他の人の意見を聞く」で 35.2%である。意見を聞くことへの期待は、「熟議 2015 in 兵庫大学」では 50.7%であったが、今回の結果はほぼ 1/3 に留まる。次いで、「多くの人と交流したり話をする」が 29.6%であるが、「熟議 2015 in 兵庫大学」では 19.2%であったことを踏まえると、交流への期待が大きくなっている。また「自分の意見を述べる」の期待は 7.4%を占めている。昨年度の「熟議 2015 in 兵庫大学」では 8.2%、それ以前は、1~3%程度であったことから、意見を述べる期待は高まる傾向にある。聞くから、話す、交流するへと熟議への期待は変化をしている。「ど

のような議論が進むのか、進め方を知る」は13.0%、「結論や提案がどのようなものになるのかを知る」は11.1%である。両選択肢はこれまで15~20%を占めていたが、議論の進め方への期待は減じている。

次に、成果では、「他の人の意見を聞く」が38.9%であり、期待と比べると比率はやや上昇をしている。これに対し事後大きく伸ばすのは、「自分の意見を述べる」であり24.1%である。過去の結果を見ても、昨年度2015年度では、期待段階では8.2%から成果で24.7%、以下、2014年度は3.4%から22.7%、2013年度は1.3%から17.9%といずれも増加しており、熟議での成果として、「自分の意見を述べる」ことの重要性の認識であろう。「多くの人と交流したり話をする」も24.1%とやや低下をしているが、差は大きくはない。「どのように議論が進むのか、進め方を知る」、「結論や提案がどのようなものになるのかを知る」はいずれも比率が低下している。

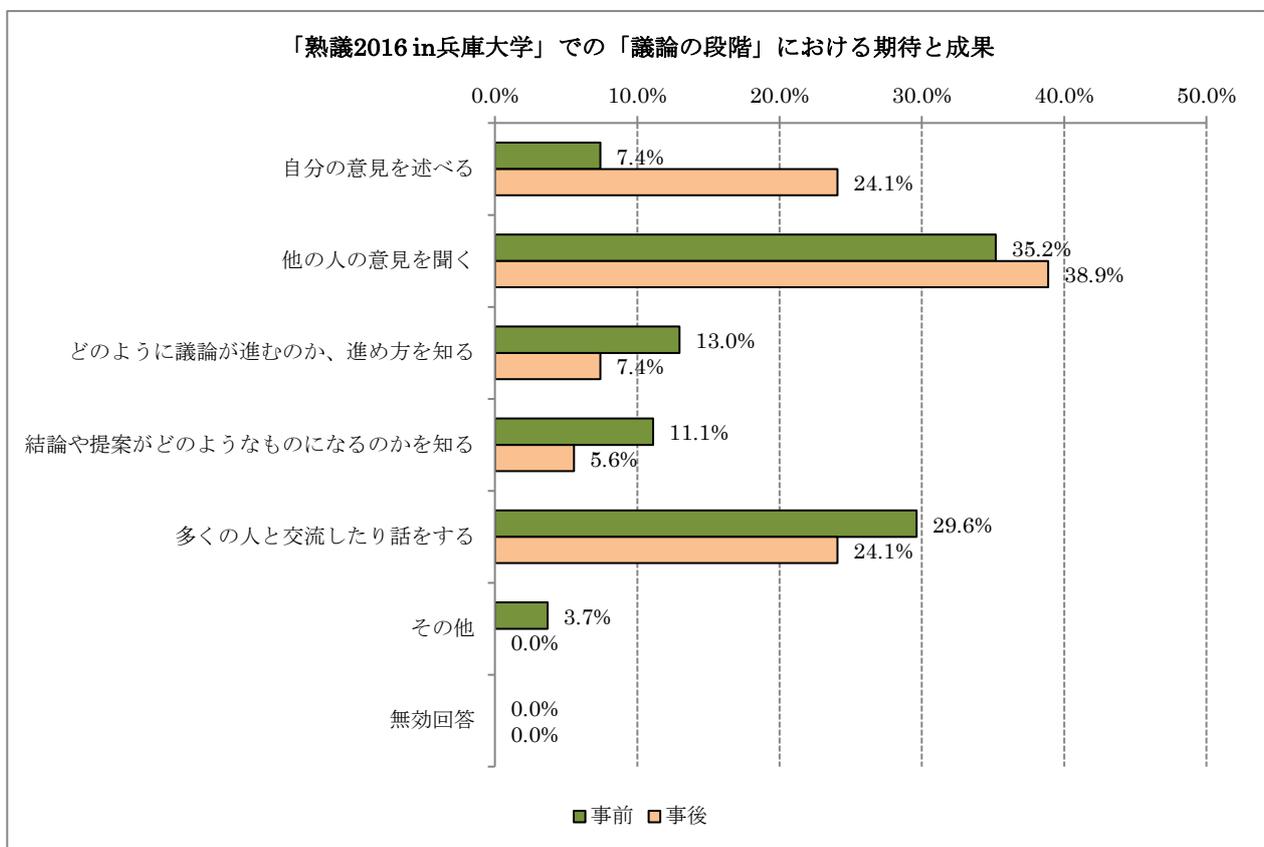


図4-2-4 「熟議 2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

3. 「熟議 2016 in 兵庫大学」と熟議民主主義

(1) 認知度と参加

兵庫大学での「熟議」は、議論の機会だけではなく、事前の熟慮やその後の交流なども含む一連の手法である。同時に、熟慮して議論をするという熟議の意味は、「熟慮の国会」などのフレーズにも現れるように、参加者が様々な課題について、議論をすることでその解決に導くことを意味し、それゆえに主

権者教育としての役割が高い。熟議という言葉の認知度が高まることは、その意味で重要と考えられる。
参加者の熟議に対する認知度を明らかにするため、熟慮の前の段階での調査（N=56）結果を示す。

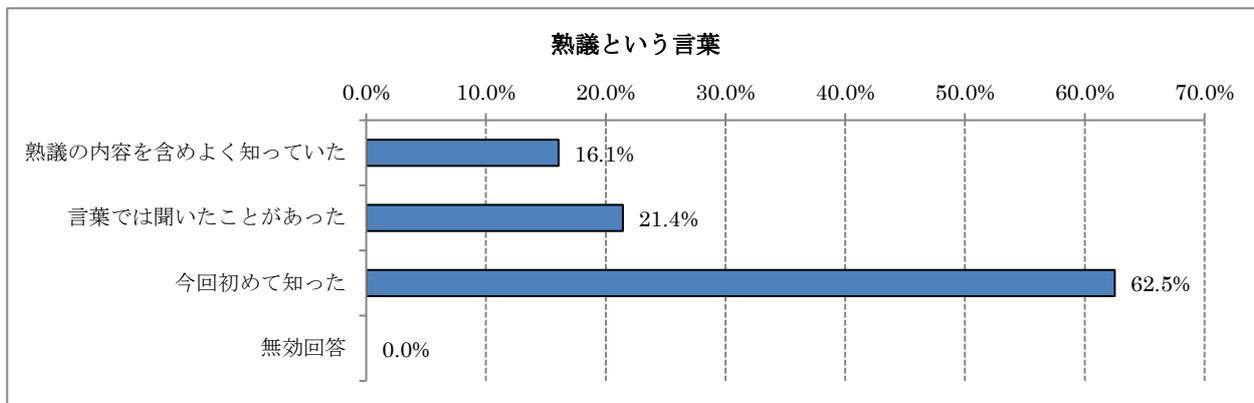


図 4-3-1 熟議という言葉の理解

「熟議の内容を含めよく知っていた」との回答は 16.1%、「言葉では聞いたことがあった」は 21.4%、「今回初めて知った」は 62.5%である。「今回初めて知った」との回答が、2/3 を占めている。昨年度の場合、「今回初めて知った」との回答が 55.0%であるため、知らない、との回答が増加したことになる。その背景として、所属別の認知状況を示す【表 4-3-1】と、高校生では、「今回初めて知った」が 70.0%、大学生は 71.4%となっており、若年者での知名度が低い中、高校生の参加を増やしたことがある。

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
熟議の内容を含めよく知っていた	4	10.0%	0	0.0%	5	55.6%
言葉では聞いたことがあった	8	20.0%	2	28.6%	2	22.2%
今回初めて知った	28	70.0%	5	71.4%	2	22.2%
無効回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	40	100.0%	7	100.0%	9	100.0%

表 4-3-1 所属別・熟議という言葉の理解

熟議の認知度はどのように変化をしたか、当該質問項目については、2012 年度に実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、毎年調査をしている。【図 4-3-2】は、毎年の調査結果から、熟議についての理解の変化を示したものである。「熟議の内容を含めよく知っていた」は、2012 年度には 3.1%であったが、2014 年度まで上昇し、その後の変化はほとんどない。「今回初めて知った」との回答は「熟議 2015 in 兵庫大学」の時点で 55.0%にまで減少をしたものの、今回の調査では 62.5%と再び高くなっている。参加の対象を高校生など若年者に拡大した結果、知らない、と回答した層が拡大していることになる。主権者教育において、一人一票制や多数決の原理などの方法とともに、議論への参加とそれによる決定という、熟議の意義や考え方も学習の項目として取り上げていかなければならないことを示す。さもなけ

れば、国会や議会で絶対多数の与党が「数の論理」で押し切ることが、強行採決と呼ばれることや、また実際にも困難であるという点の説明が難しくなる。

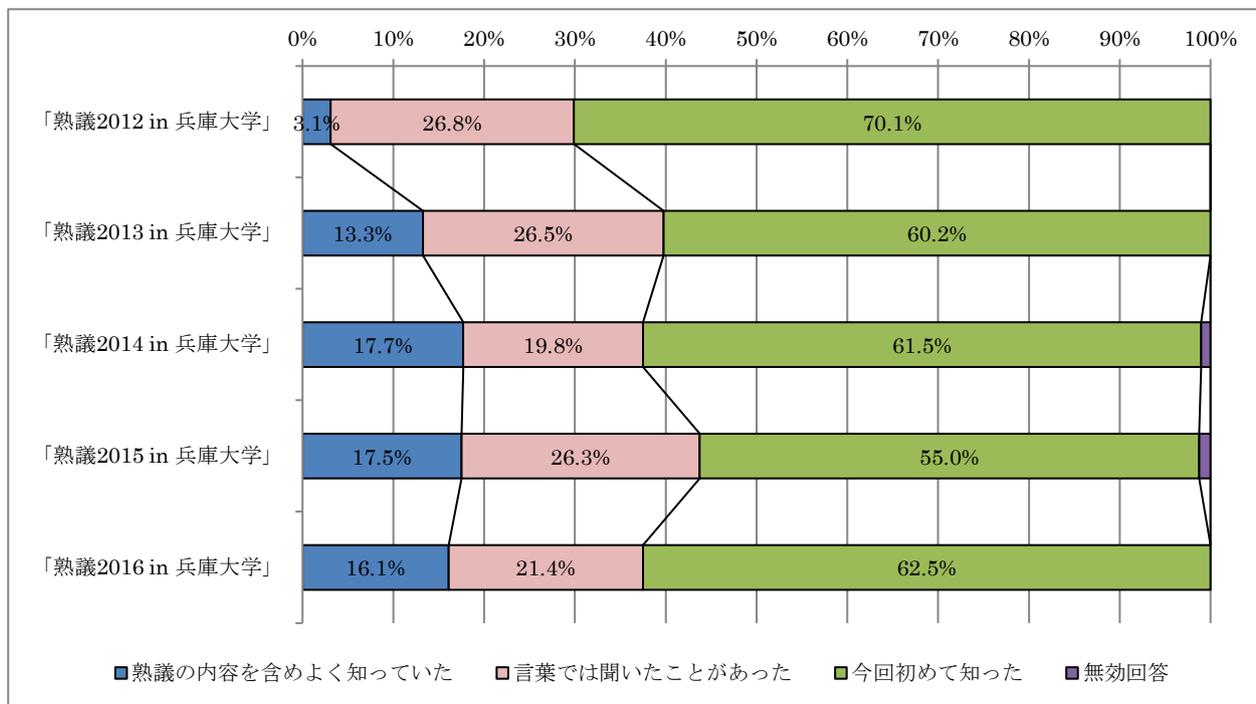


図 4-3-2 熟議という言葉の理解の変化

次に、「熟議 2016 in 兵庫大学」への参加理由を複数回答で【図 4-3-3】に示す。

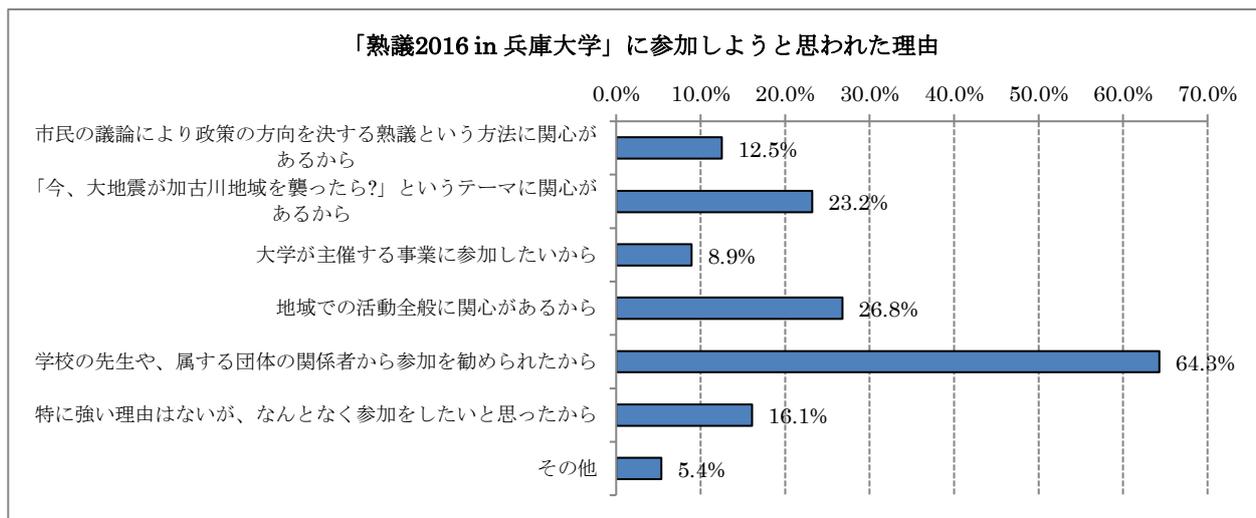


図 4-3-3 「熟議 2016 in 兵庫大学」への参加理由

「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」は 64.3%である。比率は回答者に

対する比率であるため、参加者のうち 2/3 が回答をした、といえる。【表 4-3-2】に所属別での結果を示すが、高校生 40 人では 75.0%と 3/4 が回答をした項目である。ただし、昨年度の「熟議 2015 in 兵庫大学」では、高校生・大学生で 84.9%であったことを踏まえると、先生から言われたから参加をした、という仕方なく派の生徒はやや減っている。

【図 4-3-3】に注目し、次に多い回答は、「地域での活動全般に関心があるから」が 26.8%、「今、大地震が加古川地域を襲ったら?」というテーマに関心があるから」が 23.2%である。これに対し「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」という熟議手法への関心が 12.5%に留まっていることから、参加の理由として地域に対する関心があると思われる。

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから	3	7.5%	1	14.3%	3	33.3%
「今、大地震が加古川地域を襲ったら?」というテーマに関心があるから	7	17.5%	1	14.3%	5	55.6%
大学が主催する事業に参加したいから	2	5.0%	3	42.9%	0	0.0%
地域での活動全般に関心があるから	7	17.5%	2	28.6%	6	66.7%
学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから	30	75.0%	5	71.4%	1	11.1%
特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから	8	20.0%	1	14.3%	0	0.0%
その他	2	5.0%	0	0.0%	1	11.1%
計	59		13		16	

(比率欄は各項目における回答者に対する割合で合計は 100.0%にならない)

表 4-3-2 所属別・「熟議 2016 in 兵庫大学」への参加理由

【表 4-3-2】では、社会人で「地域での活動全般に関心があるから」が 66.7%と 2/3 の回答者が回答をしており、「『今、大地震が加古川地域を襲ったら?』というテーマに関心があるから」が 55.6%と過半数を占めている。社会人では、主体的な参加者が多く、地域への関心があって参加をしている。

熟議の進め方に関する理解、であるが「十分に理解することができた」は 10.7%、「大体は理解することができた」は 67.9%で、合わせて 78.6%が手法を理解したといえる【図 4-3-4】。昨年度「熟議 2015 in 兵庫大学」は、10.0%、78.8%とあったため、昨年度より下回っている。気になるのは、「あまり理解をすることができなかつた」が 19.6%を占めており、これは昨年度で 10.0%であったことを踏まえると、2 倍に達している。昨年度よりも理解をしている、という回答者が減少をしている。特に、高校生 (N=40) では「あまり理解をすることができなかつた」が 25.0%を占め、当該熟議を主権者教育と位置付けておきながら、高校生の理解が十分ではなかつたことは反省点である。

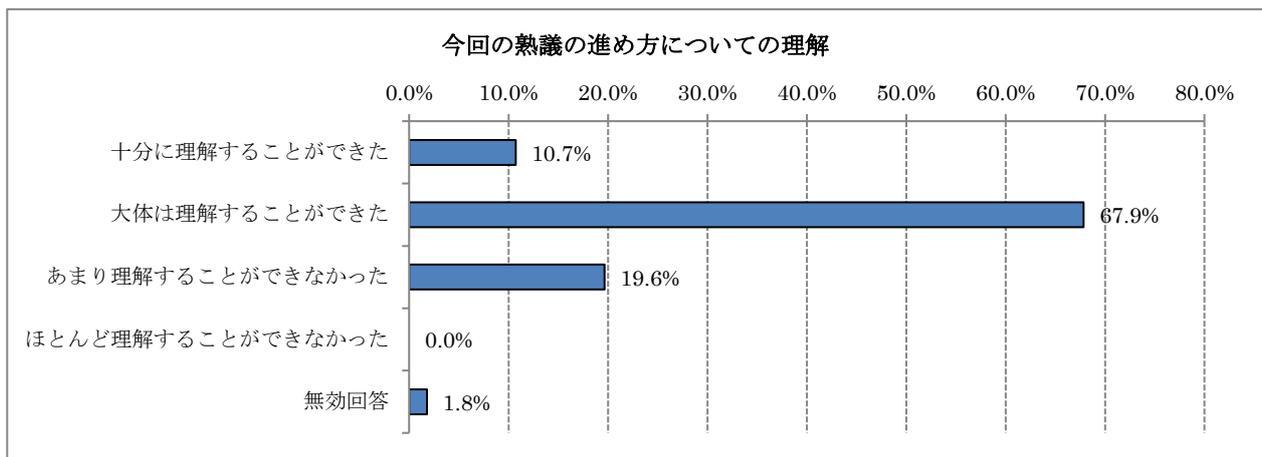


図 4-3-4 今回の熟議の進め方についての理解

(2) 熟議への評価と比較

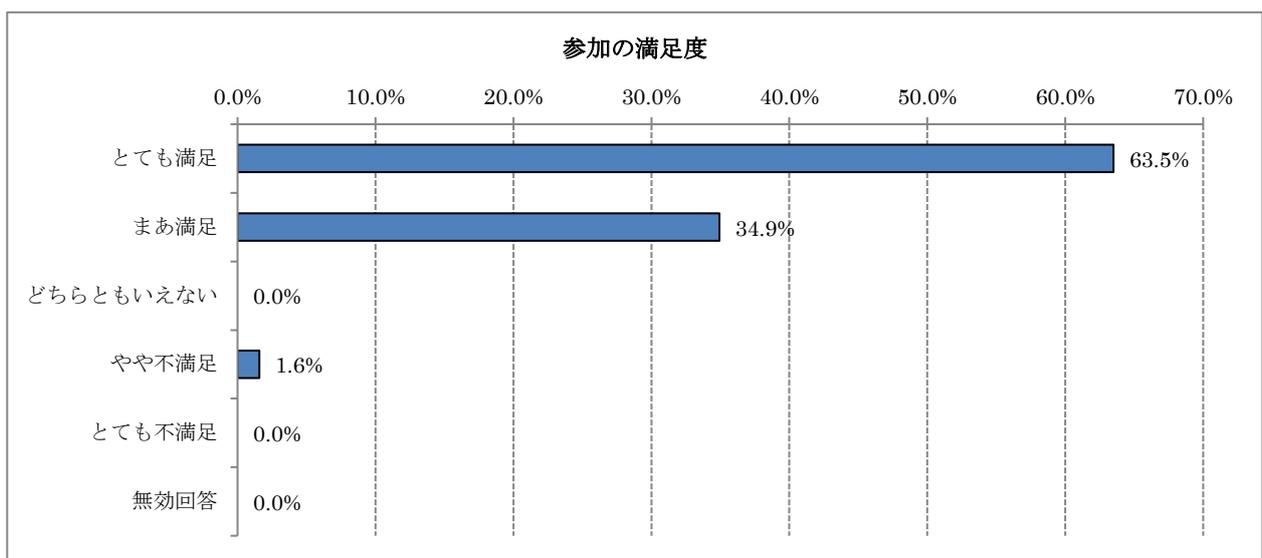


図 4-3-5 参加の満足度

熟議への参加についての評価は、参加してのちの参加者の考え方であり、「事後アンケート」(N=63)の結果に基づいている。

参加したことに対し、「とても満足」が 63.5%、「まあ満足」が 34.9%との回答が得られた。ほとんどの回答者が満足をしている、との結果である【図 4-3-5】。

	高校生		大学生等		社会人	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
とても満足	26	60.5%	4	57.1%	10	76.9%
まあ満足	16	37.2%	3	42.9%	3	23.1%
どちらともいえない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
やや不満足	1	2.3%	0	0.0%	0	0.0%
とても不満足	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
無効回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	43	100.0%	7	100.0%	13	100.0%

表 4-3-3 所属別・参加の満足度

所属別での比率を【表 4-3-3】に示しておく。高校生では「とても満足」が 60.5%、「まあ満足」が 37.2%であり、社会人では「とても満足」が 76.9%、「やや満足」が 23.1%となり、社会人では「とても満足」との回答が多くなっている。

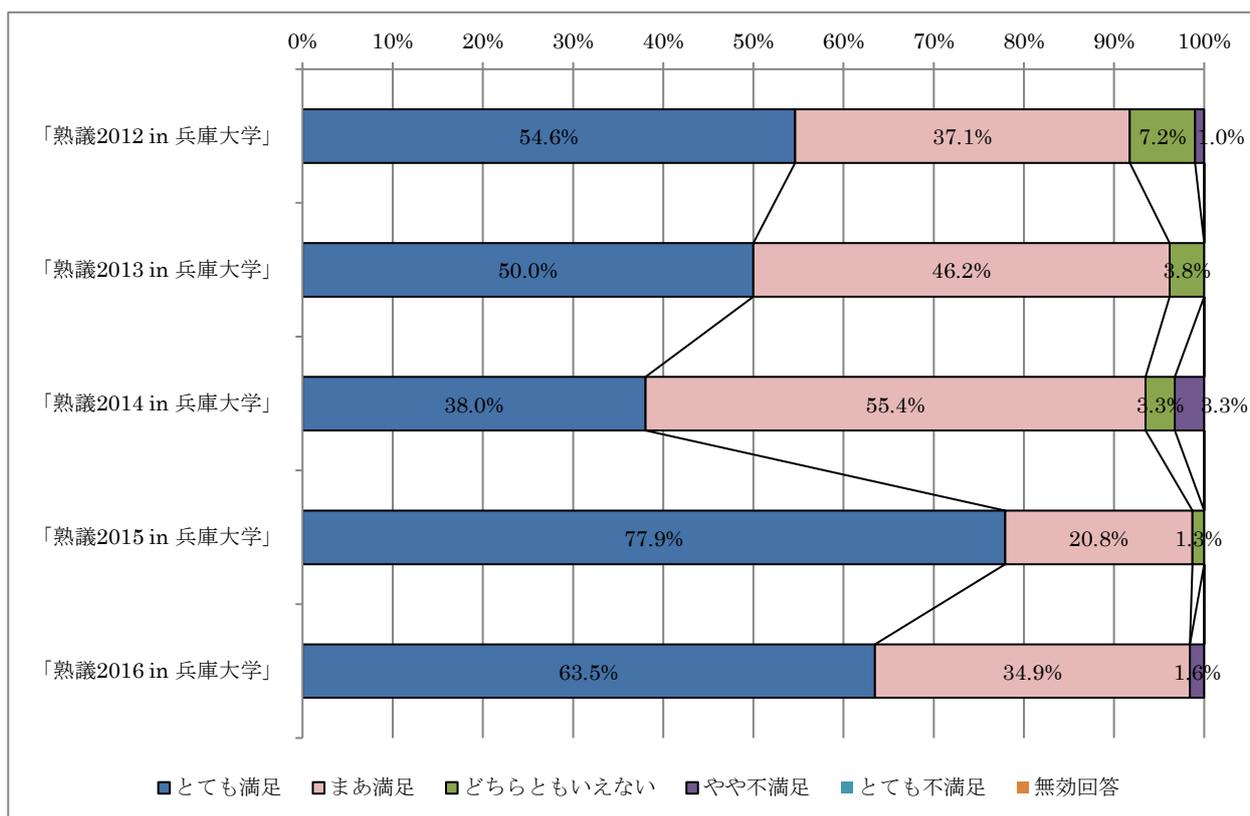


図 4-3-6 参加の満足度の変化

この満足度について、【図 4-3-6】にその経年での変化を示す。「熟議 2012 in 兵庫大学」以降、「とても満足」の回答の比率が低下し、「どちらともいえない」、「やや不満足」との比率が拡大する傾向が見られ危機感を持ったが、「熟議 2015 in 兵庫大学」では、「とても満足」が 77.9%と過去で最も高い比率を示した。今回、「とても満足」の回答が低下しており、高い満足度を維持することの難しさがわかる。

次に、経験を今後に活かすことについての結果を【図 4-3-7】に示す。

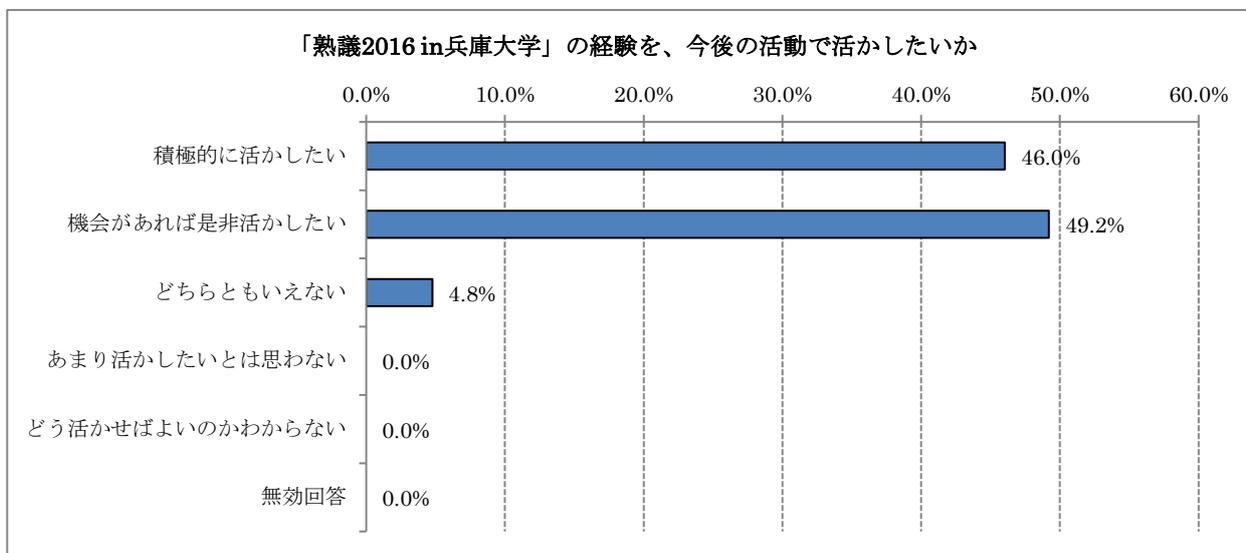


図 4-3-7 「熟議 2016 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

「積極的に活かしたい」は 46.0%、「機会があれば是非活かしたい」は 49.2%である。半数近くが積極的に活かしたいと答えるなどほとんどの回答者が、活かすことに賛成である。

所属別で、高校生だけに限ると、「積極的に活かしたい」は 39.5%とやや低く、「機会があれば是非活かしたい」が 53.5%である。社会人（N=13）の場合は「積極的に活かしたい」は 69.2%、「機会があれば是非活かしたい」は 30.8%であり、社会人の方が経験を活かすことに前向きである。

併せて、この点について、過去からの変化を把握しておきたい。【図 4-3-8】に経年での変化を示しておく。まず、年度により上下はあるものの、「積極的に活かしたい」との比率は増加する傾向にある。そして「どちらともいえない」、「あまり活かしたいとは思わない」といった、経験を活かすことについて、どちらかといえば消極的である、との回答の比率は低下する傾向にある。熟議の成果を今後の活動に活かすことができれば、主権者教育としての意義も高まるといえる。

ところで「積極的に活かしたい」の比率は、満足度とも関係があるようにも思われる。【図 4-3-6】と比較すると、「とても満足」の比率が高い 2015 年度では、「積極的に活かしたい」の比率も高くなっている。逆に、同比率が低い 2014 年度は、「積極的に活かしたい」との比率も低下する。熟議が満足する結果で終わったかどうか、拡大することへの積極性に影響をしている。良い経験をした商品をお勧めする、という消費者の心理にも近いものがあるのかもしれない。

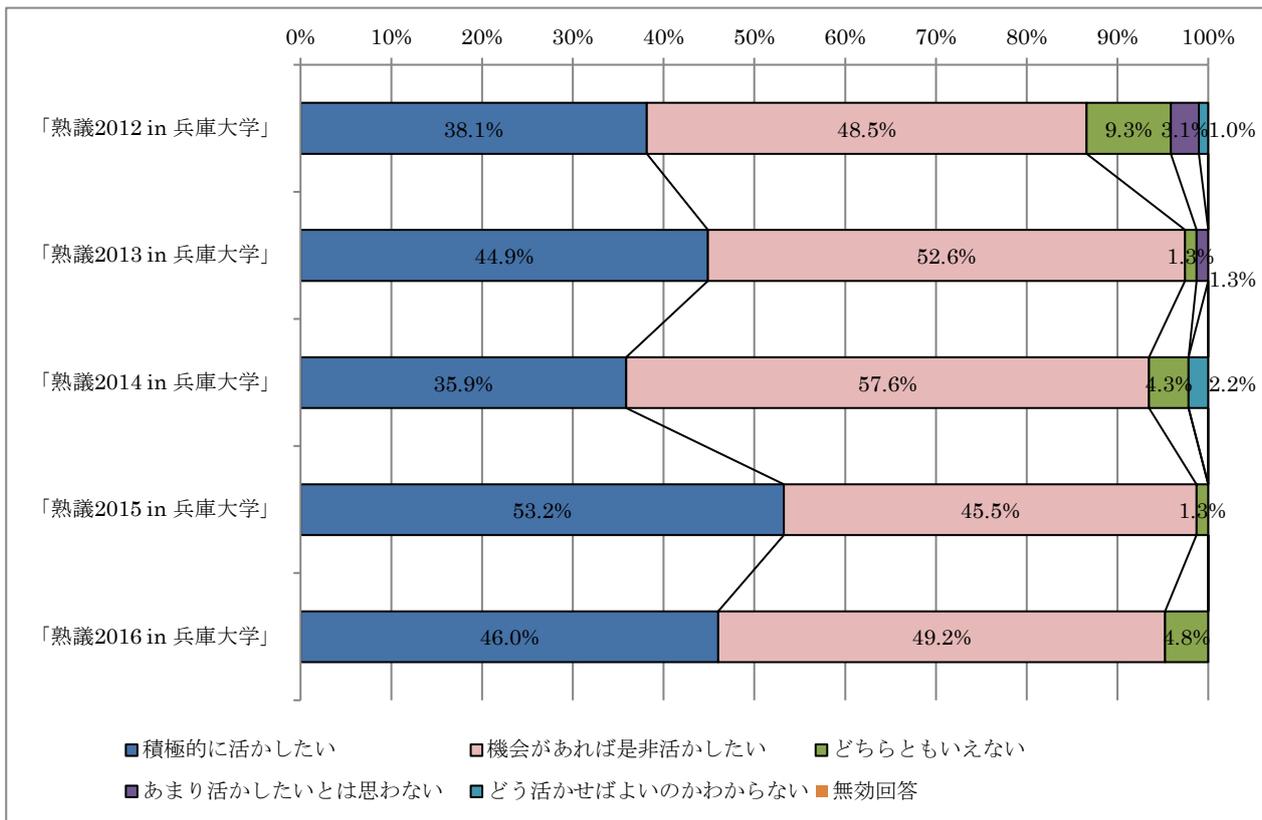


図 4-3-8 熟議の経験を、今後の活動で活かしたいかの変化

熟議を終えて、熟議の優位性を考えるため、他の議論や決定の在り方とも比較しての利点を示す。ここでは、下記の 7 つの項目について、「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」の 5 段階の回答で評価をするものである。回答が肯定的であれば、熟議が他の手法よりも優位性があることになる。

- [1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった
- [2] 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった
- [3] これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた
- [4] 熟議を通して、テーマ（今、大地震が加古川地域を襲ったら?）について、興味や関心がより高まった
- [5] 議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった
- [6] 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った
- [7] 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった

[1]、[2]が熟慮の、[3]～[5]が議論の、[6]、[7]が振り返りの段階に関する項目である。

それぞれの項目についての構成比率について【図 4-3-9】に示す。

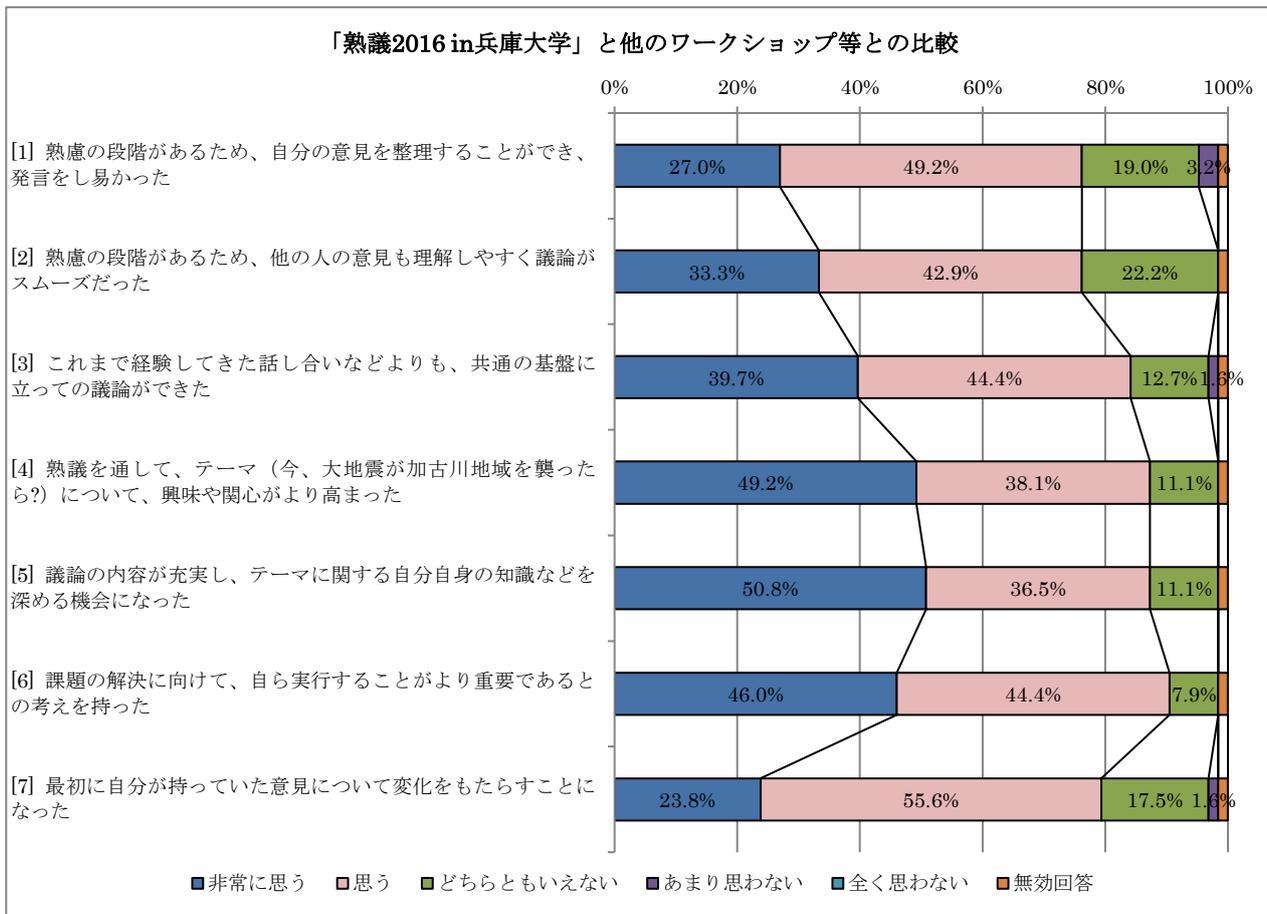


図 4-3-9 「熟議 2016 in 兵庫大学」と他のワークショップ等との比較

「非常に思う」が最も多いものは、「[5] 議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」で 50.8%と過半数に達する。また「思う」が 36.5%である。昨年度の結果でも「非常に思う」が 48.1%、「思う」が 40.3%と肯定的な意見が他の項目と比して最も多かった。昨年度同様、ワークショップ形式での議論が充実していた点が評価をされている。次に、「[4]熟議を通して、テーマ（今、大地震が加古川地域を襲ったら?）について、興味や関心がより高まった」という項目で「非常に思う」が 49.2%、「思う」が 38.1%と高い数値である。主として議論の段階での評価が高いといえる。さらに、「[6] 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」で、「非常に思う」が 46.0%、「思う」が 44.4%であった。いずれの項目とも、昨年度も調査では賛同が多く、一連の熟議手法により、テーマに対する関心を持ち、充実した議論の結果、それを実現することの重要性を理解することができた、といえる。決定を実現に移すことの重要性を踏まえた熟議手法の意義が理解をされている。

ただ熟慮の段階を設けていることについては、「[1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった」は、「非常に思う」が 27.0%、「思う」が 49.2%、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は 33.3%、42.9%となっており、議論の段階

と比して、熟慮の期間についての評価は必ずしも高くはない。熟慮段階を設けることは熟議を進める前提であるため、工夫が必要といえる。振り返りの中で「[7] 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」は、「非常に思う」が23.8%と、項目中では最も低い。ただ「思う」は55.6%を占めている。議論を踏まえて行動を統一する、ということは理解はされつつあるといえる。

「非常に思う」を2、「思う」を1、「どちらともいえない」を0、「あまり思わない」を-1、「全く思わない」を-2として、有効回答数で除した平均ポイントを計算する。このポイントについて所属別で算出し、【図4-3-10】に示す。

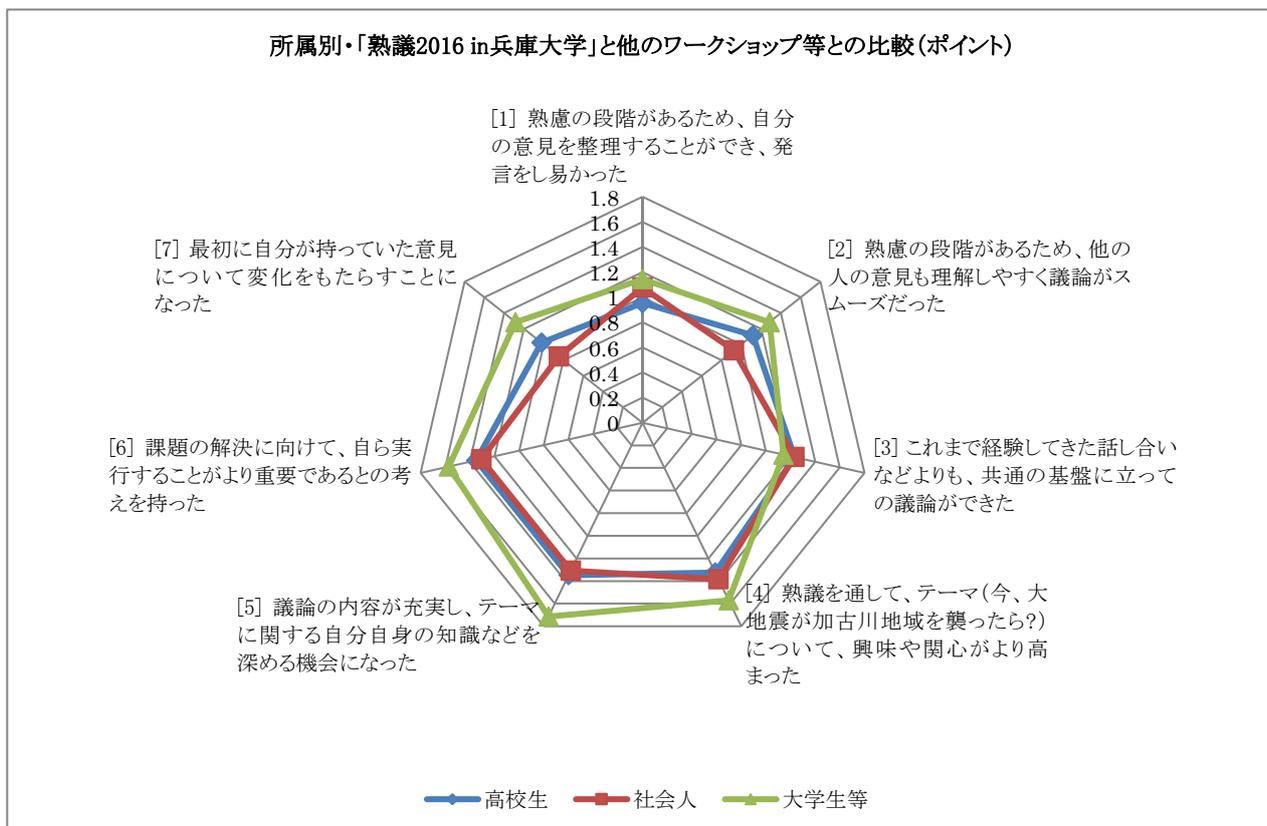


図4-3-10 所属別・「熟議2016 in兵庫大学」と他のワークショップ等との比較(ポイント)

全体として、大学生のポイントが高くなっているが、これは回答者が7名と少なく、結果的に「非常に思う」と「思う」以外の回答に、「回らなかった」ことが影響をしている。

熟慮の段階では、「[1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった」は高校生が0.95に対し、社会人では1.17と社会人が高く、「[2] 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は高校生が1.12、社会人が1.00と高校生が高い。社会人は発言について、高校生は聞くことについて役立った、との回答である。社会経験のある社会人と高校生との知識における差、いわば情報の非対称性の解消が課題であり、高校生にとっては熟慮を通し、理解度を高めたこと、社会人では知識を整理することに役立ったのである。議論の段階での項目は高校

生と社会人とではポイントの差が見られない。ただし、個別の回答の比率で差が見られるのは、「[4] 熟議を通して、テーマ（今、大地震が加古川地域を襲ったら?）について、興味や関心がより高まった」であり、高校生の場合、「非常に思う」が 46.5%、「思う」が 39.5%、社会人ではそれぞれ 53.8%、30.8%であった。社会人の方が議論を通し、より地域課題に敏感になっている。

振り返りの段階では「[7] 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」については高校生が 1.02、社会人が 0.92 と差が見られる。高校生は意見を変化させることについて、柔軟であるといえる。

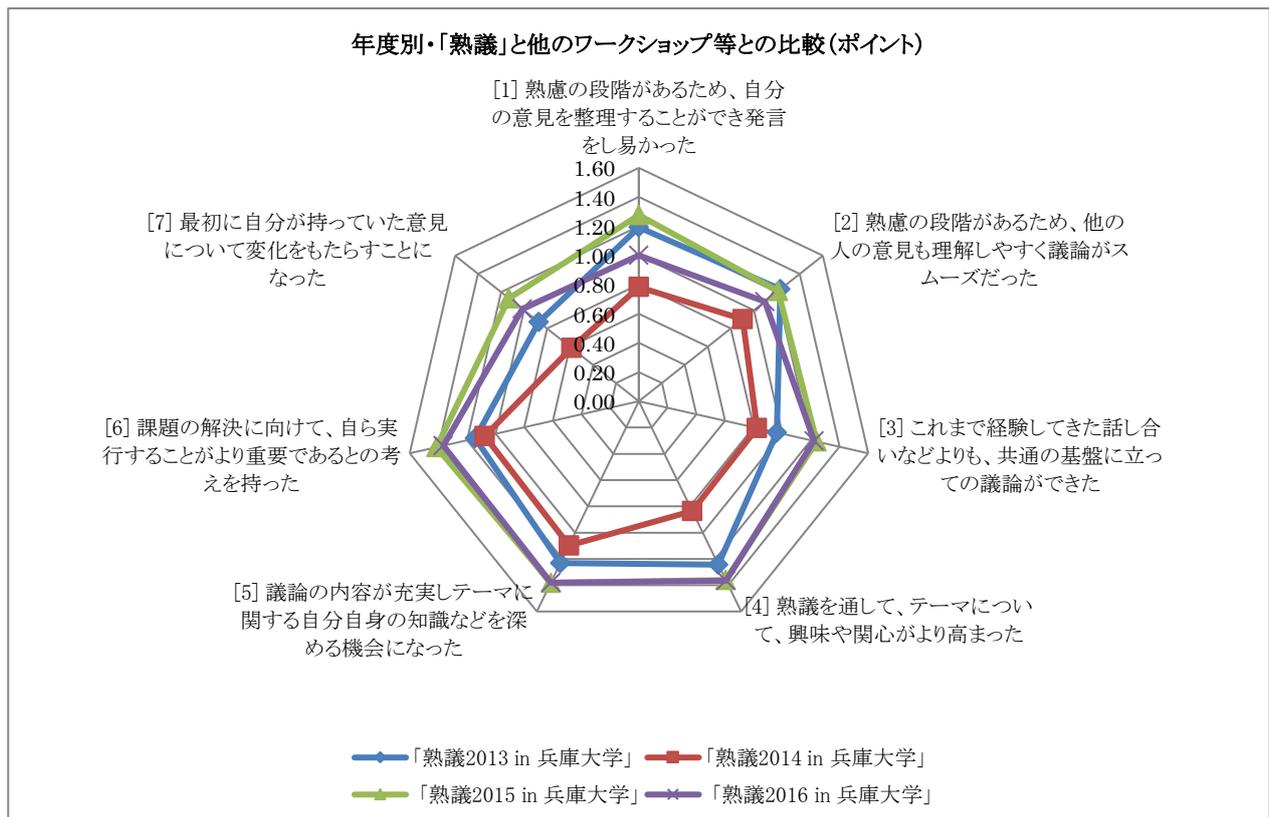


図 4-3-11 年度別・「熟議」と他のワークショップ等との比較（ポイント）

ポイントの年度別の違いについてみると、「熟議 2014 in 兵庫大学」についてはいずれの項目でも低くなっているが、これは満足度が必ずしも高くなかった年度の熟議であり、それが熟議における個々の項目の評価に影響をしたと思われる。

次に、熟慮の段階で比較をすると、「[1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった」、「[2] 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」については、「熟議 2013 in 兵庫大学」でそれぞれ 1.19、1.23、「熟議 2014 in 兵庫大学」で 0.78、0.90、「熟議 2015 in 兵庫大学」で 1.28、1.21、「熟議 2016 in 兵庫大学」で 1.02、1.11 であり、今回の評価は、前年度と比べて低くなっている。熟慮の段階を議論の活性化に「繋げる」工夫が必要、と考えられる。議論の段階では、「熟議 2016 in 兵庫大学」における結果は、いずれも昨年度と並び高いポイントを

示しており、議論に対する熟議の評価は高い。議論の重要性が認識される反面、議論に至る過程、すなわち議論を実りあるものとする事前の知識の整理で、参加者への配慮も必要ではなかったか。

(3) 熟議は現実に役立つか

熟議の目的に、主権者教育を通して、若年者に民主主義の意義の理解があることは先述した。政策の決定過程において、市民が平等な立場で議論をすることで、行政や政策にどのような影響を与えるのか、あるいはその可能性があるのかを明らかにする必要がある。地方自治では二元代表性により、政策を選択するための首長選挙と多様な意見を政策に反映する議会議員選挙がある。熟議は、特に多様な意見を掲げるだけでなく、政策を選択する機会ともある。

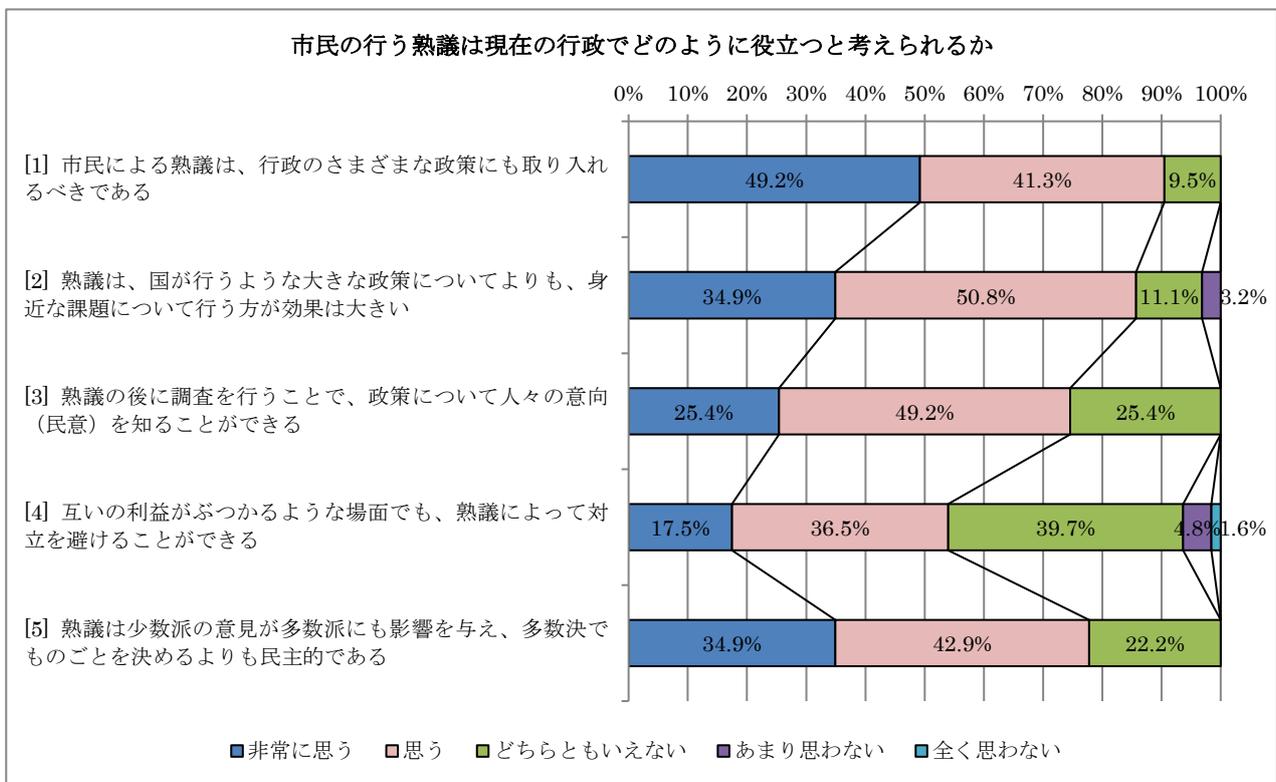


図 4-3-12 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

そこで、「事後アンケート」で、熟議の経験を踏まえ、現在の行政での活用を含め、下記項目への賛否に関する質問を行った。

- [1] 市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである
- [2] 熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい
- [3] 熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる
- [4] 互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる
- [5] 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である

項目間を比較して、「非常に思う」との回答が最も多いのは、「[1] 市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」で 49.2%である。また「思う」も 41.3%を占めている。熟議を広く行政に取り入れるべき、との声は強い。過去を見てもこの項目への賛意が最も強く、昨年度の「熟議 2015 in 兵庫大学」では「非常に思う」「思う」の合計は 96.1%で、さらにその前年 2014 年で 82.6%、2013 年で 85.9%を占めていた。次いで、「[2] 熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」で「非常に思う」が 34.9%、「思う」が 50.8%である。また昨年度の結果でも、高い賛同があり、「非常に思う」「思う」がそれぞれ 45.5%であった。実際に熟議の場面では、身近な課題についての議論を行い、その経験を踏まえているためか、行政でも身近な地方行政で熟議は重視すべきと考えられている。

「[3] 熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる」という質問は、討議型世論調査と呼ばれる手法であり、日本でも原発を含めてのエネルギー供給のシナリオを選択肢の決定に際し判断の材料の一つとしようとした事例もある¹。法律に基づき、また条例等の根拠により実施されるレファレンダムと異なり、まだ討議型世論調査の実施とその政策への反映について、制度化されているわけではないが、イギリスの EU 離脱（Brexit）でも見られたように、時に扇動などにより、市民がじっくり考えることなく投票が行われ、政策が決定されるよりも、熟慮の上での議論、その結論を踏まえての調査の方がより真の市民の意見に近いのではないかと考えられている。これについて「非常に思う」が 25.4%、「思う」が 49.2%、「どちらともいえない」が 25.4%であり、必ずしも期待が大きいわけではない。熟議の使用については、地方行政への取入れに対する期待は大きいですが、その結果を政策の選択結果とすることには課題を感じている。つまり、熟議は市民の持つ多様な意見の表出の機会と捉えられている。

こうした熟議の特徴の捉え方は、次の項目、「[4] 互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」については、「非常に思う」が 17.5%、「思う」が 36.5%に対し、「どちらともいえない」が 39.7%、「あまり思わない」が 4.8%、「全く思わない」が 1.6%を占めている。熟議で対立が生じない、ということではないが、対立を避ける選択をするよりも、議論を深めることの重要性を感じている回答者も多い。そして「[5] 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」には、「非常に思う」が 34.9%、「思う」が 42.9%であり、熟議を多数決などでの選択をする一環となる手法とは考えていない。

【表 4-3-4】に所属別での結果を示す。

¹ エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査 実行委員会『エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査 調査報告書』2012年8月27日。

(上段：件数、下段：比率)

		非常に思う	思う	どちらとも いえない	あまり思わ ない	全く思わな い	計
[1] 市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである	高校生	18 41.9%	19 44.2%	6 14.0%	0 0.0%	0 0.0%	43 100.0%
	社会人	9 69.2%	4 30.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
	大学生等	4 57.1%	3 42.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%
[2] 熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい	高校生	16 37.2%	21 48.8%	5 11.6%	1 2.3%	0 0.0%	43 100.0%
	社会人	4 30.8%	9 69.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
	大学生等	2 28.6%	2 28.6%	2 28.6%	1 14.3%	0 0.0%	7 100.0%
[3] 熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる	高校生	10 23.3%	20 46.5%	13 30.2%	0 0.0%	0 0.0%	43 100.0%
	社会人	4 30.8%	6 46.2%	3 23.1%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
	大学生等	2 28.6%	5 71.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%
[4] 互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる	高校生	6 14.0%	13 30.2%	20 46.5%	3 7.0%	1 2.3%	43 100.0%
	社会人	3 23.1%	6 46.2%	4 30.8%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
	大学生等	2 28.6%	4 57.1%	1 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%
[5] 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である	高校生	16 37.2%	18 41.9%	9 20.9%	0 0.0%	0 0.0%	43 100.0%
	社会人	2 15.4%	6 46.2%	5 38.5%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
	大学生等	4 57.1%	3 42.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%

表 4-3-4 所属別・市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つと考えられるか

「[1] 市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」については、「非常に思う」が社会人で 69.2%に対し、高校生では 41.9%、大学生はその中間の 57.1%を占める。社会人では選挙での政策に関する決定という経験をしており、こうした経験から投票による代表制民主主義を補完し市民の意見を政策に反映する熟議の可能性を感じているのではないかと考えられる。ただし、昨年度の「熟議 2015 in 兵庫大学」でのこの項目は「非常に思う」について、高校生・大学生で 57.4%、社会人で 40.0%となっており、むしろ若年者に熟議への強い期待があると考えられていた。しかし、今回の結果では、高校生では「どちらともいえない」が 14.0%を占めており、社会人よりも熟議の行政への応用については懐疑的である。「[2] 熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」は高校生では「非常に思う」が 37.2%を占めており、社会人の 30.8%を上回っている。「[3]

熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる」という、政策選択に際し民意を計測する手段としての熟議について、高校生では「非常に思う」が23.3%、社会人では30.8%と社会人の方が民意の計測について可能性を感じている。この結果を、高校生は（社会人と比べ）熟議を選択のための民意の把握とは位置付けていない、と考えてみよう。高校生など若年者は議論の過程への関心が強いことが、昨年度までの結果から把握されている。つまり、議論の末に明らかになる選択肢よりも議論の広がり期待しているのではない。

では、議論に関わる項目についてはどうか。「[4] 互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」について、「非常に思う」は高校生で14.0%、社会人で23.1%、「思う」はそれぞれ30.2%、46.2%、さらに「どちらともいえない」は46.5%、30.8%である。高校生はこの項目については賛成をしていない。先述のように、この項目について、賛意を示していないのは、対立を避ける選択より議論を深めることが重要とする回答者であり、高校生はそうした議論を広げることをより重視している。「[5] 熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」について、高校生は「非常に思う」が37.2%、社会人は15.4%となる。多数決のような選択をするよりも議論の過程を重視し、多様な民意を集めることに高校生は熟議の意義を感じている。

4. 加古川地域を大地震が襲ったら

(1) 発災時とその後に生じる事象への関心事

熟議プロジェクトチームでは、熟議での課題、今、加古川地域を大地震が襲ったら、を踏まえ、参加者の大地震とその被害、またはそれに備え、発災以後に生き延びるためにどうするのか、といった危機感の把握が不可欠との考えに至った。防災心理学での考察では、例えばビル火災の際など、大勢が逃げる方向に逃げた結果、多数が犠牲になるケースなど行動が大多数の人に流されてしまう心理が働く多数派同調バイアスや、津波の危険性を知り、大地震後危機が迫っていても大丈夫と言い聞かせてその様子を見に出かけてしまう正常性バイアスなどが働き、具体的な備えを怠ったり、避難が遅れたりするという。こうしたバイアスを避けるためにも具体的な危機を踏まえた訓練、情報の速やかなる発信が必要であるが、実際には課題も多い²。

熟議では身近な課題、つまり具体的な災害をイメージしつつ、いかに被害を現象させることができるか、そのための取り組みは何かを議論する。災害の各場面、すなわち発災時を踏まえ、住宅の倒壊、避難、復旧から日常生活を取り戻す復興までで予測される事態の関心事が、一連の熟議を経てどのように変化をするのかを検証する。熟議前の「事前アンケート」と議論終了後の「事後アンケート」には、共通する設問である、「今、加古川地域を大地震が襲った、と想定とした場合、次の事柄についてあなた

² 昭和56年10月31日の夜9時3分、神奈川県平塚市では誤って、東海沖地震に対する警戒宣言が防災スピーカーから市内全域に発せられたが、直接聞きながらもその情報を信用した人は17.5%にすぎなかったという。（東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班『誤報「警戒宣言」と平塚市民』1982.8）

の関心の強さを5段階で表してください」を載せている。事前、事後ともに5段階での評価であり、この数字（ポイント）が大きいくほど関心度が高い、あるいは重要度が高いとする。

事前、事後、それぞれ、関心事の項目ごとに平均値を求めた結果を示す。なお計算は、事前アンケートで56人、事後アンケートで63人を対象としている。

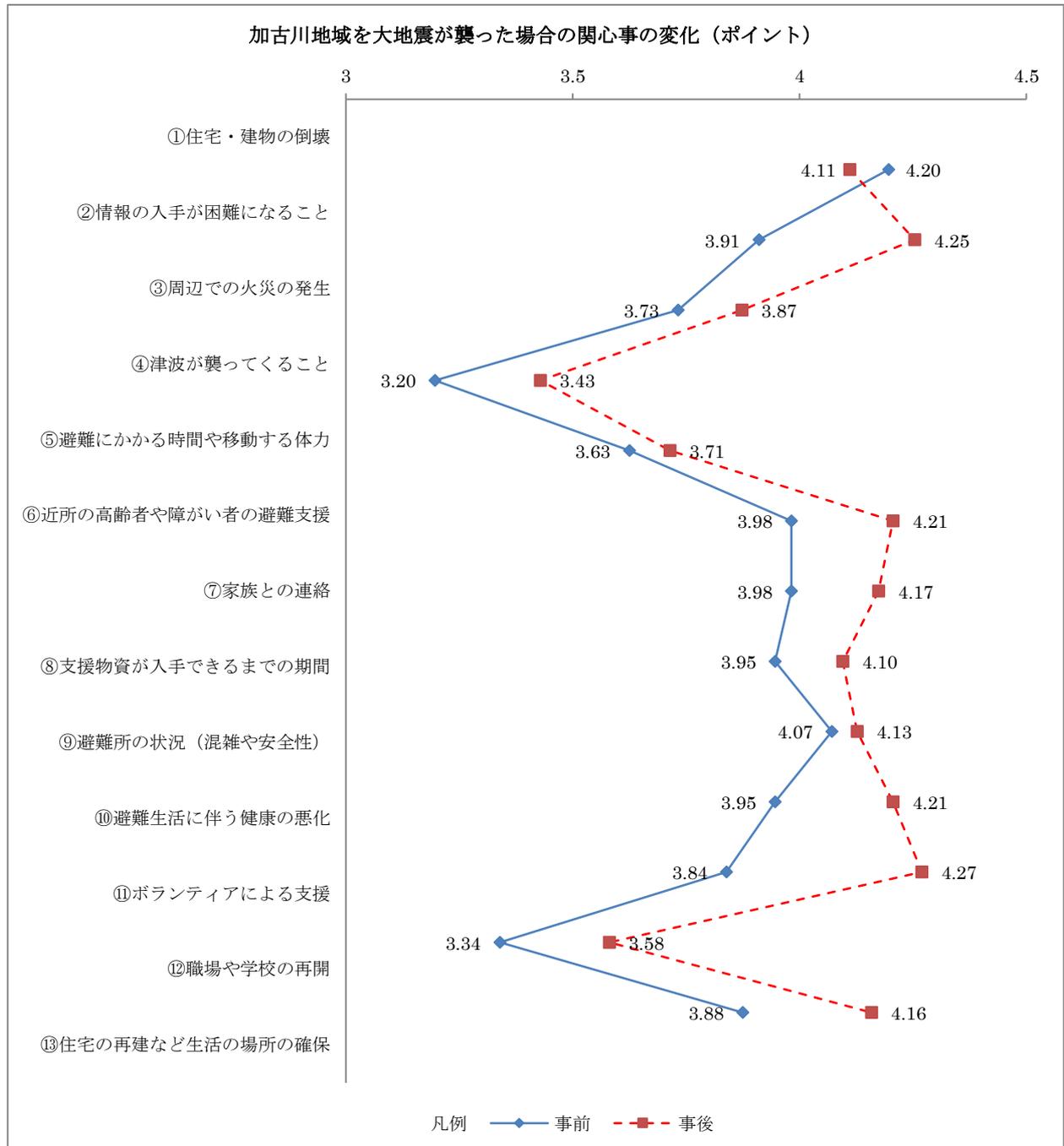


図 4-4-1 加古川地域を大地震が襲った場合の関心事の変化（ポイント）

取り上げた関心事の項目は次の通りである。発災からの時間軸順に示しておく。

発災直後に生じる事	①住宅・建物の倒壊
発災から数時間以内で生じる事	②情報の入手が困難になること ③周辺での火災の発生 ④津波が襲ってくること ⑤避難にかかる時間や移動する体力 ⑥近所の高齢者や障がい者の避難支援
発災から3日以内で生じる事	⑦家族との連絡 ⑧支援物資が入手できるまでの期間 ⑨避難所の状況（混雑や安全性）
発災から1週間以内で生じる事	⑩避難生活に伴う健康の悪化 ⑪ボランティアによる支援
発災から1か月以内で生じる事	⑫職場や学校の再開
それ以降で生じる事	⑬住宅の再建など生活の場所の確保

平均ポイントについて図 4-4-1 をみると、全体では、①住宅・建物の倒壊を除いて、いずれも事後の方が、右側へシフト、つまりポイントが増加し、関心の度合いが高まっている。一連の熟議を終えて、発災からの全てのプロセスにおいて、様々なことに関心が高まっている。熟議が従前の討議型世論調査で活用されるような政策の選択の一助とすること、あるいは多様な民意を集めるという、二代表制の地方議会を補完する役割を果たす、との側面以外にも、市民意識への啓発などの効果があることをしめている。熟慮し、議論をすることで市民の行動にも変化をもたらすことが期待される。

以下、個々の項目について検討をする。参考のために、【表 4-4-1】に事前と事後についての、属性別での平均ポイントを示しておく。

「①住宅・建物の倒壊」は、発災直後に生じると考えられ、事前の住宅改修等が必要となる内容である。これについては、事前で平均ポイントが 4.20、事後で 4.11 となっている。事前では 13 項目の中で最も関心事として高かった内容である。全体での回答の傾向を見ると、関心度が最も高い 5 という回答が 42.9%、4 が 37.5% であり合計で 8 割を占める。地震による住宅の損壊には大きな関心を持っている。属性別の平均ポイントからも、性別、所属を問わず関心が高い。ただ、前後での比較では、平均ポイントが低下しており関心事としては薄れている。なお平均ポイントの低下はいずれの属性でも見て取れる。

「②情報の入手が困難になること」は、事前のポイントが 3.91、事後で 4.25 と大きくポイントが上昇する。どこへ避難をするべきか、なども含め必要で正確な情報が発災後に入手困難になることは、なかなか想像しづらい点もあり、熟慮の段階での講演や議論で気づかされた可能性がある。【表 4-4-1】からは、男性と社会人で事後、事前よりもポイントが大きく上昇している。

「③周辺での火災の発生」は、事前では3.73、事後では3.87である。関心事としては、「①住宅・建物の倒壊」よりも低く、大地震に伴う火災について関心が結びついていない。

		性別		所属別		
		男性	女性	高校生	社会人	大学生等
回答件数	事前	N=31	N=25	N=40	N=9	N=7
	事後	N=34	N=29	N=43	N=13	N=7
① 住宅・建物の倒壊	事前	4.13	4.28	4.13	4.33	4.43
	事後	4.09	4.14	4.12	4.00	4.29
② 情報の入手が困難になること	事前	3.77	4.08	3.95	3.78	3.86
	事後	4.35	4.14	4.30	4.46	3.57
③ 周辺での火災の発生	事前	3.65	3.84	3.68	4.11	3.57
	事後	3.82	3.93	3.81	4.08	3.86
④ 津波が襲ってくること	事前	2.94	3.52	3.50	1.78	3.29
	事後	3.00	3.93	3.72	2.31	3.71
⑤ 避難にかかる時間や移動する体力	事前	3.55	3.72	3.55	4.00	3.57
	事後	3.65	3.79	3.70	3.85	3.57
⑥ 近所の高齢者や障がい者の避難支援	事前	4.00	3.96	3.88	4.56	3.86
	事後	4.15	4.28	4.14	4.54	4.00
⑦ 家族との連絡	事前	3.61	4.44	3.98	3.67	4.43
	事後	3.88	4.52	4.14	4.38	4.00
⑧ 支援物資が入手できるまでの期間	事前	3.74	4.20	3.95	3.67	4.29
	事後	4.12	4.07	4.19	3.85	4.00
⑨ 避難所の状況（混雑や安全性	事前	3.97	4.20	3.98	4.44	4.14
	事後	4.06	4.21	4.26	3.77	4.00
⑩ 避難生活に伴う健康の悪化	事前	3.90	4.00	3.85	4.33	4.00
	事後	4.21	4.21	4.19	4.08	4.57
⑪ ボランティアによる支援	事前	3.84	3.84	3.88	3.78	3.71
	事後	4.24	4.31	4.37	3.92	4.29
⑫ 職場や学校の再開	事前	3.26	3.44	3.23	3.44	3.86
	事後	3.65	3.50	3.43	4.00	3.71
⑬ 住宅の再建など生活の場所の確保	事前	3.61	4.20	3.73	4.11	4.43
	事後	4.15	4.17	4.19	4.15	4.00

表 4-4-1 性別・属性別の加古川地域を大地震が襲った場合の関心事の変化（ポイント）

「④津波が襲ってくること」については、火災よりもさらに低く、事前で3.20、事後で3.43である。加古川地域は、南海トラフに起因する大規模な地震があった場合でも、発生した津波が四国や淡路島といった自然の「要害」に阻まれ、大きな被害をもたらさないと考えていることがある。ここで、火災と津波についての回答を【表 4-4-2】に示すが、これを詳細にみると興味深いことがわかる。

「③周辺での火災の発生」については、事前では4と3に回答が多くそれぞれ33.9%、35.7%を占めているが、最も関心が高いとする5については23.2%に留まる。事後では5と4で比率が上昇して、平均ポイントを上げた。「④津波が襲ってくること」については、関心度が高い5は、事前で25.0%、事後で28.6%と最も多くの比率を占めている。その一方で、事前では関心度が低い1で

14.3%、2で19.6%と比較的高い。事後もそれぞれ7.9%、19.0%である。つまり、津波については関心が高い層と低い層とが二分されている。

		事前		事後	
		件数	比率	件数	比率
③ 周辺での火災の発生	5(高い)	13	23.2%	18	28.6%
	4	19	33.9%	24	38.1%
	3	20	35.7%	17	27.0%
	2	4	7.1%	3	4.8%
	1(低い)	0	0.0%	1	1.6%
	計	56	100.0%	63	100.0%
④ 津波が襲ってくること	5(高い)	14	25.0%	18	28.6%
	4	10	17.9%	13	20.6%
	3	13	23.2%	15	23.8%
	2	11	19.6%	12	19.0%
	1(低い)	8	14.3%	5	7.9%
	計	56	100.0%	63	100.0%

表 4-4-2 ③周辺での火災の発生④津波が襲ってくることの事前・事後での構成比率

「⑤避難にかかる時間や移動する体力」は事前の平均ポイントで3.63、事後では3.71とやや増加している。事前と事後の回答の構成比率をみると、事前では4という回答が50.0%を占めているが、事後では5が17.9%から22.2%に増加、3も16.1%から30.2%に増加している。事前では回答者が重要度の判定が難しいと感じていたが、事後にはそれぞれの判断を行ったと考えられる。

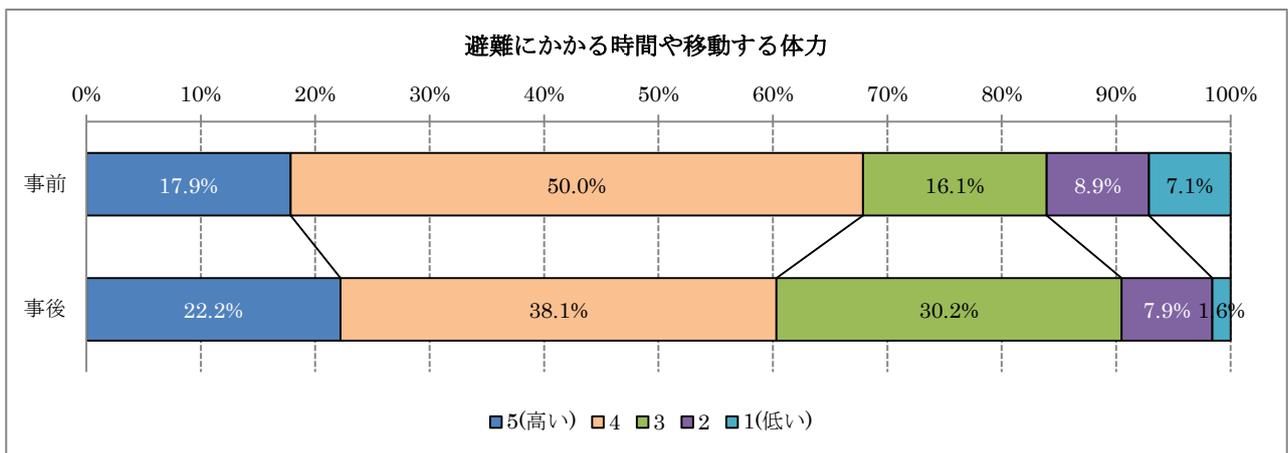


図 4-4-2 避難に係る時間や移動する体力についての回答（事前・事後）

「⑥近所の高齢者や障がい者の避難支援」は事前では3.98と比較的高いが、事後ではさらに4.21へと増加する。【図 4-4-3】に所属別で回答の構成比率を示す。

社会人では、事前の結果で関心度では5が過半を占めるなど関心が高いのであるが、事前、事後を比較すると、特に高校生で5の比率は30.0%から41.9%へ増加している。熟議の後に重要性を認識し

ていることになる。地域の若年者に過大な負担を押し付けることはできないが、緊急時に体力的に余裕を持っている場合、自身の避難とともに、安全が確認されている上であれば、いわゆる災害弱者の避難に手を貸すことも求められる。そうした認識を持つようになったとなれば、熟議が災害時における個々の認識を改める契機となった可能性がある。

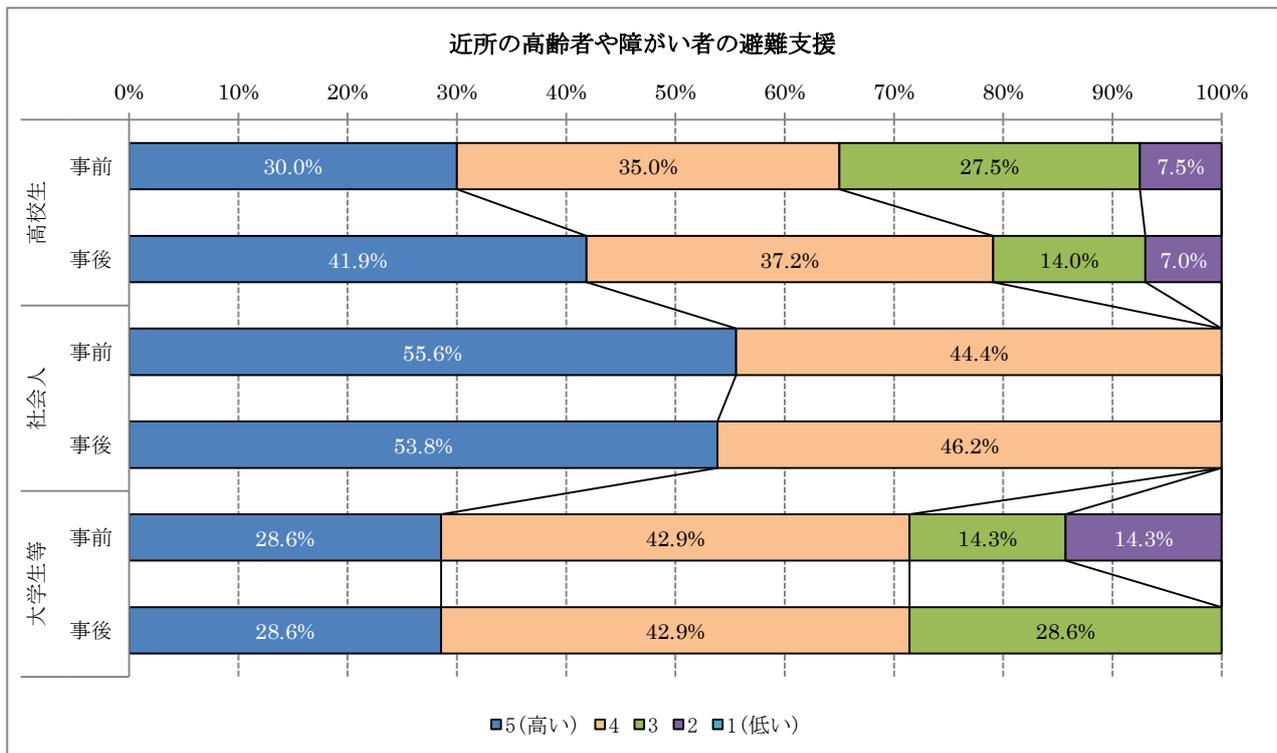


図 4-4-3 所属別・近所の高齢者や障がい者の避難支援についての回答（事前・事後）

「⑦家族との連絡」では、事前で 3.98、事後で 4.17 である。所属での差が大きく、所属別に事前、事後で平均ポイントを示す。高校生では、事前（N=40）で 3.98、事後（N=43）で 4.14、社会人では、事前（N=9）で 3.67、事後（N=13）で 4.38、大学生では、事前（N=7）で 4.43、事後（N=7）で 4.00 となっている。つまり、事前には社会人は家族との連絡はあまり重視されていなかったが、高校生、大学生では事前において、比較的高い平均ポイントの値を示す。社会人は事前には家族より災害弱者を、高校生は家族を重視していたが、それらの意見が変化している様子がわかる。

さらに、平均ポイントで大きな差が見られるのが性別での違いである。男性の事前では（N=31）で 3.61、事後では（N=34）で 3.88、女性の事前では（N=25）で 4.44、事後では（N=29）で 4.52 である。女性は家族への連絡を相当に重要視しているのである。

「⑧支援物資が入手できるまでの期間」までは自らの備蓄品などでサバイバルをしなければならない。それらは平常時で想像が及びにくく、しかし平常時の準備が欠かせない。ポイントは事前で 3.95、事後で 4.10 と、事後で上がっており、一連の熟議を通し重視されるようになってきている。特に、

男女別では、男性で平均ポイントが 3.74 から 4.12 へと増加しており、熟議後に男性で関心が高くなっていることがわかる。女性の場合、事前にもこの項目には高い関心があったが、熟議を経て男性も生活に根差す避難の行方が理解されるようになってきている。

「⑨避難所の状況（混雑や安全性）」は事前でも平均ポイントは 4.07 であり、高い数値を示す。大規模災害と避難所との関係を考える人が多い。メディアなどで取り上げられる機会が多いためではないか。そして事後の平均ポイントは 4.13 へと上昇をしている。

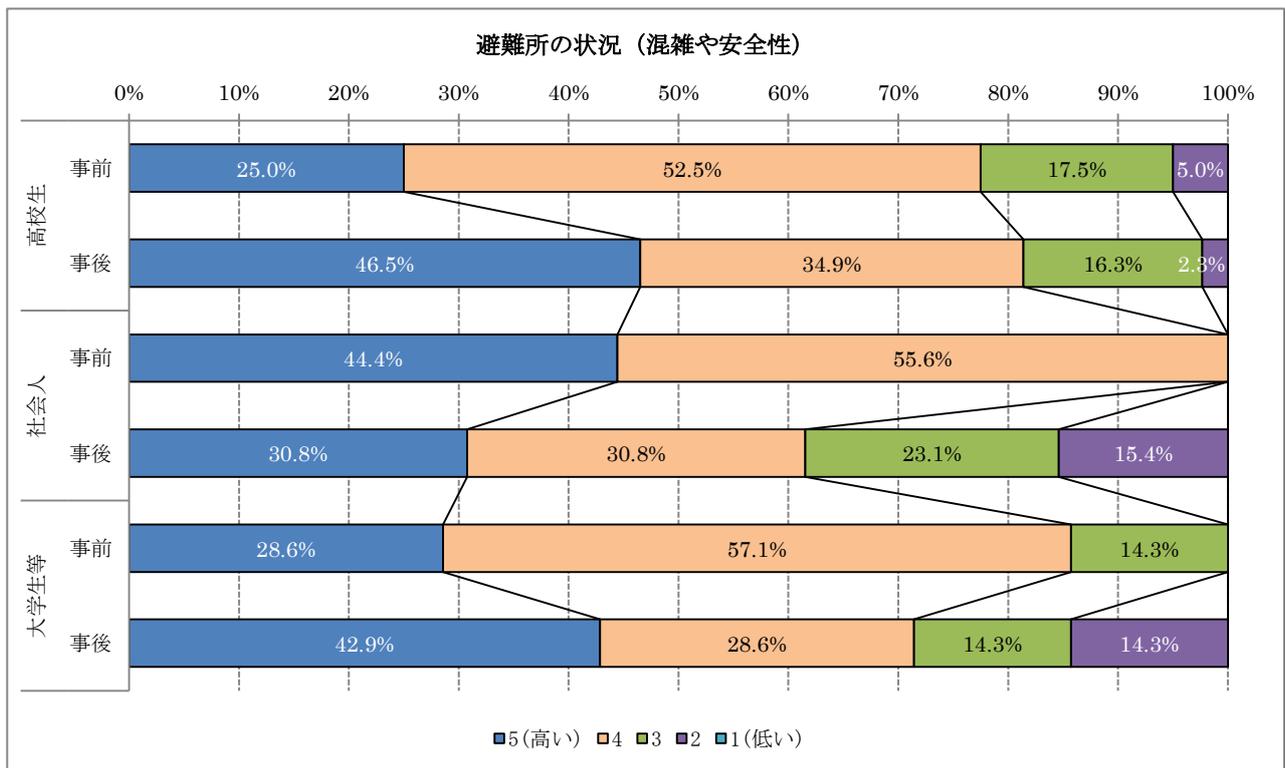


図 4-4-4 所属別・避難所の状況（混雑や安全性）についての回答（事前・事後）

所属別で熟議の事前と事後で回答状況を比較すると、高校生の場合 5 は 25.0%から 46.5%に増加、大学生も同様に 28.6%から 42.9%となっている。社会人では 5 を回答した割合は 44.4%から 30.8%へ低下している。つまり、若年者と社会人とでは、事前、事後で課題として重視するかどうかその傾向が異なっている。

「⑩避難生活に伴う健康の悪化」は事前で 3.95、事後で 4.21 となっている。各地での災害の現場では、避難所でいわゆるエコノミー症候群により体調を悪化させる被災者が出ていることなどが知られており関心も高い。ところで、避難所での事項については、いずれも共通する男女での違いがあった。すなわち【図 4-4-5】に示すように、女性では、事前より、避難所のことに関心を持ち、熟議の事後で若干上昇する傾向にあるが、男性の場合、事前には避難所の重要性にさほど気が付かず、熟議の終了後に関心の度合いが高まっている。避難所という生活空間を考える事ができるかどうか、の差ではないか。

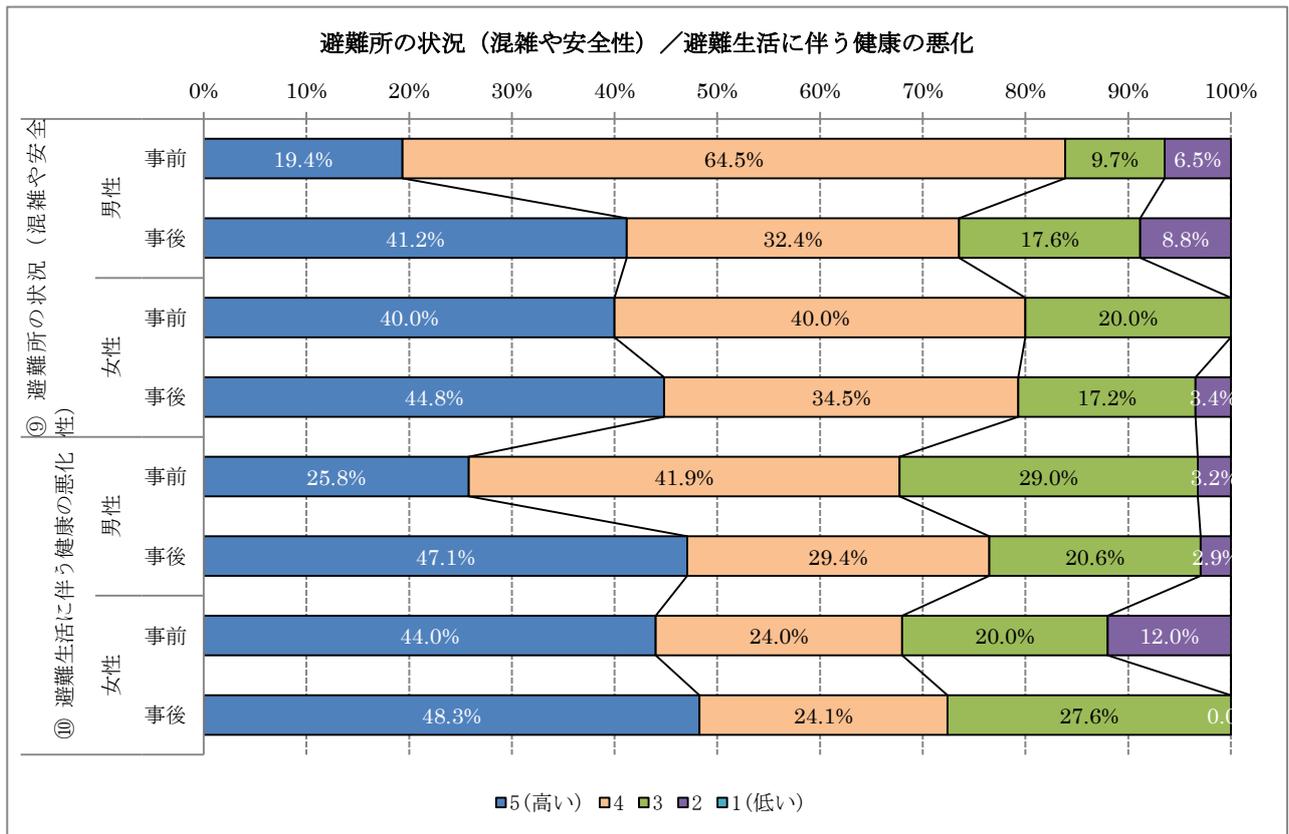


図 4-4-5 性別・避難所に関わる項目についての回答（事前・事後）

「⑩ボランティアによる支援」は、事前が 3.84 に対し、事後では 4.27 へと平均ポイントが大幅に増加する。熟慮の一環として行った宮本講師によるボランティアの役割を中心とした講義もあり、関心が高まったと思われる。特に高校生では、事前の平均ポイントが 3.88 であったが、事後には 4.37 へと増加しており、災害支援ボランティアへの関心が高まっている。ボランティアを実施するだけでなく、受け入れることの重要性も、加古川地域を大地震が襲った際に、若年者も考えることになるだろう。

「⑪職場や学校の再開」は事前で 3.34、事後で 3.58 と低いポイントに留まる。社会人では、事前調査によると（N=9）、関心度で 3 が 66.7%を占めたが、事後（N=13）になると、4 が 53.8%を占めるなど関心が高まり、平均ポイントも事前の 3.44 から事後に 4.00 となる。しかし、高校生、大学生等では事後も平均ポイントはあまり変化が無い。

「⑫住宅の再建など生活の場所の確保」は事前で 3.88、事後では 4.16 となっている。事後で上昇をしている。これについて、性別での構成を示す。興味深いのは、男女で異なる点である。最も関心度が高い項目である 5 に注目をするると男性の場合、事前では 19.4%、事後では 41.2%と増加しているが、女性の場合は 52.0%から 31.0%に減少をしているのである。女性の場合、3 の割合は 24.0%から 13.8%へ、また 2 は 4.0%から 0.0%となり、関心度では比較的高い 4 が過半を占め、女性の平均ポイントについてはほとんど変わらない。

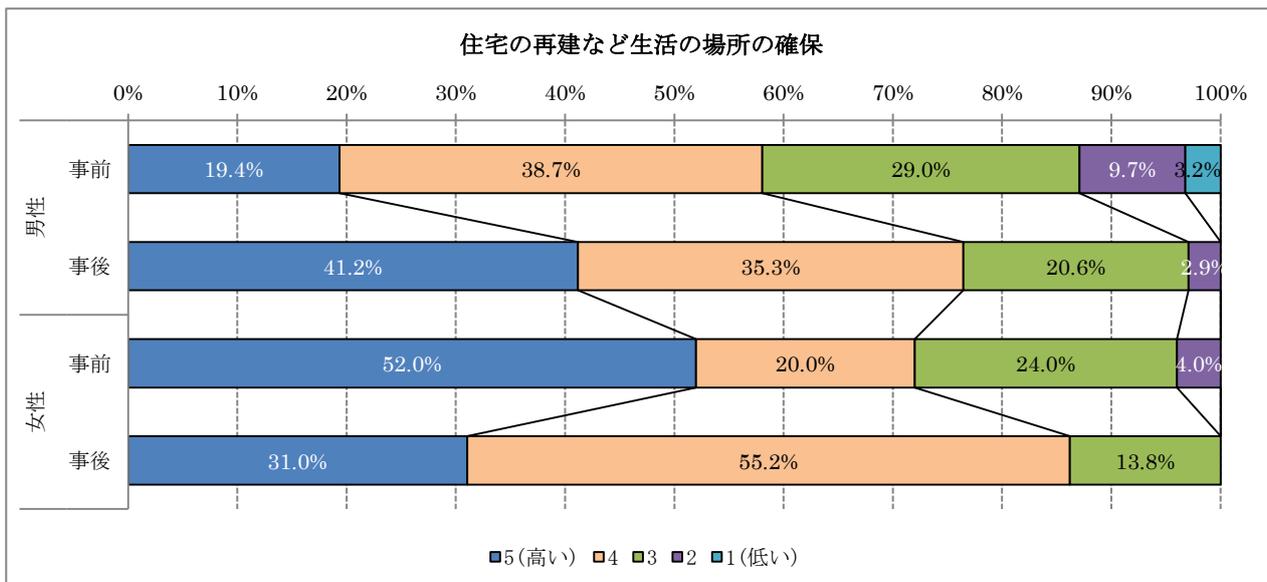


図 4-4-6 性別・住宅の再建など生活の場所の確保についての回答（事前・事後）

(2) 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方とその変化

兵庫大学熟議方式では、討議の前後での世論の比較を重視する討議型世論調査の手法の参考に、テーマについて、同じ問いを「事前アンケート」と「事後アンケート」において行う。これにより「熟議 2016 in 兵庫大学」を通して、意見がどのように変化をしたのか、を追跡することも可能になる。

質問は、加古川地域を大地震が襲った場合を想定し、下記の考え方についての賛否を問うものである。なお、対象は、「事前アンケート」と「事後アンケート」の双方に回答のあった 54 件である。

- [1] 地震に備える防災倉庫建設のため公園を縮小するなど防災のためなら住民に不便があっても仕方がない。
- [2] 科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる。
- [3] 防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。
- [4] 被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい。
- [5] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる。
- [6] 高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ安全を確保することが重要である。
- [7] 避難所では、全くの他人の助けよりも、近くの住民だけで集まって助け合うことの方が安心である。
- [8] 被災した人は学校や職場に通うよりもボランティアとして地域の復旧に力を優先させるべきである。
- [9] 大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である。
- [10] 大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある。

【図 4-4-7】は、5 段階での回答（大いに賛成、やや賛成、普通、やや反対、大いに反対）について

て、それぞれ 2、1、0、-1、-2 の数字を当て合計し、有効回答数で除して平均ポイントを求めた結果である。なお、第 3 章では、当てる数字がそれぞれ 5、4、3、2、1 であるため、直接の比較はできない。

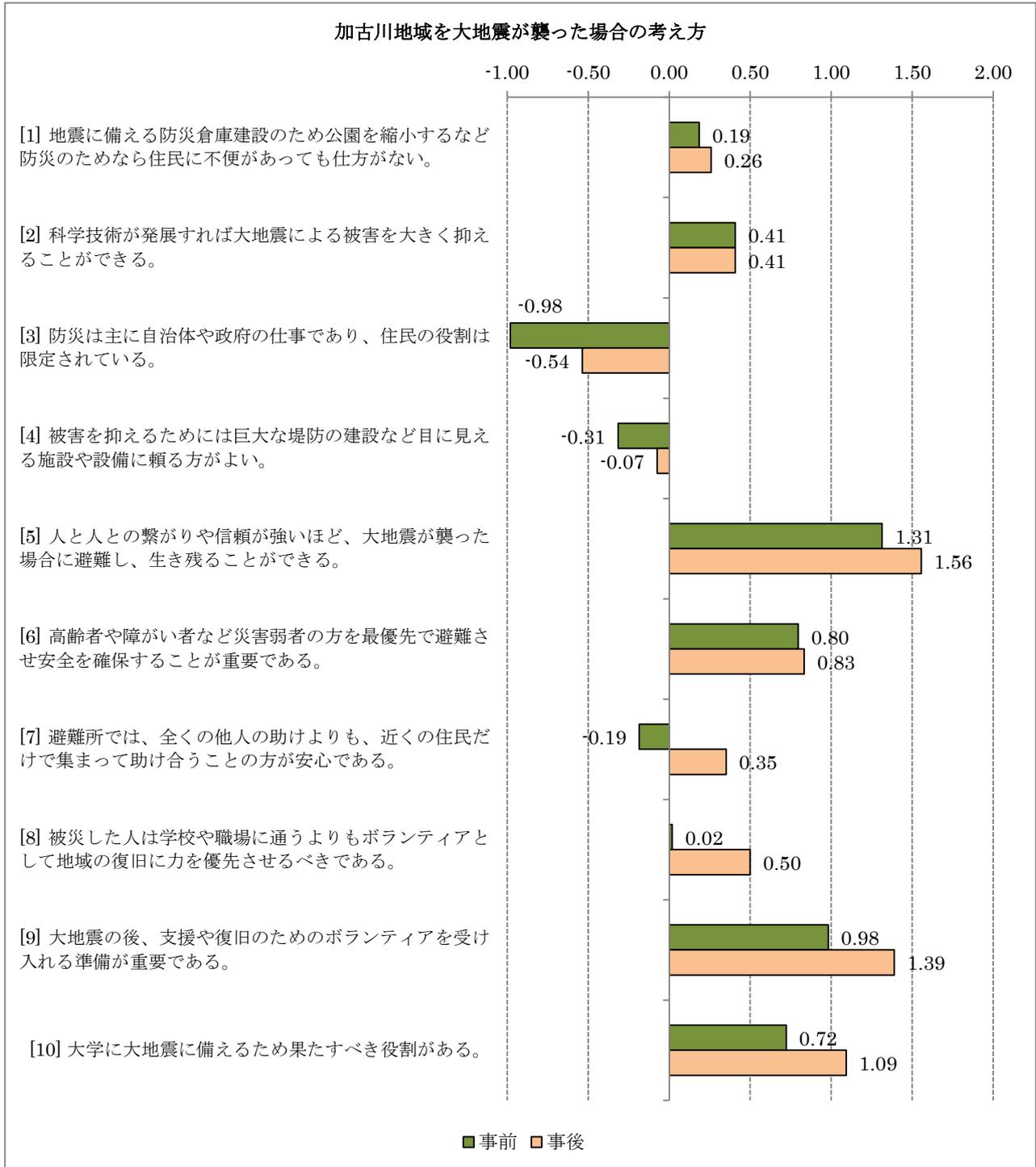


図 4-4-7 加古川地域を大地震が襲った場合の考え方 (ポイント)

項目順に考察を行う。

「[1] 地震に備える防災倉庫建設のため公園を縮小するなど防災のためなら住民に不便があっても仕方がない」という考え方であるが、これは安全という公共の福祉のためには、住民の不便はやむを得ない、との主張を踏まえている。不便というだけではなく、住民にとっての公園の使用の権利を阻害することも考えられる。つまり、究極には、安全という公共の福祉のために、個人の権利はどこまで制限できるのか、を問う質問である。

事前での平均ポイントは、0.19、事後で0.26である。つまりやや賛成という状況である。賛否についての構成は【図4-4-8】の通りである。事前では「普通」との回答が少なく、賛否が分かれていたことが判る。事後には、「普通」の割合が20.4%から33.3%に増加、「やや反対」が25.9%から20.4%になるなど、反対の割合がやや減少している。

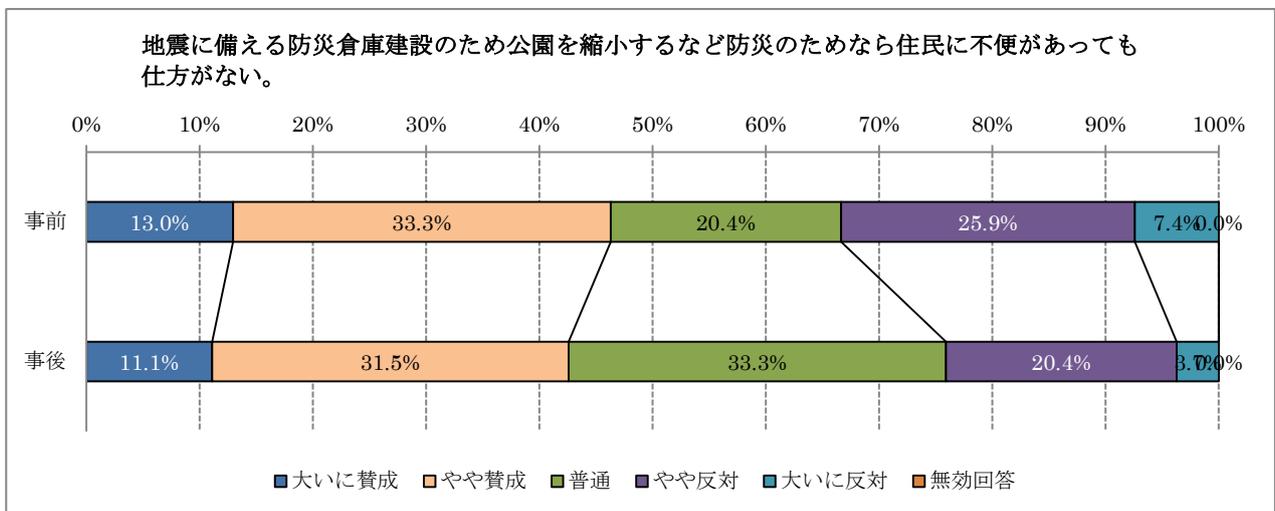


図4-4-8 防災のためなら住民に不便があっても仕方がない、の比率

実は、昨年度、「熟議2015 in 兵庫大学」でも、類する設問、「[8] 安心・安全のためであれば、住民にとって不便になることがあっても仕方がない」との設問を設けており、この場合も賛否が分かれた。市民の自由と安全の適切なバランスは解を得ることが難しい問である。昨年度の結果でも、事前では反対、つまり自由を守ることが重視されたが、事後では、賛成が逆転する結果になっている。議論を通し、災害時に備え、一部の利便性が制約される事情があることが理解された可能性がある。

「[2] 科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる」は、科学技術への期待を問うものである。地震予知から事前避難は、特に直下型地震については困難と思われるが、緊急地震速報など、生命を守るための警報やビル免震システムなど減災のための技術は日進月歩といわれる。ポイント事前、事後とも0.41である。やや賛成が多い。ただし構成を見ると「大いに賛成」は事前で16.7%、事後で20.4%であり、必ずしも多いわけではない。なお属性別に特徴は見いだせない。

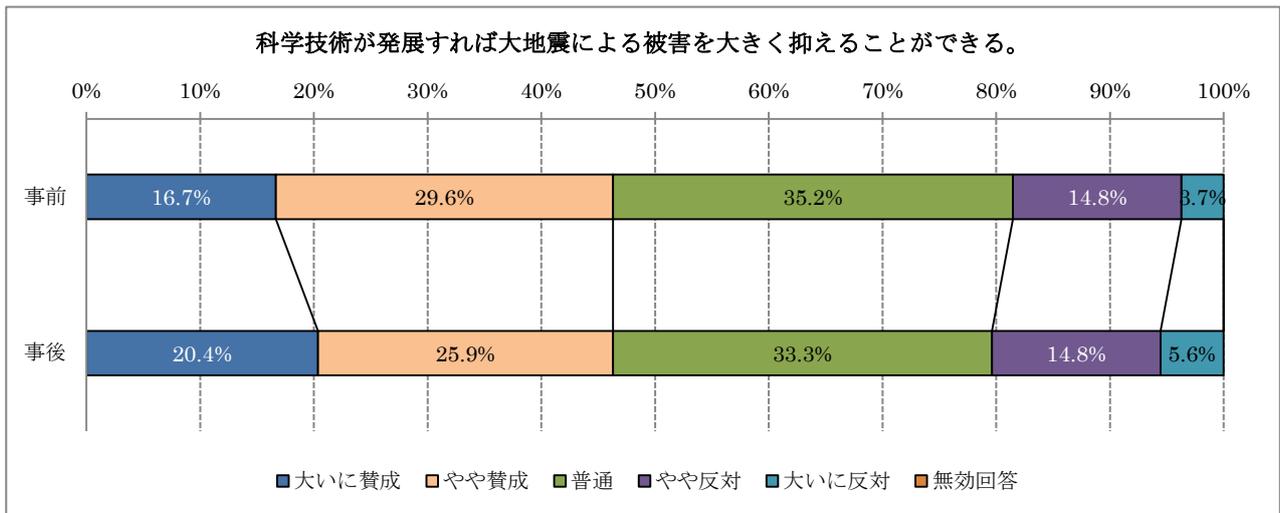


図 4-4-9 科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる、の比率

「[3] 防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」は、防災における政府と個人の役割を問うものである。平均ポイントは事前で-0.98、事後では-0.54 となる。事前では住民の役割は限定されない、との意見が強く、事後では政府の役割も見直されていることになる。【図 4-4-10】を見ると、事後において「大いに賛成」が 0.0%から 5.6%に、「やや賛成」が 5.6%から 16.7%に上昇したが、一方で「やや反対」も 40.7%から 51.9%に増加をしている。ただし「大いに反対」は 31.5%から 14.8%に減少しており、こうした結果もあって平均値のポイントが上昇したと思われる。住民の役割が限定されることへの反対が、事後でも 2/3 を占めているのである。興味深い点として、社会人 (N=9) では「大いに反対」が事前で 66.7%、事後では 55.6%と過半を占めており、社会人の方が住民の役割が大きいことを期待しているのである。

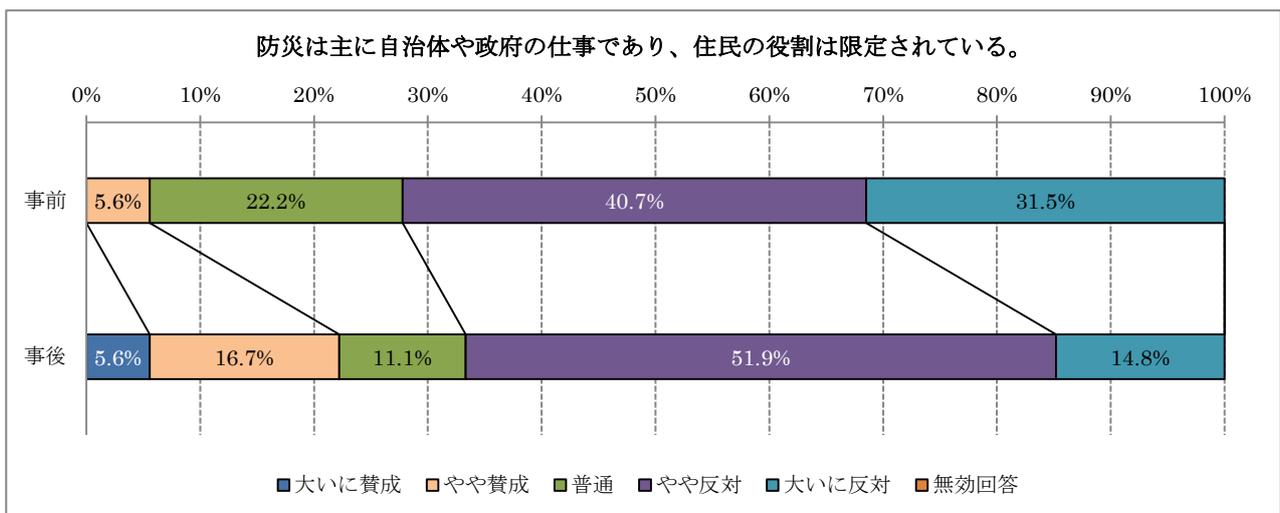


図 4-4-10 防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている、の比率

なお、昨年度の調査でも「[3] 安心・安全を創ることは、主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」を問い、住民の役割は限定されないとの考えの回答者が多かった。

「[4] 被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい」はインフラなどハードを重視するか、それともコミュニティの強化などソフト的な施策を重視するのか、を問うものである。事前では-0.31、事後では-0.07 でやや反対が多いが、ほぼ中立といえる内容である。下記から判るように、「普通」の割合が最も高く、事前、事後とも 38.9%を占めている。事後では「やや反対」の割合が減少、「大いに賛成」「賛成」が増加をしている。

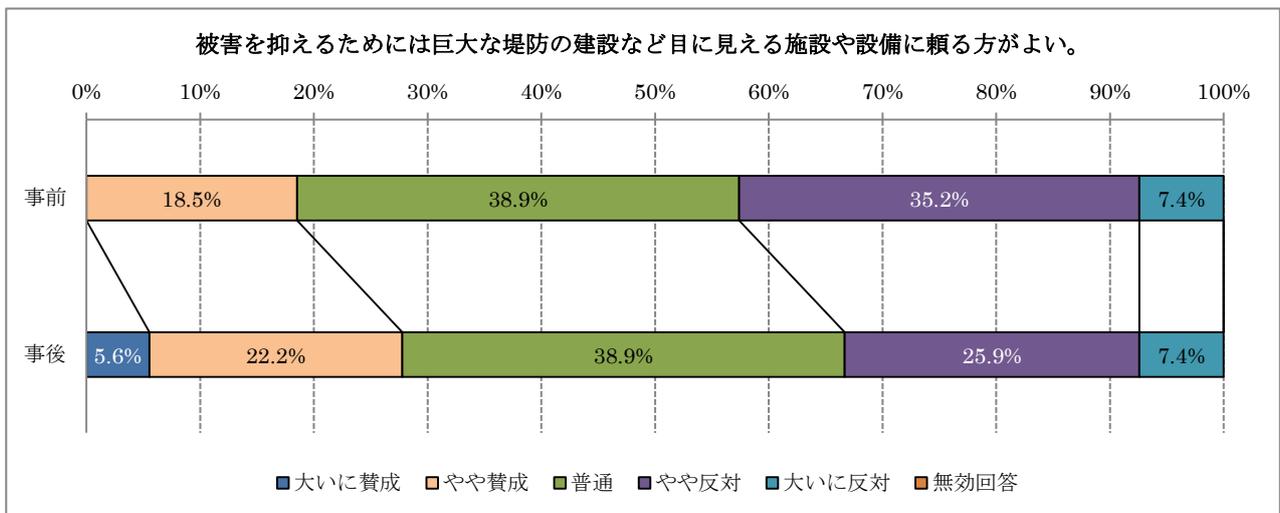


図 4-4-11 被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい、の比率

「[5] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる」は絆の重要性をどの程度評価し、認識をしているのかを計測するものである。事前で 1.31、事後で 1.56 である。他の項目と比べ、事前でも事後でも最もポイントが高く、人と人とのつながりへの期待、絆の重要性については賛成が多く、高く評価をされ、そして熟議の後では、より拡大をしている。

【図 4-4-12】での構成比率を見ると、事前では「大いに賛成」が 53.7%、「賛成」が 29.6%、事後にはそれぞれ 61.1%、33.3%となり、事後ではほぼ 9 割が賛成をしていることになる。互惠性のある絆やネットワークが安心・安全に寄与すると、参加者は認識をしており、熟議を通してその思いを強化したのである。

実は、昨年度の熟議に際してのアンケートでも「[1] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、安心・安全を創ることに役立つ」との質問には賛成が多く、同じ方法で算出した平均ポイントは事前で 1.49 とやはり、他の項目よりも高い数値を示す。そして事後はさらに 1.78 に上昇をしている。

ところで属性別では、男性と女性とで違いがあることが興味深い。女性 (N=25) では、事前において「大いに賛成」は 40.0%、「やや賛成」は 28.0%であり、「やや反対」も 12.0%であった。これが、事後には、「大いに賛成」が 64.0%、「やや賛成」が 36.0%と、賛成が大幅に拡大するのである。これ

に対して男性（N=29）では、事前で「大いに賛成」が65.5%、「やや賛成」が31.0%と大半が事前に賛成を示している。しかし、事後では「大いに賛成」が58.6%に減少、「やや賛成」は31.0%と変わらないものの、「普通」が3.4%から10.3%に増加しているのである。つまり、女性は事後で賛成が大幅に増加、男性の方は事後で賛成が減少をしているのである。

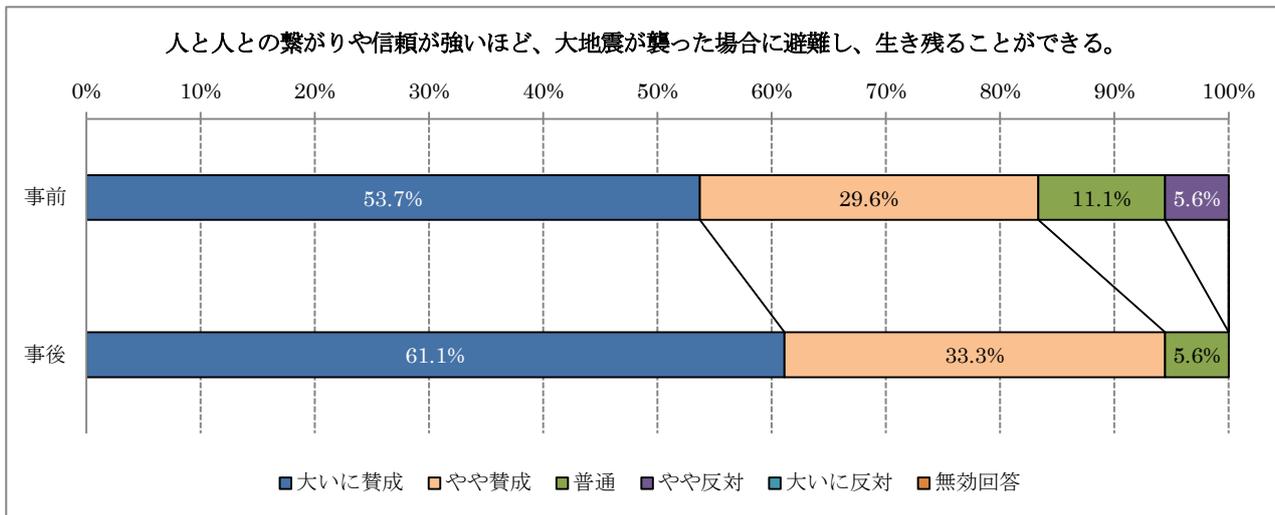


図 4-4-12 人と人の繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる、の比率

「[6] 高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ安全を確保することが重要である」では、事前では0.80、事後で0.83と賛成がやや増加している。特に高校生（N=38）に限定をすると、事前では0.58であったが、事後には0.79へと大きく増加をしている。近隣の高齢者、障がい者の避難支援への関心と同様の結果であり、直面するかもしれない課題に高校生は熟議を通して真摯に向き合ったことによる成果、ともいえる。

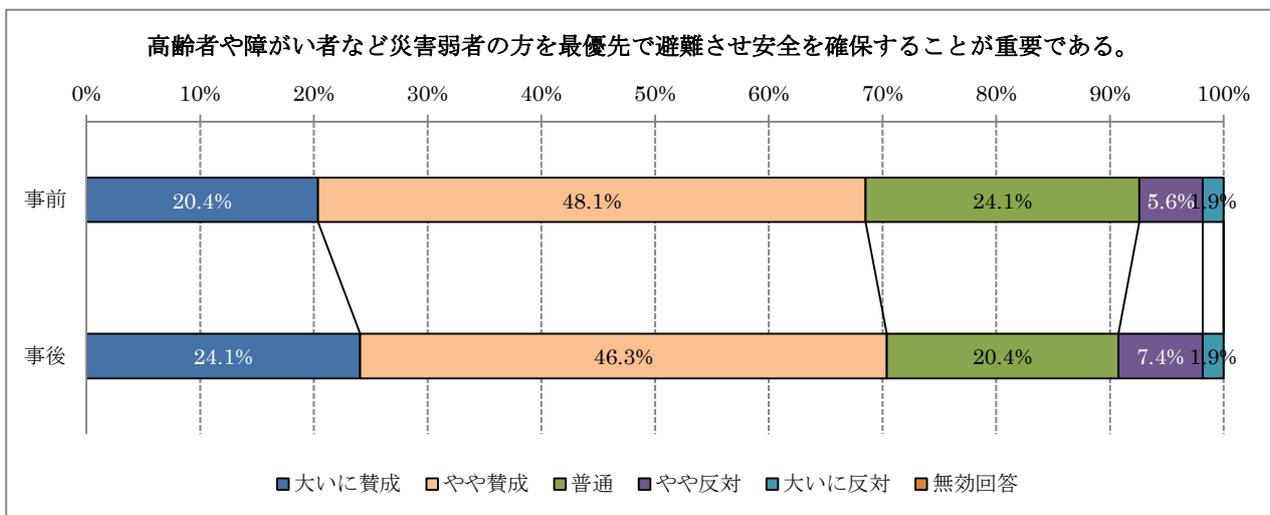


図 4-4-13 高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ安全を確保することが重要である、の比率

「[7] 避難所では、全くの他人の助けよりも、近くの住民だけで集まって助け合うことの方が安心である」という課題は、外部からのボランティアの助けをどのように受け入れるべきか、を考える課題である。ボランティアなど外からの支援に不安を感じる人が少なくない実態は、熟慮の際の宮本講師の講義からも示されている。平均ポイントは事前で-0.19と反対がやや多く、事後では0.35とむしろ賛成が多くなっている。賛成が多いことは、必ずしも他者に対し排他的になっている、ということではないだろう。次の設問でも見られるように、まず自らできることを行う、という自助の考え方があるとも考えられる。

比率を見ると、事前では「やや反対」が35.2%、「大いに反対」が9.3%であり、その合計は44.4%と半数近くを占めている。「大いに賛成」「やや賛成」の合計は事前で31.5%である。事後でも、「やや反対」が24.1%、「大いに反対」が1.9%であり1/4は依然として反対をしている。

事前では、反対が多く、住民だけの助け合いでは安心ではない、ということであったが、議論を経て、安心という意味では支援を受け入れるよりも、コミュニティでの助け合いが重要と考えている。

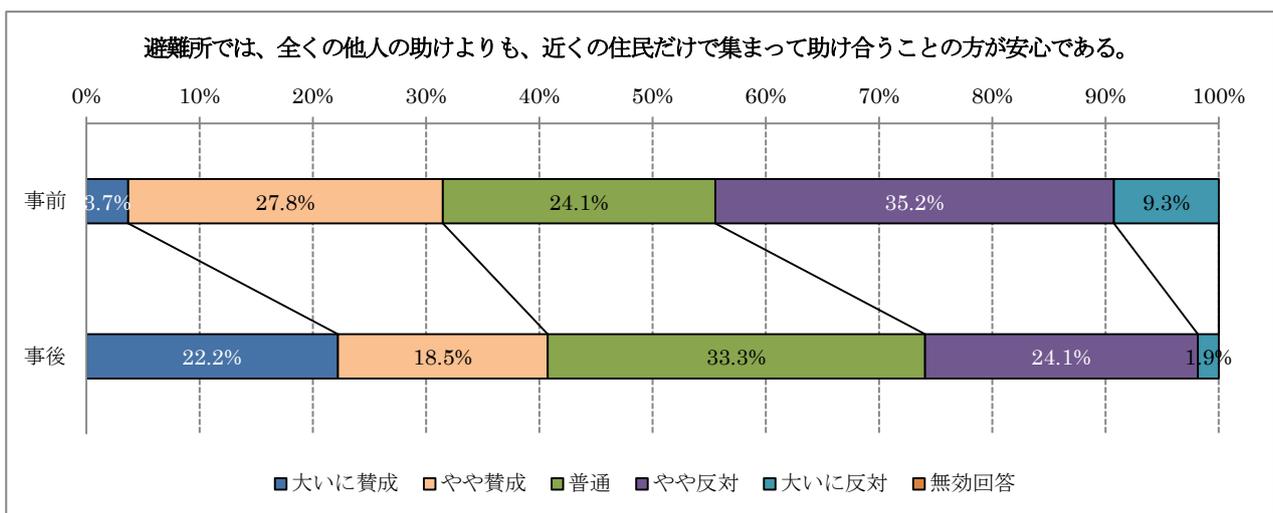


図 4-4-14 避難所では、全くの他人の助けよりも、近くの住民だけで集まって助け合うことの方が安心である、の比率

「[8] 被災した人は学校や職場に通うよりもボランティアとして地域の復旧に力を優先させるべきである」とについてであるが、発災前の生活を取り戻すためには、少しでも日常に近い生活、つまり通学や通勤を行うことが正しいのか、あるいは被災地の復旧や避難所の支援にあたるボランティアとともに、当事者としてそれに尽くすべきか、という点を問う内容である。事前では0.02となっており、ほぼ中立という結果である。想定するのに難しい設問であった。ただし事後では0.5と賛成が多くなる。つまり、後者の側、当事者としての役割を重視する意見である。個人を優先するべきか、地域を優先するべきかという課題でもあり、熟議の後は私益よりも地域での共益を重視することへの賛成が増加したのである。具体的な変化を【図 4-4-15】に示す。

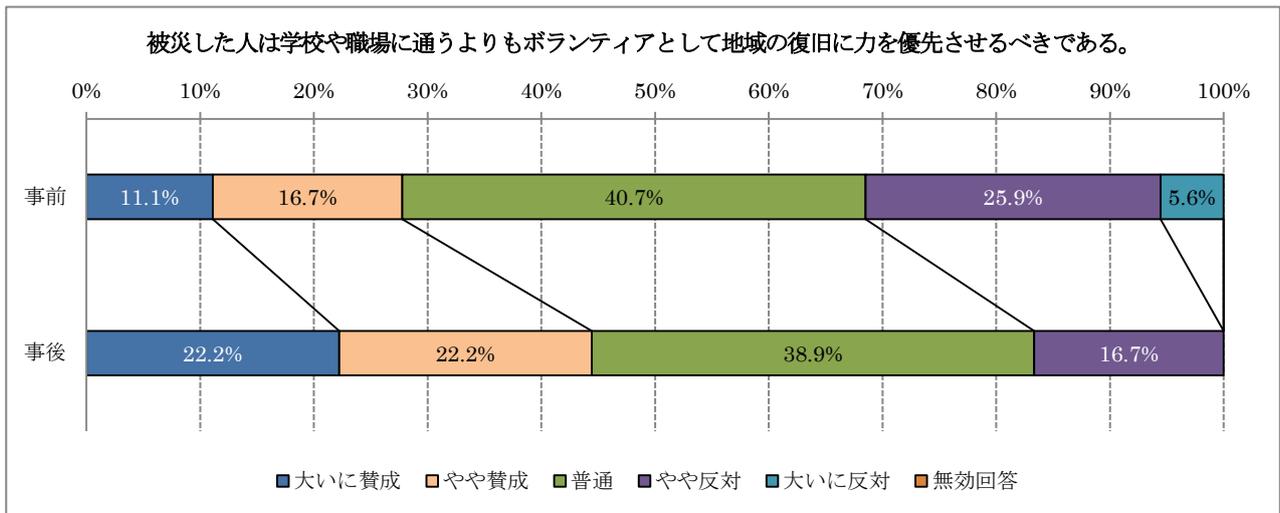


図 4-4-15 被災した人は学校や職場に通うよりもボランティアとして地域の復旧に力を優先させるべきである、の比率

図から、「普通」の回答が、事前で 40.7%、事後でも 38.9%と最も多くなっている。答えに迷った回答者が多かったことが伺われる。そして、事前では「やや反対」が 25.9%、「大いに反対」が 5.6%と反対が 31.5%を占めたのに対し、事後では、反対は 16.7%と減少、これに対し「大いに賛成」と「やや賛成」の合計は、事前の 27.8%から、事後に 44.4%となっている。自らできることを考えることが熟議での課題とされたが、そうした自助、または地域での共助の重視も理由として考えられる。

「[9] 大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である」とは受援力を巡る課題である。政府は「ボランティアを地域で受け入れる環境・知恵などのこと」を受援力としているが、ここでの質問はその必要性を問う。事前では 0.98 ポイント、事後では 1.39 に上昇している。受援力を日頃より高める必要性が共有されている。

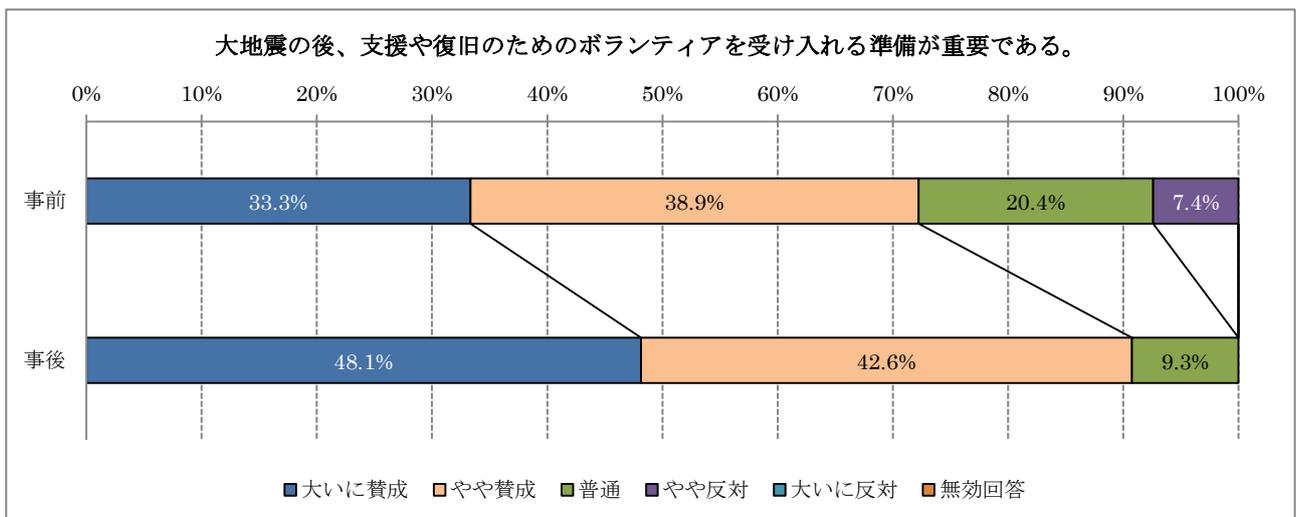


図 4-4-16 大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である、の比率

最後に「[10] 大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある」は、例年の設問である。事前では0.72、事後では1.09となっている。構成比率を見ると、「大いに賛成」と「やや賛成」は事前で51.9%と過半を占め、さらに事後では74.1%と3/4を占めている。特に高校生（N=38）に絞った比率を【図4-4-18】に示すが、事前では、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計が36.8%であったが、事後では71.1%へと大きく拡大をしている。

主権者教育を重視し、より高校生の力を伸ばすことも含めて検討してきた本学としては、大学の役割が熟議を通してより理解されたことは、大きな成果として誇ってもよいのではないかと。

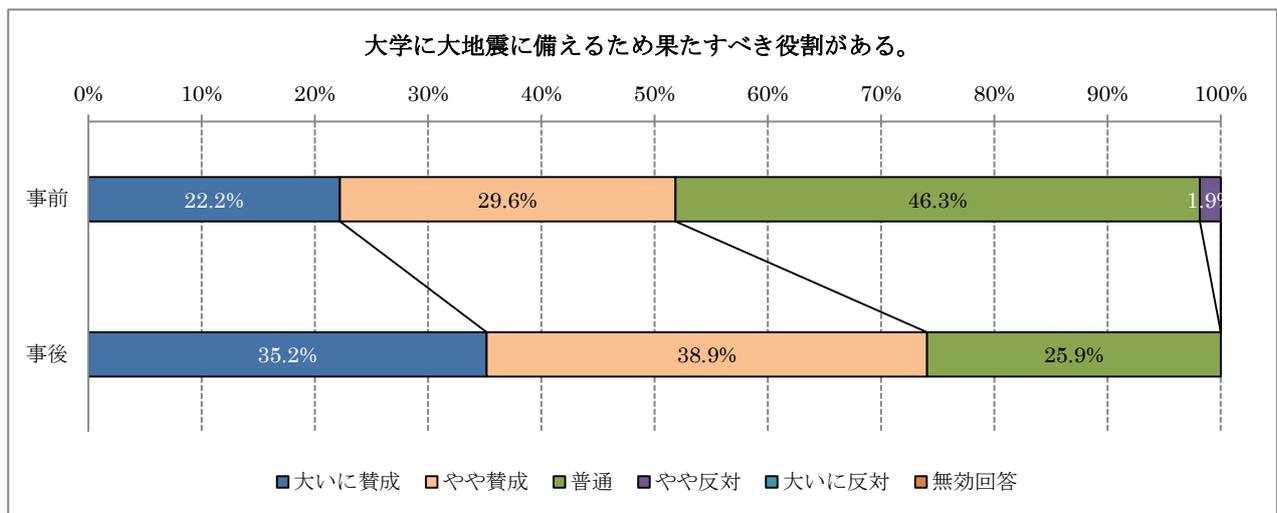


図 4-4-17 大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある、の比率

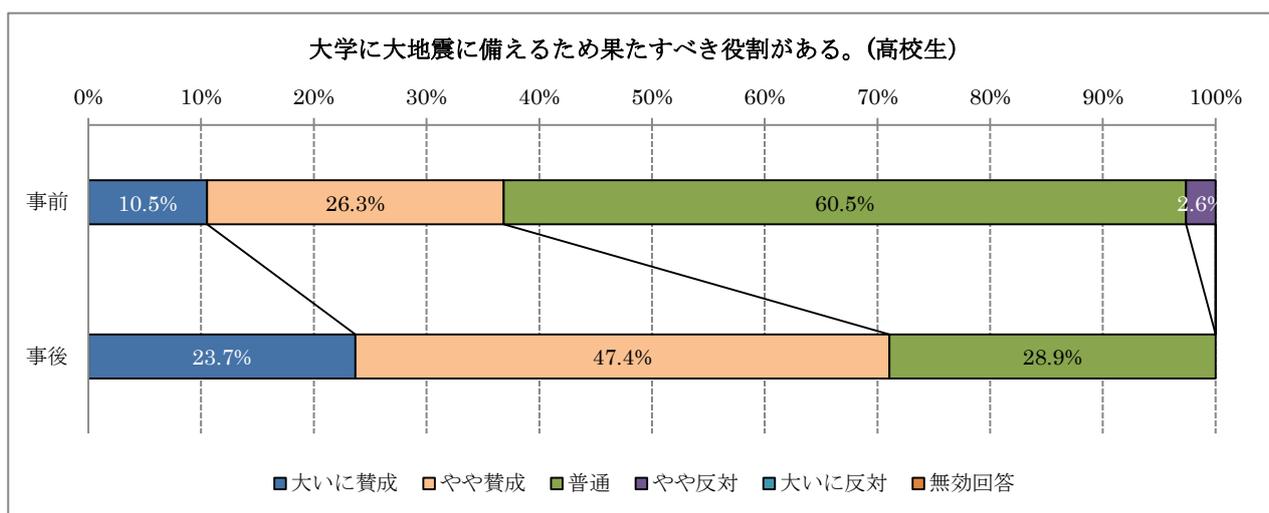


図 4-4-18 大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある(高校生)、の比率

(田端和彦)

結論 今後の熟議の発展のために

1. 「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」への回答

(1) アイディアを分類

まず、議論の段階を経て、得られた結論を段階別に振り返る。第2章で示した様々なアイディアや企画が本当に、上記課題の解決策となるのか、を検証する。まずAからJまでの10のグループでのアイディアを、段階別に記載すると下記の通りである。

防災段階
【インフラ整備等】 ◆所有者不明の家を壊すこと(C) ◆道の整備(D) ◆避難用の道路(E) ◆海拔を表示した看板の増加 AND 津波被害想定マップの作成(E) ◆交通機関の安全対策(F)
【啓発・訓練等】 ◆家具を固定する(A) ◆(障害者)高齢者の体力強化 (B) ◆ヘリポート・食料保管ができる場所の確認(B) ◆学外での避難訓練(C) ◆生活に根差した訓練(G) ◆備えあれば憂いなし(G) ◆加古川市内で毎月〇日に防災・減災デーを！(H) ◆安心だと思いきすぎない事(I)
【コミュニティ活動】 ◆大学生や高校生や地域の人によるコミュニティを深める行事などを行う(B)
【制度】 ◆コミュニケーションの一環として事前学習を行い、ルートの確認と連絡手段の取り決めを行う(D)
発災直後
【避難】 ◆避難(F)
【救助】 ◆兵庫大学による救命講習(B) ◆避難が困難な人を若い力で助ける仕組みづくり(C) ◆子供から大人ができる救急処置(E) ◆少ない力で大きな音が出せ、サイズが小さく普段使い出来るデザインの笛を持つ(I)
【消火】 ◆火災が起きた時のため池の活用(B)
復旧
【避難所運営】 ◆避難所での子どもたちの遊び場を作ること(C) ◆地域別の避難所ルール作成(D) ◆地域貢献を増やして収入源を増やす (D) ◆避難場所におけるプライバシーの保護(I) ◆物資の公平化(I)
【対人支援】 ◆人と話すことでストレスを貯めない(A) ◆水なしで飲める薬！(E) ◆ボランティアの他県、他校と連携契約(E) ◆ボランティア(G) ◆こども（社会的弱者）のケア(H)
その他
【情報共有】 ◆地域を良く知り情報を共有する(A) ◆地域の連携(F) ◆コミュニケーション(G) ◆人とのつながり(H) ◆地域でコミュニケーションをよくとり連携すること(I) ◆コミュニティ関係(J)
【その他】 ◆心理(G) ◆加古川の影響(H) ◆整備(J) ◆行政との関係(J)

出されたアイデアを整理すると、防災段階でのアイデアがより多く出されていることがわかる。発災後は人の努力だけでは対応ができず、予防こそが重要との認識がある。またその中でも訓練や啓発等のソフト的なアイデアが多数を占める。実現の可能性に注目をしているためか、かなり具体的なアイデアも多く見られる。発災についても、救命や避難支援など、人的な能力の活用が提案されている。復旧段階では、避難所、対人支援が主であり、一部ボランティアの受け入れについてあるが、復旧に向けての取り組みよりも、いかに被災をされた方に寄り添うか、という点がアイデアとして出されている。的確な避難とその後、そこで体調を悪くしないための工夫が見られる。

しかし、復興以降についてのアイデアは少ない。参加者、それも主として高校生は大規模災害の後の復興をまだ見るできていない。東日本大震災や熊本震災など傷ついた地域を見るだけでは復興にまでは考えが及んでいない。これは熟慮の段階でのインプットが十分ではなかったことも要因と思われる。その他には、コミュニケーションや地域活動といった、普段の活動内容が多く含まれる。これらは防災段階での【コミュニティ活動】に類するが、防災のさらに以前でも、また復興の段階にも必要であることなどから、別枠とする。

事前・事後に行ったアンケートの結果（第4章）と照合すると、参加者の関心事では、防災に関わる「住宅・建物の倒壊」でポイントが高かったことと一致する。また、減災に対する考え方の賛否を問う内容でも、「[3] 防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている」には否定的な意見が多く（ポイントは負値）、挙げられたアイデアの多くが、自ら行うことである、という点とも一致する。発災の前の防災に関心が高く、そしてそれは自ら行う、との思いが議論にも反映をしている。また、「[5] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる」については、過半数が「大いに賛成」と回答するなど、支持を集めた考え方である。そうした考えが背景にあって、コミュニケーションの重要性を上げるアイデアが多いと考えられる。

(2) 企画内容の可能性

次に、企画内容に注目する。アイデアを取り上げ、それを企画化するのであるが、アイデアを「素直に」企画化したものもあれば、アイデアを実現するために別のさらなる事業を企画化したグループも見られた。

まずは、「素直に」企画化したグループに注目をする。

防災段階の企画では、**加古川市内で毎月1日に防災、減災デーを作ろう!**は、加古川市民の防災・ゆるキャラ（ぼーさいくん）スタンプを作成し、LINE アカウントを取り認知度を向上させる、といった盛り上げによる啓発活動の具体的な方策を企画している。啓発活動としては比較的容易であり、SNSの活用は、ゆるキャラの代表格である、「くまモン」を意識している。「くまモン」は明確な意図の元、専門の企業が適切なマーケティングとそれに基づく企画により、成功を収めたが、減災デーの場合、それだけの予算を投下することが可能か。ちなみに加古川市防災センターにはオリジナルのキャラクター「防カル君」がいる。また**生活に根ざした訓練**は、訓練の形骸化を問題点とし、バーチャル

リアリティを導入することで訓練効果を上げるだけではなく、家族が参加し易いようゲーム性を取り入れたり、地域イベントと一体化したり、参加ポイントを付与したりするという参加者拡大の企画となっている。このうち、バーチャルリアリティの導入では、VR（仮想現実）やAR（拡張現実）、MR（複合現実）の技術によるゴーグルを使っての体験は持ち運びも容易であり、安価で効果的といえ、前述の加古川市防災センターでの大規模な煙避難体験施設よりも広い適用が可能である。避難訓練のイベント化は十分な設計がなされていれば可能であり、より多くの参加が得られるであろう。二次災害防止は「所有者不明の家を壊す」というアイデアからの企画で、危険な空き家の解体を含む地域管理である。これは重要な指摘であるが、空き家対策についての方針を防災の側面以外も含めて、自治体が定めている最中であって、法的側面を含め課題が多い企画となっている。

発災段階では、**あなたを助けるのは音 ～どうやって周りの人に help! を伝えるのか～**が、具体的な商品イメージで企画を作成している。つまり自力での避難ができない場合の「笛」を開発し無料配布し常時携帯するという企画である。災害にどこで、誰が遭遇するかわからず、全員に常時携帯という目的とし、カード式、防水性などのデザインや企業協賛でのコスト削減を企画に盛り込んだ。ただカード型で防水性など「笛」のイメージが明確であるが、自宅で被災し瓦礫の下敷きになることを考慮すると、携帯できることが優先事項ではなく、音を出すものを身近に置く方法を考慮しての「笛」開発を企画することも有望ではないか。

復旧段階では、**ボランティアの他県、他校との連携契約**は、ボランティア不足の解消のために日常的に、例えば他県の学校との共同避難訓練を行うなど、行政だけではなく民間を含めた多様な組織が県境を越えての連携を行い、人脈ネットワークを形成することを具体的な企画としている。実際、県境を越えての連携の約束などは、社会福祉協議会や生活協同組合など、地方組織と全国的な調整組織を有する機関で、既に一部実現をしており、NPOでも類似するカウンターパートとの相互協力の体制を作っている。そうすると、残るは学校である。これは実現を急ぐべき企画といえる。

次に、直接、アイデアを企画化するのではなく、複数のアイデアの要素を組み合わせたり、新たな意見を踏まえたりして作成された企画について触れる。

防災段階では、**地域とのかかわりを創る**、また**信頼関係構築のためのコミュニティの確立**は、円滑な避難や避難所での生活のため、事前に地域コミュニティとの関わりを強化するもので、前者は「食文化」「遊び」「清掃」の3つをキーワードから実現し、共にすることでの楽しさを経験として持つことを企画しているが、後者の場合、サポートセンターの設置により、いわゆる災害弱者と近隣住民との信頼関係を構築、避難時での対応が可能になる、という視点で企画されている。いずれも、普通の、日常からの地域活動と同様であるが、防災の視点をもっていることが重要である。さらに、**JOIN US 加古川 ～ 高校生からはじめる ～**は、体力ある高校生がそうした活動の主体となる企画である。

発災段階では**避難シミュレーション**がある。背景としてあるのが、前述の災害弱者への配慮である。こうした災害弱者が、発災後の避難から避難所での生活で、自宅へ戻るまでシミュレーションをすることは、当事者の生命を守るために不可欠である。阪神・淡路大震災では、聴覚障害のため避難所がわからず避

難が遅れたり、熊本地震の際にも福祉避難所として指定された社会福祉施設も、自施設の入居者や通所者の受け入れで定員がいっぱいになったり、職員も被災したために、十分な手が足りなかったりした、という。こうした反省を踏まえ、より具体的なシミュレーションが必要である。

復旧段階から復興段階にかけての企画は、**加古川活性化**である。復興を進めるためにも加古川地域の活性化を図る必要がある、との企画となっている。やはり交流人口を大きな要素と考え、地域の観光資源に着目し、資金を得る。コミュニティビジネスについては、阪神・淡路大震災の後、兵庫県が導入、被災地での経済活動にも取り組んだ経緯もあり、可能性は高い。

2. 主権者教育としての可能性

主権者教育としての側面を有する熟議についての評価を行う。本学が熟議を設計する際には、討議型世論調査の手法を参照していたことは既述の通りである。世論調査の目的は、複数ある政策の選択肢から特定の政策に集約する一環である。つまり、国や地方自治体レベルでは、主権者の民意の集約の場ともなる。為政者も議員も、これを無視することは難しい。しかし、主権者教育の対象とした高校生は、第4章で示したように、本学での熟議の経験を通し、熟議を多様な意見を出す場、いわば民意の表出の場と捉えている。高校生は議論を通して自分がどのような考えを持つようになったか、を決着させるというよりも、多様な意見を出して、聞く場と考えている。

これは自立した選択をする、ということが重視される主権者教育としては、効果を上げていないようにも思われる。ただ、熟議の意義を、むしろ多様な意見に触れて、自分の考えを深めたり、整理したりする機会になっている、とはいえないだろうか。

第2章にて示したように、アイデアを企画にする際、災害弱者の問題を取り上げるグループが複数あったことがわかる。事前・事後アンケートでは、「⑥近所の高齢者や障がい者の避難支援」への関心の大きさも、また「[6] 高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ安全を確保することが重要である」との考え方へ「賛成」の比率も、高校生では事後で事前と比して拡大が目立ったのである。つまり、高校生は今回の議論の場を通して、自ら考えるべき要素を増やしたということである。

改めて、自律した選択をするということについて検証するため、減災への考え方を再度見ると、「[5] 人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる」と「[9] 大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である」とについては、事後により賛成の意向を強めている。全体としては地域での結束を強め同時に受援力を高める必要性についての民意の選択があったといえる。それらがアイデア出しや企画に十分反映をされているところから、企画案は、全体でみれば民意の選択に基づく内容であったといえる。今後の熟議では、議論の成果と参加者自らの意見の変化とを明らかに示すことが期待されるところである。

(田端和彦)

資料編

「熟議 2016 in 兵庫大学」開催結果

1. 日 時 . . . 平成 28 年 11 月 20 日（日）10：00～15：30

2. 場 所 . . . 兵庫大学（加古川市平岡町新在家 2301）

3. 主 催 . . . 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

4. 共 催 . . . 加古川市

5. 参加者数

・参加者	63 人（内 学生 7 人、高校生 43 人）
・傍聴者	21 人
・学生ファシリテータ	10 人
・司会者	1 人（参加学生と重複）
・登壇者	5 人
・メインファシリテーター	1 人
合計	100 人

6. 熟議プロジェクトチームメンバー

田端 和彦 森下 博 中本 淳 中井 玲子 米野 吉則 斎藤 正寿
小林 洋司 岩崎 治夫 柏村 裕美

7. 後援

兵庫県、兵庫県教育委員会、高砂市、稲美町、播磨町、
加古川市教育委員会、高砂市教育委員会、稲美町教育委員会、
播磨町教育委員会、（公財）兵庫県生きがい創造協会、
神戸新聞社、BAN-BAN ネットワークス株式会社

8. 協力企業（お菓子の提供）

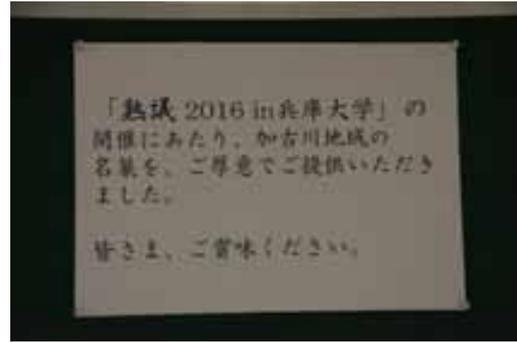
株式会社春光堂、ニシカワ食品株式会社、株式会社奈央

9. 実施風景写真



以上

ご提供いただきました御菓子



ありがとうございました！！

熟議 2016 in 兵庫大学

修了証書

○○○○ 殿

あなたは『熟議 2016 in 兵庫大学』において、「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」について熟慮し議論を行い共有して、熟議のプログラムを修了したことを証します。

2016年11月20日

兵庫大学・兵庫大学短期大学部
学長 河野 真



ユーザー : ●●●●●●

パスワード : ●●●●●●●●●●



URL : <http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugugi/pass2016/>

自己認識シート(事前評価)

学校名			年
科・コース		学年	
氏名			

※下記に示された各能力に対し、今のあなたに当てはまると思われる「④レベルの欄」の1～5を○で囲んでください。

①能力	②能力の説明	④レベル				
		かなり自信がある	自信がある	ふつう	あまり自信がない	まったく自信がない
自主性	物事に進んで取り組む力	5	4	3	2	1
思考力	問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力	5	4	3	2	1
実行力	目標に向かって行動する力	5	4	3	2	1
対応力	状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力	5	4	3	2	1
交渉力	人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力	5	4	3	2	1
会話力	相手と意思疎通(そつう)を図る力	5	4	3	2	1
計画力	現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力	5	4	3	2	1
規律性	社会のルールや人との約束を守る力	5	4	3	2	1
運営力	違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力	5	4	3	2	1
貢献性	社会の担い手として役割を自覚して、参画する力	5	4	3	2	1

熟議に参加される皆様へ

まずはこの書類（資料A）をお読みください。

「熟議 2016 in 兵庫大学」の進め方

1. 熟議はなぜ必要なのでしょうか？

「熟議 2016 in 兵庫大学」にご参加いただき、ありがとうございます。

最初に「熟議」についてご説明します。熟議は、「熟慮」と「議論」を併せた言葉です。しばしば、よく考えて議論をする、との意味で「熟慮の国会」などの使われ方もありましたが、本来、そうしたよく考え議論をする、だけではない意味が「熟議」にはあります。

日本では、選挙により国や地方の代表者を選ぶことにより、社会を動かし、政策を進めています。国会では私たちの代表者が議論を交わし、また市や県でも、選挙で選ばれた議員と市長・知事が議論を交わし、よりよい社会のための活動を行っています。この間接民主主義による政治は、効率性などの面で優れていると言われています。

しかし、自分たちが生活をする小さな地域（コミュニティ）のことについて決めたり、課題を解決したりするには、今の政治の仕組みだけでは難しいのです。こんなことを想像してください。

大きな地震が自分の住んでいる地域を襲った場合、狭い道路が入り組んでいるこの地域では、高齢者などを助け出して避難をすることが難しいであろう。そこで、市の消防局に、大地震の際には、この地区に優先的に消防車や救急車を派遣して欲しい、と要請を行った。しかし、市民全体の公平な扱いの点から「それはできない」との回答であった。いざとなれば、何とか住民同士で助け合い、避難しなければならなくなった。

住民が課題に対して熟慮するとともに、それについて議論を行う「熟議」がここから始まります。生活する地域ごとに課題が異なり、住民も様々です。誰が、何を、どのようにすることが地域にとってよいことであるのか、「熟議」によって示すことが必要とされるでしょう。そして「熟議」は選挙を通して参加する現在の政治の動きを助ける、新しい政治参加であり、主権者として地域に関わる手法でもあるのです。

2. 熟議は話し合いとは違うのですか？

課題について考え議論をする重要性はご理解頂いただけましたか？

これまで、学校場で、あるいは職場や地域の場で、課題を解決するために話し合いをしてきた経験がおありだと思います。これは民主的な方法であり、正しいやり方と教わってきました。こうした、話し合いと「熟議」とはどこが異なるのでしょうか。



「熟議」は熟慮し議論するもので、熟慮が議論の前にあります。話し合いで出てくる新たなアイデアは貴重ですが、一方で、事前の情報が不足し、参加者が互いに認識を共有しないまま話し合いがおわったり、結論が必ずしも現実を反映していなかったり、というこ

ともしばしばあります。

熟慮をすることで、課題を理解し、自分の考えを整理しておけば、実のある議論ができると思います。「熟議」は、そうした熟慮の段階を議論の前に持つことで、議論だけよりも、課題の解決や方針を立てることに近づくことができると考えられています。

3. 「熟議 2016 in 兵庫大学」はどのように進められますか？

兵庫大学では、この熟議を A「熟慮の段階」、B「議論の段階」、C「共有の段階」、D「振り返りの段階」、そして E「活動の段階」の 5 つに体系化しています。これが兵庫大学熟議手法です。これに沿って、「熟議 2016 in 兵庫大学」の進め方を説明します。

右にチェックボックスがありますので、チェックをしながら読み進めてください。

A. 事前に学習して認識を持ちましょう（熟慮の段階）

まず「熟慮の段階」の説明をいたします。「熟議 2016 in 兵庫大学」のテーマである、「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」についての共通の情報を得て頂き、それらを踏まえて熟慮をして頂きます。なお加古川市、高砂市、稲美町、播磨町を「加古川地域」と定義していることをご確認ください。

熟慮のために兵庫大学では、2 回の講演会を用意しています。講演会に出席することで、熟慮のための基盤を作ることができます。また、インターネットでも熟議の概要等をお届けしています。

① 講演会の日程を確認してください

熟慮の機会として講演会があります。ホームページで日程を確認してください。

② 「熟議 2016 in 兵庫大学」のページをご覧ください

下記のアドレスにて、「熟議 2016 in 兵庫大学」のホームページをご覧ください。パソコンの他、スマートフォンからでもご覧いただけます。「兵庫大学」+「熟議」でも検索いただけます。

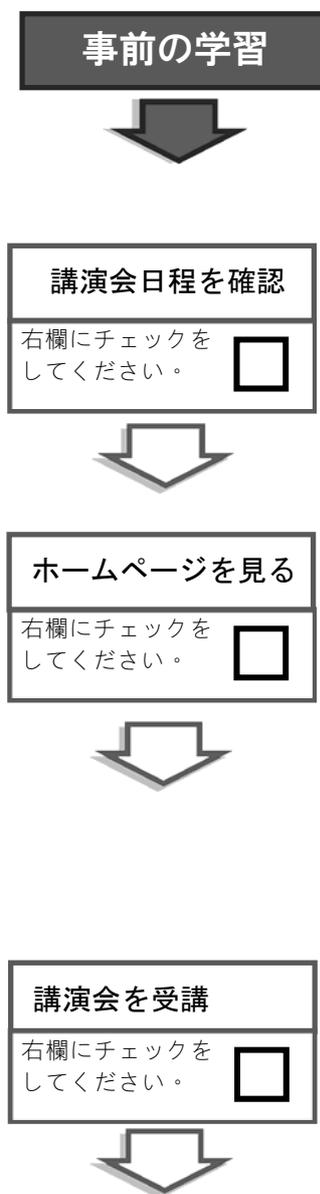
[http:// www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/](http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/)

このページでは、皆様に対して、熟議の解説、関係資料、過去の報告書などを提供しています。ご意見、ご質問も承っております。

③ 講演会を受講してください

2 回の講演会を受講して下さい。講演会では、事前の学習が出されることもありますので、それらについてもきちんと答えてください。（大学生・高校生はワークショップの実践研修にも参加してください。）

1.平成 28 年 10 月 22 日(土) 10:00~12:00 兵庫大学 17-407 教室
 テーマ 地震災害のメカニズムと地域に求められる対策
 講師：紅谷 昇平（兵庫県立大学防災教育研究センター准教授）



資料A

2.平成 28 年 11 月 5 日(土) 15:00~17:00 兵庫大学 17-407 教室
 テーマ：災害支援とボランティア
 講 師：宮本 匠（兵庫県立大学防災教育研究センター講師）
 ＊講演会開催日は、兵庫大学スクールバスにご乗車いただけます。別紙スクールバス乗車許可証をご利用ください。

④ アンケートに回答をしてください（11月8日に用紙を発送します）

資料B『熟議 2016 in 兵庫大学』参加者・アンケート」にご回答ください。集計を致しますので、個人情報が出ることはありません。

⑤ 資料を郵送してください

以上、すべての作業が終わりましたら、資料B『熟議 2016 in 兵庫大学』参加者・アンケート」を返送用封筒でご返送ください。

⑥ 今後もホームページをご覧ください

ホームページを通して、本学から熟議の情報を提供いたします。高校生、大学生を対象には、議論の方法を学ぶ機会もあります。そうした情報を随時掲載いたします。

B. お互いの認識を出し合い、議論をしましょう（議論の段階）

それぞれの方が熟慮をした結果を一つの場に持ち寄り、それを開示し話し合う「議論の段階」となります。熟慮の段階では、大地震が発生した後の、被害状況や被災された方々の復旧、復興への歩みなどを学び、考えてこらえたと思います。議論の段階では、そうした熟慮を踏まえ、今、加古川地域を大地震が襲った時の備えとなる地域のありかた、人々の行動について議論をして頂きます。

11月20日（日）に、会場となる兵庫大学 5号館 1階のラーニングコモンズにお越しくださいその際には、この「資料A」、その他各自で必要と思われる参考資料をお持ちください。

会場では、指定されたテーブルにおつきください。

熟慮をされた内容をもって議論に臨むことができます。

次に、議論の進行について説明をいたします。議論は2段階で行います。

① 地震の被害を減らすための防災の取り組み

地震の発生を止めることはできませんが、備えることにより、被害を小さくすることは可能です。どのような防災の取り組みが必要か、各テーブルで議論をします。

議論の進行は、会場のメインファシリテーターが行います。その進行に合わせ、各テーブルのファシリテーターが具体的な指示を行いますので、どのように議論を進めればよいかという不安をお持ちにならなくても大丈夫です。また会場には専門家も待機していますので、テーブルでの議論の中で、専門性について判らないことがあれば、どしどし聞いてください。

テーブルでの議論の結果、どのような防災の取り組みがあるのかを提出してください。これで最初の段階の議論は終了です。

昼食は兵庫大学で用意をしています。

資料Bに回答

右欄にチェックをしてください。



アンケートを返送

右欄にチェックをしてください。



ホームページで情報確認

右欄にチェックをしてください。

議 論



資料を用意、持参

右欄にチェックをしてください。



テーブルに着く

右欄にチェックをしてください。



防災の取組について議論する

右欄にチェックをしてください。



資料A

② 防災の取り組みのための具体的なアイデア

午後から始まる、第2段階では、防災の取り組みを解決するために、具体的なアイデアを話し合います。防災の取り組みに必要な、防災グッズを考えても良いかもしれませんが、どうすれば、取り組みが盛り上がるのか、イベントを行うアイデアもあるでしょう。具体的なアイデアをまとめるまで、テーブルで議論をして、まとめて頂きます。

C. 議論の結果や結論を共有します（共有の段階）

各テーブルでの議論が終われば、その結果を参加者全員が共有し、理解することが「共有の段階」です。

①他のテーブルでの議論を知る

各テーブルから代表者が、課題とテーブルで話された結果を持ちより、メインファシリテーターの司会の下、それらについて議論を深めます。代表者以外の方々も、それをしっかりと聞き取り、随時意見を述べてください。会場の専門家からも、それぞれ専門的なお立場からお話を聞く事もできるでしょう。

議論の共有の際、意見が異なることを恐れてはいけません。恐れるべきは、そうした議論のできない社会です。

②アイデアコンテスト

最後にアイデアのコンテストを行います。アイデアコンテストは出された防災の取り組みの具体的なアイデアの中で、是非とも実現してみたい、やってみたい、というものに投票を行います。コンテストといっても、アイデアの優劣を競うのではなく、熟議の成果を発揮し、それを地元を持ち帰り、実現するための方法です。

D. 仲間づくりと自分の成長（振り返りの段階）

さて、議論の共有も終わりました。皆様一人一人の心の中で、地域づくりへの認識はどのように変わりましたか。振り返るため熟議当日『熟議 2016 in 兵庫大学』参加者・アンケート（事後）」にご回答ください。

もう一つ重要なことが、「熟議 2016 in 兵庫大学」の成果を発揮するための仲間づくりです。テーブルで一緒になった人たちや、意見を交わした人たち、自分の活動を紹介したりして、年代の違いを超えて、これから活動を共にする仲間を見つけてください。

E. 今後の活動（活動の段階）

今回開催した「熟議 2016 in 兵庫大学」での仲間とともに、その成果を今後の地域での活動を行うことが大切です。それぞれの立場で、それぞれの考え方をもち、共に活動することが、熟議の最大の成果となります。兵庫大学・兵庫大学短期大学部は、そのようなあなたをこれからも応援します。

アイデアを具体的にまとめる
右欄にチェックをしてください。 <input type="checkbox"/>

議論の共有



他のテーブルの結果を聞く
右欄にチェックをしてください。 <input type="checkbox"/>



アイデアコンテスト
右欄にチェックをしてください。 <input type="checkbox"/>

振り返り



事後アンケートに回答
右欄にチェックをしてください。 <input type="checkbox"/>

今後の活動



活動を行う
右欄にチェックをしてください。 <input type="checkbox"/>

熟慮講演会 「災害支援とボランティア」スライド

熟慮 2016 in 兵庫大学 事前セミナー
災害支援とボランティア
～熊本地震の被災地から考えるボランティアの今と未来～

宮本匠
兵庫県立大学防災教育研究センター 専任講師

1

テーマ

- ・災害時のボランティア活動のあり方について、ボランティアの本来の意味をあらためてふりかえった上で、災害ボランティア活動の現状と課題を主に熊本地震の事例を通して議論し、今後の災害ボランティアの望ましいあり方について理解を深める。

2

ボランティアって何？

3

災害って何？

4

災害とは？

- ・災害因(hazard) × 社会(society)
- ・災害には顔がある

5

減災って何？

6

防災 減災

7

「孤独死」



8

孤独死が問うたもの

- ・一人で亡くなることが問題なのか？
- ・「独り」で亡くなった(「死」)ことではなく、「生」が孤独であったことが問題
 - ・緩慢な自死
- ・減災:災害直後の生き死にだけでなく、その人が生き生きと生きているのかをも含んだ概念

9

熊本地震から考える

10

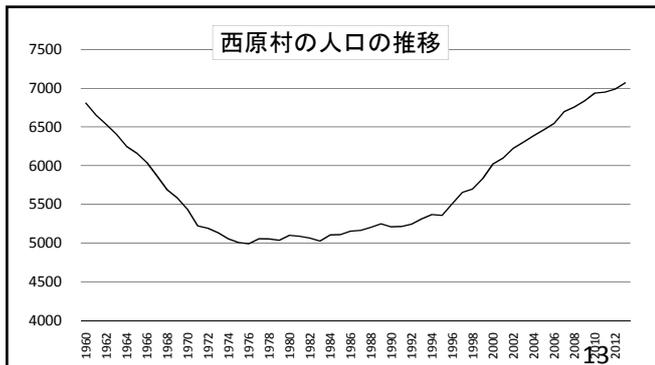


11

西原村

- ・人口:6902人
- ・世帯数:2585世帯
 - * 2016年7月末現在
- ・高齢化率:28.0%(全国平均は22.8%)
- ・1960年に、阿蘇郡山西村と上益城郡河原村が合併し、両方の一字をとって西原村に
- ・農業:サツマイモ、里芋、イチゴ、トマト、メロンなど。
- ・観光:南阿蘇への玄関口
- ・伝統的な集落と新興住宅地

12



西原村の地震被害

- 4月16日の本震(震度7)による被害
 - 余震、大雨による被害の拡大
- 人的被害:死者5名
- 家屋被害:全壊505棟、半壊以上1281(調査数2831棟) ※8月15日時点
- 徳山トンネルの崩落(国の直轄で年内には復旧か)
- 農業被害
 - 大切畑ダムやため池の被害
- 水道の被害(村営水道と簡易水道)

14

西原村の支援へ

- 4月16日朝から熊本入り(5月10日まで)
- 被災地NGO協働センターのスタッフと報道されていない地域を重点的にまわる
 - 菊池市の山間部、南小国町、産山村・・・
- 4月20日西原村へ
 - 被害が甚大な割に、支援の手が少ない
 - 社協職員が5名(+地域包括支援センターの職員が1名)
 - 村内にNPOは1つ(たんぼぼハウス)
 - ボランティアセンターの立ち上げ・運営の支援へ

15



16



17

西原村災害ボランティアセンター設立へ (4月24日@西原村)



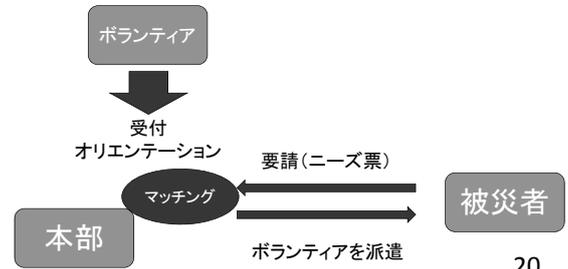
18

西原村災害ボランティアセンター立ち上げ支援

- 西原村災害ボランティアセンター
 - 西原村社会福祉協議会が中心(局長が元総務課長)
 - 地元(藤本先生(熊本学園大、村民)、寺本わかばさん(神大2回生))
 - 西原村役場から1名
 - 応援社協(近畿ブロックを中心に)
 - 外部(被災地NGO協働センター、ハビタット、その他NGO、NPO、中越関係、地域おこし協力隊ネットワーク、兵庫県立大)
- 「ボランティアを管理するのではなく、信じる」を合言葉
 - サテライト方式(5月末まで)
 - 7月29日以降は「西原村復興支援災害ボランティアセンター」に
 - 農業ボランティア等の活動を展開

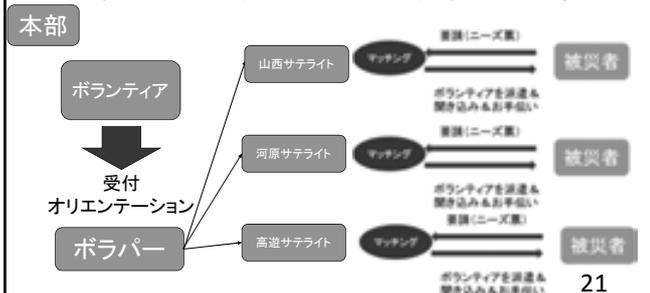
19

災害ボランティアセンターの仕組み(通常)



20

災害ボランティアセンターの仕組み(西原)



21

サテライト方式で可能になったこと

- 地域と関係をつくりながら、ボランティアが活動する
 - 地域住民自身も、ボランティアコーディネートを担う
 - 一方で、抜けがないか、時にはフォローも必要
 - サテライトが地域住民が立ち寄れる場所になる
- より被災地域の特徴にあわせたボランティアコーディネート体制をつくることできる

22

サテライトごとの特徴

- 山西サテライト
 - 山西小の隣に設置
 - 担当エリアは、どちらかというと「集落」
 - 担当地域の多くが被害大、サテライトから歩ける範囲に活動場所が多く、区長との連携を密に取りながらボランティアが活動
- 河原サテライト
 - 河原小の隣に設置
 - 担当エリアは、どちらかというと「集落」
 - 担当地域の被害がまばら。活動場所が、サテライトから徒歩で移動できない場所が多く、車で移動したり、ニーズ班が調査を積極的に実施
- 高遊サテライト
 - 新興住宅地の中の民有地(芝畑)に設置
 - 担当地域は新興住宅地、区長さん&学校のPTAネットワークが活躍
 - ボランティアの宿泊場所も併設される

23



24

西原村VCで対応した事例

25

応急危険度判定の「色」で判断しない



26

建築士さんとの連携



27

六地蔵の復旧(6月15日) —「おうちの片づけより、お地蔵さんが気になる」—



28

重機ボランティアとの連携



29

農業復興ボランティア



30

農業復興ボランティア

- 「から芋の苗付けが・・・」
- 反対の声もあったが「生活支援」として整理
- 元地域おこし協力隊の河合氏が中心
- 延べ2534人が参加(内リピーターが8割！)
- 「作業」だけでなく「気持ち」を支える
- 西原村のファンづくりにつなげる

31



32

「西原村百笑応援団」に発展

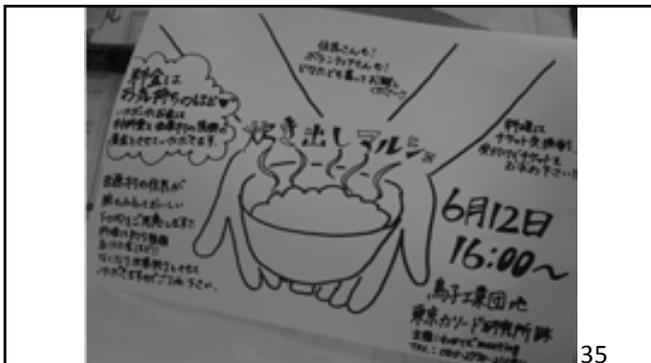
- 9月から農業体験プログラム「西原村百笑応援団」
- 農家が主体の組織へ
 - 農業体験の受け入れとし、農家からは会費を徴収、それで事務局を運営する
 - シルバー人材と連携する
- シルバーのつくったお弁当をボランティアが購入し、地域経済の循環へ

33

「わかばmeeting」の発足

- 寺本わかばさん(20)
 - 西原村出身
 - 神戸大学在学中
- 「西原の地元の人の活躍する場所をつくりたい！」
 - 旧住民と新住民
 - 西原のファンを増やしたい！
- 炊き出しマルシェ、フリーペーパーの発行、無料食器市、まちあるき

34



35



36

フリーペーパー「DOGYAN」



37

「まちあるき」や「食器配布」



38

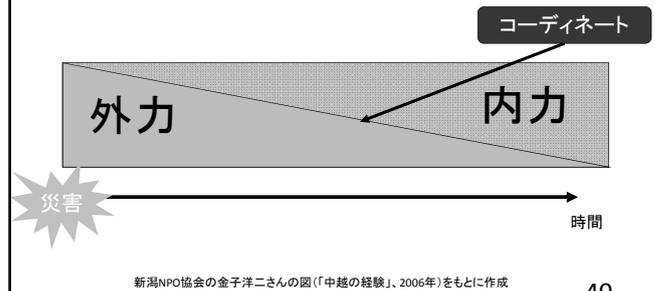
炊き出しでのエピソード

•「いも天と豚汁があるなら、おにぎりは地元のお母さんにつくってもらいましょうか」



39

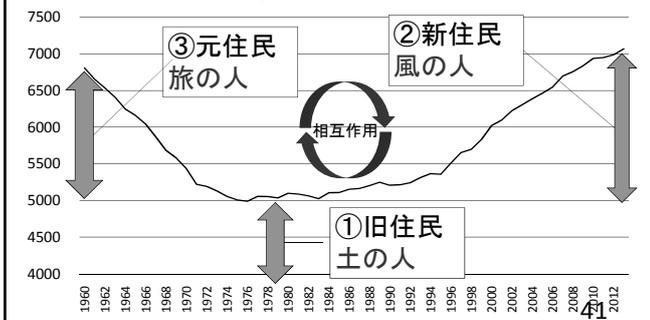
ボランティアのコーディネートって？



新潟NPO協会の金子洋二さんの図(「中越の経験」、2006年)をもとに作成

40

西原村民のバラエティ



41

西原村の強み「西原村民のバラエティ」

- 土の人(旧住民)
 - 被災直後から避難所などで活躍
 - 「住民の誰一人も役に立たない人はいない！」
- 風の人(新住民)
 - 独自のネットワークで外部と西原村のつなぎ役に
 - わかばミーティング
 - 「避難所でよくしてもらった。その恩返しをしたい」
- 旅の人(元住民)
 - 絶妙な距離感で西原村のつなぎ役
 - Noroshi西原

42

西原村の強み「外部支援者のバラエティ」

- (経験のある、柔軟な) 応援社協の皆さん
 - マニュアルにとらわれずに寄り添う活動
- (経験のある) NGO
 - サテライト方式、「赤紙」家屋の支援などを提案
- 県外を含めた多くのボランティア
 - V受け入れ制限をしなかったため集中
- 西原村がオープンなためにやってくるNPO/NGO
- ボラセンにとらわれないボランティア
 - 農ボラ、裏ボラ、野良ボラ…
- 地域おこし協力隊ネットワーク
 - 農業ボランティアの運営に力を発揮

43

西原村の復興のポイント

- 災害を機に交流した多様な人々の相互作用をどのように活かせるか
 - 土の人(旧住民)、風の人(新住民)、旅の人(元住民)がいかにもやいなおしができるか
- 西原村がオープンであったためにやってきた多様な外部支援者をどう活用できるか

44

西原村の事例における課題

- マニュアルにとらわれないということは……
 - どのように共通認識をもつのか
 - 人が交替する中でどのように共有するか
 - どのようにブレーキを踏むか
 - 危険な作業も

45

西原村の事例から考える 今後のボランティアのあり方について

- ボランティアとは何だったのかの問い直し
- 地域特性を活かしたボランティアセンターの運営
 - 災害=災害因×社会
 - 災害支援=教訓・経験×地域特性
- 加古川地域で災害が起きたときに、どのようにボランティアを受け入れられるか

46

「熟議 2016 in 兵庫大学」参加者・アンケート

この調査は記名式のアンケート調査です。「熟議 2016 in 兵庫大学」の開催に先立ち、テーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」に関する考え方、熟議についての認識などを確認するために行います。ご回答は選択肢の番号を右欄に記入するか、指示に従い、直接、記入してください。

なお、当該調査票は兵庫大学にて厳重に保管し、統計的に処理をした結果のみを公表する予定です。調査票にご記入頂くお名前等は、主に熟議後のアンケートとの照合を図るためであり、熟議の実施以外の用途に用いることはございません。ご理解の上、ご回答をお願いいたします。

当該アンケートの回答期限は平成 28 年 11 月 16 日（水）です。返信用封筒にてご回答ください。ご多忙のおり、ご迷惑をおかけしますが、よろしく願いいたします。

1. 下記の欄に、あなたのお名前を下記にご記入ください。

お名前	
-----	--

2. 学校生活や社会経験の中で、ワークショップや市民会議、グループ討議など「参加者が議論し、対策や方針を作成する」というご経験はありましたか。1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① 現在も多くの機会を経験をすることがある（年間5回以上が目安）
- ② 機会は少ないが、現在でも経験をすることがある
- ③ 以前には経験をしたことがあるが最近はない
- ④ これまでほとんど経験をしたことがない

3. 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法について、ご経験を踏まえ良い点と悪い点を次の一覧より1つずつ選び、それぞれ右欄に番号を記入してください。なお、良い点、悪い点がない場合、それぞれの欄は空白のままにしてください。

〈良い点〉

- ① 多様な考えを知る機会がある
- ② 少数意見も平等に扱われる
- ③ 決定した後の行動が容易である
- ④ 参加者の満足度が高い
- ⑤ わからない
- ⑥ その他（ ）

〈悪い点〉

- ① 時間や労力がかかりすぎて非効率
- ② 議論だけではまとまらず決められない
- ③ 立場が上の人意見に影響されやすい
- ④ 感情的な対立が残ってしまう
- ⑤ わからない
- ⑥ その他（ ）

4. 「熟議 2016 in 兵庫大学」への参加の以前から、熟議という言葉をご存知でしたか。

- ① 熟議の内容を含めよく知っていた
- ② 言葉では聞いたことがあった
- ③ 今回初めて知った

5. 「熟議 2016 in 兵庫大学」に参加しようと思われたのはなぜですか。次より2つ以内で選び右欄に番号を記入してください。

- ① 市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから
- ② 「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」というテーマに関心があるから
- ③ 大学が主催する事業に参加したいから
- ④ 地域での活動全般に関心があるから
- ⑤ 学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから
- ⑥ 特に強い理由はないが、なんとなく参加をしたいと思ったから
- ⑦ その他（

6. 「熟議 2016 in 兵庫大学」の資料やホームページをご覧になり、また講座を受け、今回の熟議の進め方についてご理解をいただけたでしょうか。1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 十分に理解することができた
- ② 大体は理解することができた
- ③ あまり理解することができなかった
- ④ ほとんど理解することができなかった

7. 「熟議 2016 in 兵庫大学」での「議論の段階」において、あなたはどのことに最も大きな期待を持っておられますか。下記から1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 自分の意見を述べる機会があることへの期待が大きい
- ② 他の人の意見を聞くことへの期待が大きい
- ③ どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい
- ④ 結論や提案がどのようなものになるのか、結果の期待が大きい
- ⑤ 多くの人と交流したり話をする事への期待が大きい
- ⑥ その他（

テーマの「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」について伺います。

8. テーマは加古川地域やその住民にとって重要な課題になると思いますか。次の中からあなたの考えに近いものを一つ、選んでください。

(選択肢と回答欄は次ページにあります)

- ① 大変重要な課題である
- ② 重要な課題ではあるが、他に優先すべき課題が多い
- ③ 地域の課題の一つであるが、重要とは言えない
- ④ 大地震の可能性は低く、地域での課題となるものではない
- ⑤ その他（

)

9. 事前の講演を受講され、またご自身で調べるなどして、テーマについて十分に熟慮され、理解が深まりましたか。

- ① 十分に理解することができた
- ② 大体は理解することができた
- ③ あまり理解することができなかった
- ④ ほとんど理解することができなかった

10. 今、加古川地域を大地震が襲った、と想定とした場合、次の事柄についてあなたの関心の強さを5段階で表し、あてはまる番号に○を付してください。

	高い ←		→ 低い		
①住宅・建物の倒壊	5	4	3	2	1
②情報の入手が困難になること	5	4	3	2	1
③周辺での火災の発生	5	4	3	2	1
④津波が襲ってくること	5	4	3	2	1
⑤避難にかかる時間や移動する体力	5	4	3	2	1
⑥近所の高齢者や障がい者の避難支援	5	4	3	2	1
⑦家族との連絡	5	4	3	2	1
⑧支援物資が入手できるまでの期間	5	4	3	2	1
⑨避難所の状況（混雑や安全性）	5	4	3	2	1
⑩避難生活に伴う健康の悪化	5	4	3	2	1
⑪ボランティアによる支援	5	4	3	2	1
⑫職場や学校の再開	5	4	3	2	1
⑬住宅の再建など生活の場所の確保	5	4	3	2	1

11.加古川地域を大地震が襲った場合を考えて、下記のような考え方についてあなたは、賛成ですか、それとも反対ですか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

		大いに賛成	やや賛成	普通	やや反対	大いに反対
1	地震に備える防災倉庫建設のため公園を縮小するなど防災のためなら住民に不便があっても仕方がない。	5	4	3	2	1
2	科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる。	5	4	3	2	1
3	防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。	5	4	3	2	1
4	被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい。	5	4	3	2	1
5	人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる。	5	4	3	2	1
6	高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ、安全を確保することが重要である。	5	4	3	2	1
7	避難所では、全くの他人の助けよりも、近くの住民だけで集まって助け合うことの方が安心である。	5	4	3	2	1
8	被災した人は学校や職場に通うよりもボランティアとして地域の復旧に力を優先させるべきである。	5	4	3	2	1
9	大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である。	5	4	3	2	1
10	大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある。	5	4	3	2	1

12.あなたのご所属先について1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① 高等学校（高校生） ② 大学（大学生） ③ 民間企業
 ④ 自治体・政府（公務員） ⑤ NPO・各種団体 ⑥ その他（ ）
 ⑦ 無職

13.熟議の当日、会場で記録のために写真撮影を行います。あなたがお顔など個人が特定される写真を撮影されることを望まれない場合、右欄に✓を入れてください。使用用途は参加者相互の閲覧と報告書への掲載です。

ご協力、ありがとうございました。

寄稿

今井俊介

元裁判官、現弁護士
元兵庫大学教授

◆「方丈の庵」を訪ねてみませんか

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつびて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみ)かかと、またかくのごとし。

今から 60 年前、高校で「奥の細道」、「徒然草」、「源氏物語」等と並んで学んだ鴨長明の「方丈記」の出だしである。5 つの生き地獄(安元の大火、治承の辻風、突然の遷都による人心の荒廃、元暦の大地震、養和の大飢饉と疫病)を経験した長明にはどうてい適わないものの、長明の文体には若いころから親しみを覚えていた。社会を観る鋭い眼力、小気味良い文体・・・以来この本を一時たりとも手元から離すことなく、要所要所の文章は空で言えるくらいになっている。

長明よりも長く生きながらえている自分ではあるが、(無情)の意味が少しわかりかけてきたように思う。

長明は下賀茂神社の禰宜の地位に就くべきものであったが、父親が死去し身内の紛争があつて身を引き、日野山の奥に仮の庵を作り、1 人住まいを始める・・・組み立て家具材料は、台車 2 台であったという。

「方丈」とは 3 メートル四方、今で言う 4 畳半の間である。その中に経机、その上に法華経経典、壁に阿弥陀仏、普賢菩薩の絵像、寝床(わらびの穂)、琴・琵琶の楽器があり(「起きて半畳、寝て一畳」、自分ひとりの住処としては何の不足も無く暮らした。

四季折々の自然環境に恵まれ、遙か遠く下のほうに京の街が臨める。山のふもとに番小屋があり、そこに 10 歳になる男の子がいて気があつて一緒に野山を散策し、食料のための野草を採取したりして童心に返っている。

自分の命は天に任せ、四季折々の美しい景色を味わって、誰に気を使うことなく文学と音楽の優雅な生活に没頭している。「愁え無きを愉しみとす」・・・なんとも優雅である。フリードリッヒ大王の建てたサンスーシ(Sanssouci)宮殿もフランス語で「愁え無き」宮殿という意味である。

しかし仏は、長明にお前の心は欲望に染まったままだ、何事においても執着心を持つてはならない、と言われる。そうすると「今、この仮住まいの小家を愛するのにも罪となるのか?」どう考えたら良いのだろう。こんな極限的な生活で、自分がそれで良いと言っているのに仏はそれでもなお許されないのか。長明は自問しながら途方に暮れる。自分の舌に返答を任せた。すると舌は自然に動いて「南無阿弥陀仏」という念仏が口から

出た。これは仏に対する請い願うことの無い無心の境地から出たものである、と答えている。

この夏私は京都下賀茂神社に復元された長明の庵を観に出かけた。酷暑の中、静かなたたずまいで、設計文どおり見事に復元されていた。物陰からふっと長明が現われたような気がした。

「長明さん仏のお諭しをどう考えておられるのですか。俗っぽい私に教えてください。」

「・・・執着心を捨て・・・ただひたすら念仏を唱えなさい・・・・・・・・・・」

(庵は、京阪電鉄「出町柳」駅下車、高野川沿いに北上し、札の森、京都家庭裁判所を過ぎ、広い下賀茂神社境内に入ったすぐ左側の小さな社の境内に復元されている。一度是非訪ねてください。)

参考

マグニチュード7.4と言われる元暦の大地震について

「そのさま、よのつねならず。山はくずれて、河は埋(うず)み、海は傾(かたぶ)きて、陸地(くがち)をひたせり。土烈(さ)けて、水涌き出で、巖割れて、谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどをまどはず。・・・恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震(なみ)なりけりところぞ覚え侍りしか。」

海が傾いて海水が陸地に迫り、浸したという「つなみ」の描写・・・当時一いまから800年前一の人としてはあまりにもクールでリアルです。

地震の恐ろしさをこれほど鮮明に伝える文章に接した事はありません。

今井俊介

元裁判官、現弁護士
元兵庫大学教授

◆「選挙民」を保護して下さい

今年は、選挙権年齢が18歳にまで引き下げられたこと、7月には参議院議員選挙、8月には東京都知事選挙、秋にはアメリカ大統領選挙と選挙の話題が絶えない。選挙権を行使することは民主主義の第1条件であるが、選挙の毎に投票数が公表されその低調さが指摘されてきた。特に地方選挙において数年間にわたるその地方の代表者が投票権者の半数若しくはそれ以下の人の投票で決められるというのでは、これが民主主義かと疑わしくなる。選挙民の良識と奮起に待つほかない。

一方自分自身で投票に行ったものの、選挙管理委員会のミスのため投票が出来なかったあるいは票が無効になったという報道に接すると胸が痛くなる。その責任につきあまり論じられていない。今回の参院選に関して、朝日新聞の報道によると

◎数地域の選挙区で選挙区と比例代表の投票用紙を間違えて渡したため計百数十票の投票が無効となった

◎兵庫県の某市で投票所を管理する課長が寝坊し、投票開始が遅れ、待っていた25人ほどの有権者のうち7、8人が帰ったとみられる

◎某市の小学校の投票所で入場整理券のバーコードを読み取るパソコン3台がすべて故障し、午後6時半ころ市選管に報告があったがこの際トラブル解消を待つ有権者の列ができ、男性の長男(18歳)―高校生―は職員から「システム復旧のめどがたたない」と言われたため投票せずに帰宅した

◎その他期日前投票を済ませた有権者に再度投票用紙を交付したため二重投票がなされた

等驚くべき事態が相次いだ。

僅かな誤数など結果に影響を及ぼさない、とたかを食っているのではあるか?しかし数票差で当落が決せられ、同数のため当落決定手を踏む例は皆無ではない。問題は係員から配布された投票用紙を疑うことなくそれに記入した投票が無効となったという投票者の心情、投票所に赴き、行列してまで投票しようとしたができなかった投票者の心情、これをどうくみとるか?一票を大切にしている投票者の心情を軽視すべきではない。投票所に行かなかった人には諸事情があるにせよ、投票しようとして赴いた人を非難すべきではない。特に今年から18歳になっての初めての投票に意気揚々と投票に臨んだであろうこの高校生にこの事態をどう説明するのか?

『私は・・・今年から一票を投じる権利を持つことが出来たのである。・・・初めて投票所に足を運び投票用紙を渡された時「自分も日本の一国民として政治に参加している」という大きな喜びと、一票を投じるまでの緊張感と投票者としての責任感のためだろう、渡された投票用紙一枚、鉛筆一本が非常に重く感じられた。投票用紙に書くまで少し迷ってしまったが、私は大切な一票を投じた。・・・初めての経験は終わったのだが、後悔が残る部分も少なからずある。・・・日頃から様々なメディアに触れておくべきだった・・・』
(平成 26 年 7 月 26 日朝日新聞『オピニオン&フォーラム』大学生岡田智美さん 19 歳の投書)

この高校生から岡田さんの言う「初めての投票に際しての喜び・責任・後悔」の機会を奪ってしまった。その責任は極めて重いというべきである。願わくはこの少年には次の選挙までには今回の悪感情を捨てて気分を立て直して今後の選挙に臨んでほしい。これらの事例に対処する有効な手立ては見あたらないが、憲法上の権利の実現という公営選挙の一翼を担う選管職員の真摯な反省及びこれらの者に対する指導に待つほかない。

付言

最近の問題事例

- ・ 3 年前の高松選管の白票水増し事件
- ・ 今回の参議院選

市選管が比例区の候補者の得票を 0 と公表 しかし間違いなく投票をしたとする数人がいたとして提訴

「熟議 2016 in 兵庫大学」参加者・アンケート

長時間の熟議での議論、お疲れ様でした。

この調査は記名式のアンケート調査です。閉会後にご記入頂き、グループファシリテーターにお渡し下さい。

アンケートは「熟議 2016 in 兵庫大学」の後、テーマである「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」に対する考え方や熟議に対する印象がどのように変化をしたのかを確認し、政府、自治体への提言等に活用するとともに、今後の熟議事業に活用することをめざしております。

ご回答は選択肢の番号を右欄に記入するか、欄に記述をしてください。

なお、当該調査票は兵庫大学・兵庫大学短期大学部にて厳重に保管し、統計的に処理をした結果のみを公表予定です。調査票にご記入を頂くお名前等は事前のアンケートとの照合を図るため、他の用途に用いることはございません。ご理解の上、ご回答についてお願いいたします。

1. 下記の欄に、あなたのお名前を下記にご記入ください。

お名前	
-----	--

ここからは「熟議 2016 in 兵庫大学」に対しての皆様のご意見等について伺います。

2. 参加されて満足でしたか。1つ選び、右欄に番号を記入してください。

- ① とても満足
- ② まあ満足
- ③ どちらともいえない
- ④ やや不満足
- ⑤ とても不満足

3. 「熟議 2016 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいと思われませんか。1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 積極的に活かしたい
- ② 機会があれば是非活かしたい
- ③ どちらともいえない
- ④ あまり活かしたいとは思わない
- ⑤ どう活かせばよいのかわからない

4. 「熟議 2016 in 兵庫大学」は、これまでご経験のあった話し合いやワークショップなどと比べどのように思われましたか。それぞれの設問について、1つに○を付けてください。

		非常に思う	思う	えんない どちゅうも い	あまり思わ ない	全く思わない
1	熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言をし易かった	5	4	3	2	1
2	熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった	5	4	3	2	1
3	これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた	5	4	3	2	1
4	熟議を通して、テーマ（今、大地震が加古川地域を襲ったら？）について、興味や関心がより高まった	5	4	3	2	1
5	議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった	5	4	3	2	1
6	課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った	5	4	3	2	1
7	最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった	5	4	3	2	1

5. 「熟議 2016 in 兵庫大学」のように市民の行う熟議は、現在の行政でどのように役立つとお考えになりますか。それぞれの設問について、1つに○を付けてください。

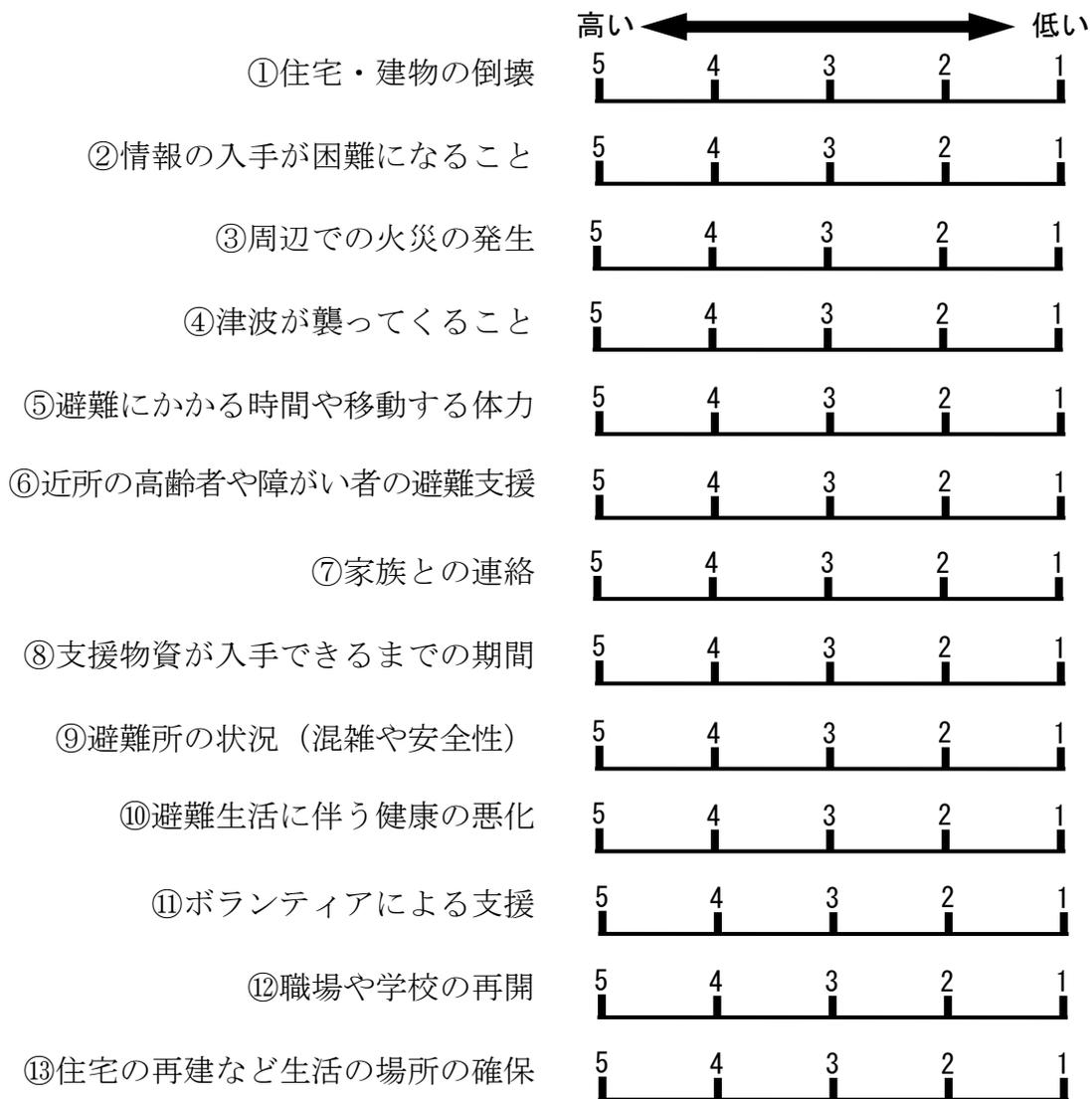
		非常に思う	思う	えんない どちゅうも い	あまり思わ ない	全く思わない
1	市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである	5	4	3	2	1
2	熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい	5	4	3	2	1
3	熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向（民意）を知ることができる	5	4	3	2	1
4	互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる	5	4	3	2	1
5	熟議は少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である	5	4	3	2	1

6. 「熟議 2016 in 兵庫大学」の議論の段階で、あなたにとってはどのような成果がありましたか。最も近いものを下記から1つ選び右欄に番号を記入してください。

- ① 自分の意見を述べることができた
- ② 他の人の意見を聞くことができた
- ③ どのように議論を進めるのか、理解することができた
- ④ 結論や提案を知ることができた
- ⑤ 多くの人と交流することや話をすることができた
- ⑥ その他 ()

テーマの「今、大地震が加古川地域を襲ったら？」について伺います。

7. 今、加古川地域を大地震が襲った、と想定とした場合、次の事柄についてあなたの関心の強さを5段階で表し、あてはまる番号に○を付してください。



8. 加古川地域を大地震が襲った場合を考えて、下記のような考え方についてあなたは、賛成ですか、それとも反対ですか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

		大いに賛成	やや賛成	普通	やや反対	大いに反対
1	地震に備える防災倉庫建設のため公園を縮小するなど防災のためなら住民に不便があっても仕方がない。	5	4	3	2	1
2	科学技術が発展すれば大地震による被害を大きく抑えることができる。	5	4	3	2	1
3	防災は主に自治体や政府の仕事であり、住民の役割は限定されている。	5	4	3	2	1
4	被害を抑えるためには巨大な堤防の建設など目に見える施設や設備に頼る方がよい。	5	4	3	2	1
5	人と人との繋がりや信頼が強いほど、大地震が襲った場合に避難し、生き残ることができる。	5	4	3	2	1
6	高齢者や障がい者など災害弱者の方を最優先で避難させ、安全を確保することが重要である。	5	4	3	2	1
7	避難所では、全くの他人の助けよりも、近くの住民だけで集まって助け合うことの方が安心である。	5	4	3	2	1
8	被災した人は学校や職場に通うよりもボランティアとして地域の復旧に力を優先させるべきである。	5	4	3	2	1
9	大地震の後、支援や復旧のためのボランティアを受け入れる準備が重要である。	5	4	3	2	1
10	大学に大地震に備えるため果たすべき役割がある。	5	4	3	2	1

熟慮の際の講演会についてどのように思われましたか。議論に役立ったかなど、ご感想をお書きください。

今回の熟議についてお気づきの点、ご意見等ご自由にお書きください。

ご協力、ありがとうございました。

自己認識シート(事後評価)

学校名		
科・コース	学年	年
氏名		

※下記に示された各能力に対し、今のあなたに当てはまると思われる「④レベルの1～5を○で囲んでください。

①能力	②能力の説明	③「できること」の具体例					④レベル		
		かなり自信がある	自信がある	ふつう	あまり自信がない	まったく自信がない			
自主性	物事に進んで取り組む力	<input type="checkbox"/> 自分の目標や課題を定め、進んで取り組むことができる <input type="checkbox"/> 物事に対して、興味や関心をもって意欲的に取り組むことができる <input type="checkbox"/> 困難なことでも前向きに取り組むことができる	5	4	3	2	1		
思考力	問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力	<input type="checkbox"/> 現状を正しく理解するための情報収集や分析ができる <input type="checkbox"/> 物事の原因と結果を区分したり、問題の背景を考慮することができる <input type="checkbox"/> 問題を解決するために見通しをもって、順序立てて考えることができる	5	4	3	2	1		
実行力	目標に向かって行動する力	<input type="checkbox"/> 自分の考えをもち、それらを確実に実行することができる <input type="checkbox"/> 設定した目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる <input type="checkbox"/> 困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる	5	4	3	2	1		
対応力	状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力	<input type="checkbox"/> 相手やその場の状況を配慮しながら、柔軟に対応することができる <input type="checkbox"/> 自分の役割と他者の役割を的確に判断し、取り組むことができる <input type="checkbox"/> 物事が良い方向に流れるよう、まわりに働きかけることができる	5	4	3	2	1		
交渉力	人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力	<input type="checkbox"/> 取り決めのための話し合いの場を持ち、合意をめざすことができる <input type="checkbox"/> 協力することの意義や理由を、相手に対して明確に伝えることができる <input type="checkbox"/> 周囲の人に対して効果的に働きかける手段を活用できる	5	4	3	2	1		
会話力	相手と意思疎通(そつう)を図る力	<input type="checkbox"/> 自分の意見を具体的にわかりやすく伝えることができる <input type="checkbox"/> 相手の意見を丁寧に聞き、素直に受け止めることができる <input type="checkbox"/> 相づちや共感により、相手に話しやすい状況を作ることができる	5	4	3	2	1		
計画力	現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力	<input type="checkbox"/> 実現のために段階ごとにすべきことを把握することができる <input type="checkbox"/> 作業の過程を明らかにし、優先順位をつけて計画を立てることができる <input type="checkbox"/> 必要に応じて他者の意見も積極的に計画に取り入れることができる	5	4	3	2	1		
規律性	社会のルールや人との約束を守る力	<input type="checkbox"/> 社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる <input type="checkbox"/> 他者に社会のルールやマナー、また約束を守るように促すことができる <input type="checkbox"/> 異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる	5	4	3	2	1		
運営力	違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力	<input type="checkbox"/> 自分の意見を持ちつつも、他者の意見や立場も理解することができる <input type="checkbox"/> チームの目的を明確にして、メンバーに働きかけることができる <input type="checkbox"/> 異なる立場の人々とも力を合わせて物事を達成することができる	5	4	3	2	1		
貢献性	社会の担い手として役割を自覚して、参画する力	<input type="checkbox"/> 地域や社会に参画することの意義や役割について理解している <input type="checkbox"/> 地域や社会に参画して、自分の役割を果たそうとする意志がある <input type="checkbox"/> 地域や社会の担い手として、使命感をもった取り組みができる	5	4	3	2	1		

熟議終了後の学生同士のグループワーク

学籍番号		氏名	
------	--	----	--

熟議への参加、ご苦勞様でした。これから振り返りのためのグループワークを行います。ワークショップ方式で話し合いをしましょう。

話し合う内容

①グループでは意見を大いに出し合い話したいことを全て話すことができましたか

②参加したメリットはどこにありましたか

グループワークとその発表の終了後、裏面のアンケート調査にお答えください。

今、大地震が加古川地域を襲ったら？

－「熟議 2016 in 兵庫大学」報告書－

発行日 2017年3月

発行 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

〒675-0101

兵庫県加古川市平岡町新在家 2301 番地

TEL 079-427-5111

編集 兵庫大学熟議プロジェクトチーム

印刷 小野高速印刷株式会社

ISBN978-4-9906842-4-2

